

靈界物語 第一五卷 如意寶珠 寅の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍点が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第十五卷』愛善世界社

1996(平成08)年02月03日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

目次

序じよ

凡例はんれい

總説歌そうせつか

第一篇

正邪奮戰せいじゃふんせん

第一章 破羅門ばらもん〔五六八〕

第二章 途上の變とじやうへん〔五六九〕

第三章 十六花じふろくくわ〔五七〇〕

第四章 神の榮光かみえいくわう〔五七一〕

第五章 五天狗ごてんぐ〔五七二〕

第六章 北山川きたやまがは〔五七三〕

第七章 釣瓶攻つるべせめ〔五七四〕

第八章 ウラナイ教けう〔五七五〕

第九章 薯蕷汁とろろじる〔五七六〕

第一〇章 神樂舞かぐらまひ〔五七七〕

第二篇 古事記言靈解こじきことたまかい

第一章 大蛇退治の段をろちたいぢだん〔五七八〕

第三篇 神山靈水しんざんれいすゐ

第二章 一人旅ひとりたび〔五七九〕

第三章 神女出現しんぢよしゆつげん〔五八〇〕

第四章 奇の岩窟くしがんくつ〔五八一〕

第一五章 山の神やまかみ〔五八二〕

第一六章 水上の影すみじやうかげ〔五八三〕

第一七章 窟の酒宴いはやしゆえん〔五八四〕

第一八章 婆々勇ばばいさみ〔五八五〕

第四篇 神行靈歩しんかうれいほ

第一九章 第一天國だいちてんこく〔五八六〕

第二〇章 五十世紀ごじっせいき〔五八七〕

第二一章 歸顯きけん〔五八八〕

第二二章 和と戦わせん〔五八九〕

第二三章 八日の月やうかつき〔五九〇〕

跋文ばつぶん

光陰くわういんの経過けいこわは電波でんぱの如ごとく、この物語ものがたりの口述こうじゆつを始はじめしより、最早もはや満まん六ろくヶ月かげつに十日とをかの日にっすう數すうを缺かくのみに、その間あひだに神事しんじや家事かじその他た訪問者ほうもんしゃに對たいする應答おうたふや、種々しゆじゆざつた雜多ざたの用務ようむに妨さまたげられ意いの如ごとく運はこばず、豫定よていの二十卷にじつくわんを満まん六ろくヶ月かげつかん間に仕上しあげ得えざりしは、口述者こうじゆつしゃとして最もつとも遺憾あかんとする所ところであります。何事なにごとも世間せけん一切いっさいの事ことは豫期よきの如ごとく進すすまないものたることを切せつに感かんじました。

もうこの上うへは梟ふくろの宵企よひたくみは全廢ぜんばいして、只々ただただ惟神かむながらに進すすむ考かんがへであります。開關かいびやくの太初たいしよより數十萬年すふじふまんねんの未來みらいに亘わたりての、際限さいげんなき夢物語ゆめものがたりなれば、確かくたる冊さつ數すうも殆ほとんど豫測よそくする事ことが出來できませぬ。また第十三卷だいじふさんくわんよりは少すこしく、物語ものがたりの形式けいしきと用語ようごが變かはつて居をりますが、何なにとぞ神直日かむなほひ大直日おほなほひに見直みなほし宣のり直なほし、御愛讀ごあいどくあらむ事ことを希望きぼうする次第しだいであります。

大正十一年四月四日

錦水亭きんすゐていにて王仁識

神の心は凡夫の心 凡夫の心は神ごころ

凡例

一、本巻の『總説歌』にもあります通り、物語の中に大分英語が挿入されて來ました。單に英語ばかりでなく、種々の外國語が交つてゐます。

一、本巻の第十一章『大蛇退治の段』は大正十年三月號の『神靈界』誌上に掲載されたことのあるものです。

一、巻末の跋文には生死不二、顯幽一致の眞理に就て説いたものですが、第十一卷の『死生觀』などと參照して讀んで見たならば一層興味がある事であらう。

一、本巻の中に『印度の國』又は『月の國』とあるのは結局同じ事で、印度の國を指したものです。

大正十一年十一月

編者識

總説歌

ひろ 大き 正しき 壬の 戌の年こそ 如月の
つぎ 月の 終りも 恙無く 輝き渡る 言靈の
きよ 清き 神代の 物語 心も 勇む 石の上
ふる 古きを 温ね 新しく 世人に 知らず 神の道
よも 四方に 榮えを 五六七の 世 清き 神代を 來さむと
をし 教への 御子に 勵まされ 走り 出口の 滑らかに
めぐ 巡る 月日の 御示し 虚に 憑り 空に 身を 置きて
あや 綾の 言絲 あつさり と 繰返したる 小田 卷の
かず 數も 三五の 大御 空 暉き 渡る 瑞月 が
くも 雲 押し 分けて 地に 降り 泉 湧き 出る 奇魂
ひ 引き 抜き 來り すら すら と 英語 交りの 物語

新舊用語の玉の塵

かきて集むる言靈は

妙音菩薩の神力と

竝びて尊き觀自在

三十三相また四相

思想の泉滾々と

盡きぬ言靈別の神

靈幸ひましまして

嚴の御魂のいつ迄も

湧き出て竭きぬ水御魂

汲めども盡きず色艶も

味もかはらず常永に

インテレストは彌深く

インフルエンスを布きて行く

イグノランスの瑞月が

アートに迂き身を以て

文士氣取りのアーティスト

ベストを盡し身をつくし

自性の教加持の教

寢物語も十五夜の

つきせぬ巻の緒論を

求めて茲に識しおく。

第一篇 正邪奮戦

第一章 破羅門（五六八）

千早ちはや振ふるる遠とほき神代かみよの物語ものがたり 常夜とこよの暗やみを晴はらさむと

ノアの子孫しそんのハム族ぞくが 中なかにも強つよき婆羅門ばらもんの

神かみの御言みことは常世とこよくに國くに 大國おほくに彦ひこの末すゑの御子みこ

大國おほくに別わかを神かみの王わうと 迎むかへまつりて埃及エチプトの

イホの都みやこに宮柱みやはしら 太ふとしく建たてて宣傳のりつたふ

その言靈ことたまはかすかにも この世よの瀬戸せとの海うみ越こえて

希臘ギリシヤ伊太利イタリア佛蘭西フランス 遂つひに進すすみて小亞細亞せうアジア

メソポタミヤの顯恩郷けんおんきやう 此處ここに根據こんきよを築固つきかため

次第々々に道を布き 更に波斯を横断りて

印度を指して進み来る エデンの河を打渡り

ハムの一族悉く 顯恩郷を中心に

婆羅門教を開きける セムの流裔と聞えたる

コーカス山の神人は 婆羅門教を言向けて

誠の道を開かむと 廣道別の宣傳使

太玉の命を遣はして 顯恩郷に攻めて行く

奇しき神代の物語 十五の巻の入口に

述べ始むるぞ面白き。

此メソポタミヤは一名秀穂國と稱へ、地球上に於て最も豊饒なる安住地帯なり。
羊は能く育ち、牛馬は蕃殖し、五穀果實は無類の豊作年々變る事無き地上の天國
樂園なり。世界は暗雲に包まれ、日月の光も定かならざる時に於ても、この國土
のみは相當に總ての物生育する事を得たりと云ふ。西にエデンの河長く流れ、東

にイヅの河南流して、國の南端にて相合しフサの海に入る。八頭八尾の大蛇、惡狐の邪靈は、コーカス山の都を奪はれ、隨つてウラル山、アーメニヤ危險に瀕したれば、ウラル彦、ウラル姫は、遠く常世國に逃れ、茲に大自在天大國彦の末裔大國別、醜國姫の夫婦をして、埃及のイホの都に現はれ、第二のウラル教たる婆羅門教を開設し、大國別を大自在天と奉稱し、茲に極端なる難行苦行を以て、神の御心に叶うとなせる教理を樹立し、進んでメソポタミヤの秀穗の國に來り、エデンの園及び顯恩郷を根據としたりける。それが爲に聖地エルサレムの舊都に於ける黄金山の三五教は忽ち蠶食せられ、埴安彦、埴安姫の教理は殆ど破壊さるる悲境に陥りたるなり。

茲にコーカス山に坐ます素盞鳴神は、日の出神、日の出別神をして、ハム族の樹立せる婆羅門教の邪神を歸順せしめむとし給ひ、靈鷲山より現はれたる三葉彦命の又の御名廣道別の宣傳使太玉命は、松代姫をコーカス山に残し、夜を日に繼いでエデンの河上に現はれ、エデンの花園を回復して根據とし、ハム族の侵入を防がしめむとし給ひ、太玉命は安彦、國彦、道彦の三柱と共に、エデンの園に宮

殿を造り、ハム族の侵入に備へ居たり。されど河下の顯恩郷は遂に婆羅門教の占領する所となり了りぬ。ここに太玉命は、その娘照妙姫をエデンの花園に残し置き、安彦、國彦、道彦を引連れて、顯恩郷の宣傳に向ひたり。この安彦と云ふは彌次彦の改名、國彦は與太彦の改名、道彦は勝彦の改名せし者なり。

婆羅門の教は、一旦日の出神と僞稱したる大國彦の子にして、大國別自ら大自在天と稱し、難行苦行を以て神の心に叶ふものとなし、靈主體從の本義を誤解し、肉體を輕視し、靈魂を尊重する事最も甚しき教なり。此教を信ずる者は、茨の群に眞裸となりて飛び込み、或は火を渡り、水中を潛り、寒中に眞裸となり、崎嶇たる山路を跣足のまま往來し、修行の初門としては、足駄の表に釘を一面に打ち、之を足にかけて歩ましむるなり。故に此教を信ずる者は、身體一面に血爛れ、目も當てられぬ血達磨の如くなり、斯くして修行の苦業を誇る教なり。八頭八尾、及び金毛九尾、邪鬼の靈は、人の血を視ることを好む者なれば、靈主體從の美名の下に、斯の如き暴虐なる行爲を、人々の身魂に憑りて慣用するを以て唯一の手段となし居るが故に、此教に魅せられたる信徒は、生を輕んじ、死を重んじ、無

限絶對なる無始無終の歡樂を受くる天國に救はれむ事を、唯一の樂みなし居るなり。如何に靈を重んじ體を輕んずればとて、靈肉一致の天則を忘れ、神の生宮たる肉體を塵埃の如く、鴻毛の如くに輕蔑するは、生成化育の神の大道に違反する事最も甚だしきものなれば、この教にして天下に擴充せられむか、地上の生物は残らず邪神の爲に滅亡するの已むを得ざるに至るべく、また婆羅門教には上中の三段の身魂の區別を嚴格に立てられ、大自在天の大祖先たる大國彦の頭より生れたる者は、如何なる愚昧なる者と雖も庶民の上位に立ち、治者の地位に就き、又神の腹より生れたる者は、上下生民の中心に立ち、準治者の位地を受得して、少しの勞苦もなさず、神の足より生れたりと云ふ多數の人民の膏血を絞り、安逸に生活をなさむとするの教理なり。多數の人民は種々の難行苦行を強ひられ、體は棄れ或は亡び、怨聲私かに國內に漲り、流石の天國淨土に住み乍ら、多數の人民は地獄の如き生活を續くるの已むを得ざる次第となりける。邪神の勢は益々激しく、遂にはフサの國を渡り、印度の國迄もその勢力範圍を擴張しつつありしなり。

太玉命は、安彦、國彦、道彦を伴ひ、顯恩郷の東南を流るる渡場に着きぬ。此處には鳶彦、田加彦、百舌彦の三柱の魔神、捻鉢卷をし乍ら、他國人の侵入を防ぐため、河縁に關所を設けて堅く守り居る。

太玉命「ヤア三人の伴人よ、昔此河を渡つた時は、何とも言へぬ清らかな流れであつたが、ウラル山、アーメニヤの悪神は一旦常世の國に逃げ去り、再び顯恩郷に潛かに現はれ來つて、婆羅門教の邪教を開き始めてより、吹き來る風も腥く、山河草木色を變じ、河の流れも亦血泥の如くなつて了つた。吾々は素盞鳴尊の御神慮を奉じ、メソポタミヤの野をして再び秀穗國の樂園に復歸せしめねばならぬ重大なる使命を帯びて來れる以上は、假令如何なる魔神の襲ひ來る共、一步も退くことは出來ない、汝等もその覺悟を以て當られたし。彼の河縁に建てる宏大なる館は、正しく魔神の關所ならむ、汝等三人の内、偵察のため一足先に至つて關所の悪神と交渉を開始し、事急なるときは、合圖の笛を吹け、それまで吾等は此森林に身を潛めて事の成行を窺はむ」

と、太玉命の言葉に、道彦は勇み立ち、

「はばか なが 道彦に此御用を仰付けられたし」

と願ひければ太玉命は、

「御苦勞だが、一足先に探險して呉れよ」

「承知致しました」

と道彦は宣傳歌を歌ひつつ、河縁の關所を指して悠々と進み行く。ピタリと行當

つた關所の大門、道彦は大音聲、

「ヤア、この顯恩郷は昔、日の出神が南天王と稱して支配され、その後鬼武彦そ

の他の神々南天王となつて永久に大神の命を受け守護せられたる聖地なり。然る

に何者の邪神ぞ、顯恩郷を占領し且又この河縁に關所を造るか、一時も早く此門

開け、吾は三五教の宣傳使道彦であるぞ」

と門戸を破れむばかりに打叩く。此時門の外の樹の茂みより現はれ出でたる三人

の男、鋭利なる手槍をしごき、三方より道彦を取りかこみ、眼を怒らせ、身體を

ブルブルと震動させつつ、

「ヤア、汝は三五教の宣傳使なるか、飛んで火に入る夏の蟲、吾槍の切尖を喰へ

よ
」

と三人一度に突いてかかるを、道彦は、或は右に、或は左に、前後左右に、槍の切尖を避け、一人の槍をバタリと叩き落した。一人は驚いて矢庭に河に飛びこみ、對岸に遁れ去つた。ここに道彦は其槍を手早く拾ひあげ、

「サア来い、蠅蟲奴等」

と身構へするや、其勢に辟易してか、二人の男は槍をバタリと大地に投げ棄て、犬突這となつて、

「ヤア、どうも恐れ入りました。重々の御無禮お許し下さいませ」

と泣聲になつて謝罪する。

道彦「其方は婆羅門の眷屬と見ゆるが、何故に斯かる邪神に信従するか、委細包

まず白状せよ」

百舌彦「實の所、吾々は常世の國より大國別の部下なる玉取別に従ひて、荒海を渡り、埃及の地に現はれ、追々進んで此顯恩郷の門番となり、少しの過失より罰せられて遂には河の關所守となりました。決して舊よりの惡徒ではありませんせぬ」

道彦「然らば汝等は顯恩郷の様子を悉皆存じ居るであらう。これより三五教の吾々を顯恩郷の城砦に案内致せ」

百舌彦「そ、それは到底吾々の力には及びませぬ、グズグズして居れば吾々は申すに及ばず、あなた方の御生命も危からむ、此儀ばかりは御容赦下されたし」

道彦「ナニ心配をするな、神變不可思議の三五教の神力を以て如何なる曲津の敵も言向和し、この顯恩郷をして再び古の天國樂土となさしめむ、必ず必ず煩慮するに及ばぬぞ」

田加彦「オイ百舌彦、コンナ方を顯恩郷へでも連れて行つた位なら、それこそ大變だ、鬼雲彦の大神様に、「汝は顯恩郷の厳しき規則を蹂躪する大罪人だ」と云

つて、又もや眞裸にされて、針の雨の御制敗に逢はねばならぬ、ウカウカと物を言ふものではない。もうしもうし三五教の宣傳使様、ここは一つ御思案下さいま

して、雙方好い様に何とか良い解決を付けて戴きたいものです。今河に飛込んで

對岸に渡つた男は、鬼雲彦の眞のスパイを勤めて居る悪人ですから、數多の眷屬や、スレーブを引きつれ、今に如何なる事をし出かすかも分りませぬ、さうして

大變に力の強い奴、顯恩郷でも名代の豪の者です。今あなたに槍を持つて攻めかかり、ワザと敗けた振をして、槍を打棄てたのも、深き計略のあること、あなた方を顯恩郷に引き入れて、罅り殺にしゃうと云ふステージに外ならぬのです。私も彼奴の目玉の光つて居る間は逃げる事も、どうする事も出来なかつた。あなたがお出で下さつたのを幸ひ、顯恩郷を脱出して、どうぞフサの都へ連れて行つて下さい。常世の國にも三五教は澤山に弘まつて居りますが、今日の所はみな隠れての信仰、表面はウラル教の信者と見せかけ、吾々も無理やりに此處へ引き寄せられ、河番を致しては居りますが、その實は三五教の信者で御座います。ウラル教は極端な體主靈從主義で、常世神王や、その他の神々が、黄泉比良坂の戦ひに全部歸順し、夫々御守護に就かれてから後は、大國彦の子孫たる大國別が、何故か又もやバラモン教と云ふ怪體な宗教を開き、表面は三五教の信條の如く靈主體從を標榜し、數多の人民の肉體を傷つけ血を出させて、それが信仰の本義と、すべての者に強ひるのですから堪つたものではありません。けれども何にも知らぬ人民は後の世が恐ろしいと云つて、肉體が如何なる慘虐な目に遭はされても辛抱

して喜んで居ると云ふ有様、私等は一向トント合點が往きませぬ、鬼が大蛇か悪魔の様な神様じゃないかと、何時も胸に手をあて考へては居るものの、一口これを口へ出さうものなら、それこそ大變な事になりますので腹の中に包み祕して、已むを得ずこの河番を致して居ります。幸ひ鳶彦が歸りました、この間に吾々二人を伴れて、どつかへ御逃げ下さい。大變なことがオツ始まりですから……道彦「ナア二、吾々は神の御守護がある、又三人の神徳強き宣傳使を同行し居れば、大丈夫だ、心配致すな」百舌彦「三人のお方は何處に居られますか、どうぞ一時も早くこれへお越しを願ひたう御座います。グズグズ致して居ると鳶彦の奴、今にドンナ事を爲向けて來るか分りませぬから……」

道彦は合圖の笛を吹いた。太玉命外二人は合圖の笛にスワ一大事の突發と、急いで此場に現はれた。河の彼方には騒々しい人聲次第々に高まり來る。

(大正一一・三・三一 舊三・四 松村眞澄録)

此日大先生御吹込の蓄音器圓板到着、夕禮拜後五六七殿に於て參拜者一同に拜

聽せしむ。

（昭和一〇・三・一八 於臺中市高橋邸 王仁校正）

第二章 途上の變（五六九）

太玉命、安彦、國彦、道彦は河向ふの騷々しき物音に頭を傾け暫らく思案に暮れけるが、

太玉命、田加彦、百舌彦、その方は顯恩郷の様子を熟知するものならむ、彼の騷々しき物音は何物なるか、逐一陳辨せよ

百舌彦、あの物音は察する處、顯恩郷の大將鬼雲彦の部下の軍勢、此方に向つて攻め來り、貴下等を召捕らむとの計畫なるべし。一時も早く吾等を助け、此場を立ち退き給へ。三五教の神司ともあるべき御身が名もなき邪神に亡ぼされむは心許なし、早く此場を

と頻りに促す。

道彦「ナニ、敵を見て矛を収め、旗を捲いて【おめ】おめと遁走するは男子の本分に非ず。吾等には退却の二字なし、只進の一字あるのみ。如何なる強敵現はれ來るとも吾等は神の愛護により怯めず臆せず、ステップを進めて敵の牙城に進撃せむ。生死勝敗は問ふ處に非ず」

と勇みの顔色物凄し。

安彦「ヤア敵の先鋒隊は蟻の如く黒山を築き向ふ岸に現はれたり。サア之からは吾々が神力を試す時節の到來、田加彦、百舌彦、船の用意をせよ」

百舌彦「船の用意は何時でも出來て居ますが御覽の通りの大敵、假令鬼神を挫ぐ神勇ありとも多勢に無勢、殊更味方は身に寸鐵を帯びず、敵は凡有精銳の武器を持つて押し寄せ來る、勝敗の數戦はずして明かなり。時を移さば彼等は此濁流を渡り吾等を生捕にせむは火を睹るよりも瞭なり。退いて徐に策を講じ、捲土重來の期を待たせ給へ」

太玉命は大口を開けて高笑ひ、

太玉命「アハ、ハ、ハ、運は天にあり、吾は善言美詞の言靈の力を以て、寄せ来る敵を片つ端から言向和し、昔の顯恩郷に回復せむ。先んずれば人を制するとかや、此期に及んで躊躇逡巡するは御神慮に反す」

と言ふより早く身を躍らして船に跳び込んだ。五人は止むを得ず太玉命に従いて船中の人となつた。さしもに廣きエデンの河の殆ど中流に進みし時、向岸より雨と降り来る急箭に百舌彦は胸を射抜かれ忽ち水中に顛落した。田加彦は此態を見て大に驚き、ザンブと許り水中に身を躍らして飛び込んだ。残り四人の宣傳使は此河の水心を知らず、船は忽ち流れのまにまに下方に向つて濁流に押されて矢を射る如く流れ行く。敵の矢は雨の如く注ぎ来る。忽ち船は河中の岩石に衝突し木葉微塵に粉碎された。

太玉命は辛うじて向岸に着いた。安彦、國彦、道彦は濁流に呑まれた儘行衛不明となつて仕舞つた。嗚呼三人の運命は如何に？

太玉命は濡れたる衣を絞り日に乾かし、悠々として宣傳歌を歌ひ顯恩郷の敵の巢窟に向つて單騎進入するのであつた。日は西山に傾いて黄昏の空暗く一點の星

さへ見えぬ闇夜は刻々と身邊を包んで来た。宣傳歌の聲は暗を縫うて遠近に響き渡る。此時天地も割るる許りの音響聞ゆると見る間に眼前に落下した大火光がある。不圖見れば眉目清秀容貌端麗なる一柱の神人、身體より電光の如き火氣を放出し乍ら太玉命に向ひ、

「吾は天照大神の第四の御子、活津彦根神なり。汝大膽にも唯一人惡逆無道の婆羅門が根據に進入し來る事、無謀の極みなり。岩石を抱いて海中に投ずるよりも危し。一時も早く、もと來し道へ引返せよ」

太玉命「汝は活津彦根神とは全くの詐りならむ。鬼雲彦に憑依する八岐大蛇の變化か金毛九尾の變身か、惡鬼の變化ならむ。吾は苟くも大神の神使、この顯恩郷をして昔の天國樂土に復歸せしむるは吾大神より委託されたる一大使命なり。不幸にして神軍利有らずとも、そは天命なり、要らざる構ひ立て聞く耳持たぬ」と暗の道を一目散に前進する。活津彦根神は、

「然らば汝の勝手にせよ」

と云ふかと思れば姿は忽ち消えて、山の尾上を渡る嵐の音のザワザワと聞ゆるの

みなり。太玉命は漸く暗に慣れ、臃氣乍らも探り探り進む事を得た。

この時雲の扉を開いて十三夜の月は輝き初めた。太玉命は敵の城砦を指して又もや宣傳歌を歌ひつつ進む行く。向ふの方より數十の黒き影現はれ來り、前後左右より一柱の太玉命を取り圍み、

鳶彦「ヤア我こそは大國別の命の從者にして、鳶彦と言ふ顯恩郷きつてのヒーロー豪傑、汝無謀にも唯一柱顯恩郷に進み來るとは生命知らずの大馬鹿者、サア尋常に手を廻せ」

と言ふより早く槍の切突を月光に閃かし乍ら四方よりつめ掛來る。進退維谷りし太玉命は懷中より柄の短き太玉串を取り出し、左右左と打ち振れば豈圖らむや鳶彦以下の黑影は拭ふが如く消え失せて塵だにも留めざりける。

太玉命「アハ、何事も惡神の計畫は斯くの如く脆きものだ、吾が所持する太玉串の神力に依つて斯くも消え失せたるか。ア、有難い有難い、三五教の大

神！
と大地に平伏してその神恩を感謝するのであつた。太玉命は不圖頭を上ぐれば此

はそも如何に、コーカス山に残し置きたる妻、松代姫を始めエデンの園を守る最愛の一人娘、照妙姫は高手小手に縛しめられ猿轡を箱まされ、鬼の如き番卒數多に引き立てられ命の前を萎々と稍伏し目勝ちに通り返ぎむとす。太玉命はハツと驚き、二人の顔を息を凝らし目を見張り眺めて居た。松代姫、照妙姫は猿轡を箱められたる爲めにや、此方に向つて目を瞬き、何事か訴ふるものの如くであつた。

この時黒頭巾を被りたる大の男、田蠨の如き目を剥き出し、

「ヤア其方は三五教の神司太玉命に非ずや、汝速に此河を渡り再び顯恩郷を窺はざるに於ては汝の妻子を赦し遣はさむ。之にも屈せず益々顯恩郷に向つて進入するに於ては、汝が最愛の妻子を今此場に於て斃殺しにして呉れむ、返答如何に」

太玉命「サアそれは……」

男「サア、サア如何じや、返答聞かせ」

太玉命「サア、それは……」

男「サア、サアサア」

と掛合ふ。この時如何しけむ、松代姫の猿轡はサラリと解けた。

まつよひめ 松代姫「ヤア貴方は吾夫太玉命に在さずや、妾は今やバラモン教の兇徒に捕へられ、無限の苦を受け今又斯くの如き憂目に會ふ。如何に夫にして勇猛絶倫に在せばとて、顯恩郷には鬼雲彦を始め、無数の強神綺羅星の如く固く守り居れば到底衆寡敵せず一時も早く自我心を折り、當郷を退却し妾母子の命を救はせ給へ」とワツと許りに泣き伏しにける。照妙姫の猿轡も如何しけむバラバラと解けたりける。

照妙姫「ア、戀しき父上様、妾は敵の爲めに無限の苦を嘗め、譬へ方なき侮辱を受け悲哀に沈む今の境遇、何卒妻子をお救ひ下さいませ」

と又もや其場に泣き倒るるにぞ、太玉命は合點行かずと雙手を組み稍少時思案に暮れて居た。松代姫、照妙姫は頻りに兩手を合せ、

「吾夫よ、吾父よ、一時も早く貴方は我を折り、バラモン教の命に従ひ妾を助け此顯恩郷を退かせ給へ」

と前後より命に取り縋り泣き叫びける。

男「サア、太玉命、汝が所持する太玉串を吾等に渡し降參致せば、汝が妻子の生

命を助けて遣はす。如何じや、妻子は殺され吾身を捨てても神の道を進まむとす
るか、返答聞かせ」

と詰め掛る。太玉命は心に思ふ様、

「焼野の雉子、夜の鶴、子を憐まざるはなしと聞く、況して最愛の妻諸共に非業
の最後を遂ぐるを「みす」みす見捨てて敵城に進むは如何に神命なればとて忍び
難し。さりながら松代姫は斯くの如き悪魔にオメオメと捕縛せらるるが如き卑怯
者に非ず。又吾が娘の照妙姫はかかる女々しき言を吐く娘に非ず、まさしく之妖
怪變化の所爲ならむ」

と又もや神言を奏上し、太玉串を懐中より取り出して左右左と打ち振つた。忽ち
雷鳴轟き電光石火、四邊眩き以前の神人此場に下り来るよと見る間に松代姫、照
妙姫を始め數多の敵の影は煙の如く消え失せ、野路を吹き渡る風の音のみザワザ
ワと聞ゆるのであつた。

太玉命「アハ、ハ、ハ、又欺しやがつたな」

(大正一一・四・一 舊三・五 北村隆光録)

第三章 十六花〔五七〇〕

太玉命は路傍の岩に腰打掛け、天津祝詞を聲低に奏上しつつあつた。百鳥の聲は遠近の林に聞え始めた。東の空はほんのりとして曉の色刻々さえて来た。數多の魔神の聲は森の彼方にザワザワと聞え来る。油斷ならじとキット身構する折しもあれ、馬の蹄の音いと高く、岩彦、梅彦、音彦、龜彦、駒彦、鷹彦は矢を射る如く此場に馳來り、太玉命に向つて、

岩彦「ヤア貴下は太玉命の宣傳使、私等はフサの都に於て、日の出別神の命に依り、貴下と共に顯恩郷を言向和さむと、エデン河の濁流を渡り、漸く此處に走せ參じたり、一行の人々は如何なりしか」

太玉命「ヤア思ひも寄らぬ貴下等の御入來、いよいよこれより敵の牙城に唯一人進撃せむとする場合で御座る。斯の如き曲神の砦を言向け和すは吾一人にて充分なり。折角の御出馬なれど、貴下は速かにフサの都に引返し、夫々の神業に就かせられたし」

岩彦いはひこ「それはあまり無謀むぼうの極きはみと申まをすもの、吾々われわれは折角せつかく山川さんせんを渡り漸やうやく此處ここに立向たちむかひ、目前もくぜんに敵てきを見みながら空むなしく駒こまの頭かしらを立て直なほすは、男子だんしの本分ほんぶんにあらず。願ねがはくは吾等われらを此神戦このしんせんに参加さんかさせ給たまへ」

梅彦うめひこ以下いかにん五人ごにんの宣傳使せんでんしは、口くちを揃そろへて從軍じゆうぐんせむことを強要きやうえうした。

太玉命ふとたまのみこと「然しからば是非ぜひに及およばぬ、御苦勞ごくらう乍ながら御加勢ごかせいを願ねがふ」

早速さつそくの御承知ごしやうち、有難ありがたし辱かたじけなし」

と一行いつかう六人ろくにんは、太玉命ふとたまのみことの後あとに従ついて、山深やまふかく進すすみ入いる。この場ばの光景くわうけいは繪卷物えまきものを見るみ如ごとくであつた。

進すすむこと一里半許いちりはんばかり、此處ここには深ふかき谷川たにがはが横よこたはつて居ゐる。その幅殆ど十間許はばほとんじっけんばかり、ピタツと行詰ゆきつまつた。七人しちにんの宣傳使せんでんしは暫しばひく此處ここに駒こまを繋つなぎ、少憩せうけいし、如何いかにして此溪谷このたにを對岸むかふに渡わたらむかと協議けいぎを凝こらしつつありき。谷たにの向側むかひがはには、オベリスクの如やうな帽子ぼうしを被かぶつた半鐘泥棒はんしょうどろぼう的てきジヤイアントが七八人しちはちにん、巨眼きよがんを開ひらき、大口開おほぐちあけてカラカラと打笑うちわらひ、

「ワハ、ハ、ハア、どうぢや、何程肝なにほどきもの太玉命ふとたまのみことでも、この谷川たにがはを渡わたることは出で

來まい此川底を熟視せよ」

と指す。見れば川底には、空地なき程、二尺許りの鋭利なる鎗の穂先が、幾百千ともなく、土筆の生えてる様に直立して居る。此川に落ちるが最後、如何なる肉體も芋刺となつて亡びねばならぬシーンを現はして居る。太玉命はカラカラとうち笑ひ、

「これしきの谷川を恐れて、三五教の宣傳が出来ようか、美事渡つて見せうぞ」と云ふより早く一同に目配せした。一同は心得たりと馬に跨り、太玉命は岩彦の背後に飛乗り、忽ち四五丁許り元來りし道に引返し、又もや馬首を轉じ鞭をうちつつ、幅三間許りの谷合を勢に任せて一足飛に飛び越えた。巨大の男は驚き慌て、雲を霞と逃歸る。又もや續いて梅彦、鷹彦、龜彦、その他一同矢庭に駒に鞭つて、難なく此谷川を打渡り、後振り返り見れば豈圖らむや、谷川らしきものは一つもなく、草茫茫々と生え茂る平野であつた。

太玉命「アハ、ハ、ハ、又瞞しをつた、各方能く氣を付けねばなりません、此前途は假令如何なる溪谷ありとも平氣で涉ることに致しませうかい。神變不可思議

の妖術を使ふ悪魔の巢窟ですから、最前も吾妻の松代姫、及び娘照妙姫と變じ、吾精神を鈍らさむと致せし魔神の計略、飽く迄も誑かられない様に氣を付けて参りませう」

と先に立つて進み行く。一同は馬を傍の樹木に繋ぎ、山と山との溪道を、宣傳歌を歌ひ乍ら山深く進むのであつた。行く事數里にして、莊嚴なる城壁の前にピタリと突當つた。朱欄碧瓦の宏壯なる大門は建てられ、方尖塔の如き冠を被りたる四五のジャイアント門を堅く守つて居る。太玉命一行は忽ち門前に立現はれ、吾れこそは三五教の宣傳使、當國には八岐大蛇、金狐、惡鬼の邪靈に憑依されたる鬼雲彦夫妻立籠り、不公平極まる神政を布き、この顯恩郷をして殆ど地獄の境地と變ぜしめたるは、天恵を無視する大罪なれば、吾は是より鬼雲彦を善道に歸順せしめむため、大神の命を奉じて宣傳に向うたり。速かに此門扉を開けよ」と言葉厳しく詰り寄る。門番は面喰ひながら、

「暫くお待ち下さいませ、あなた方のエデン河を御渡りありしより城内は上を下への大混雜、如何にして貴下等を満足せしめむやと、鬼雲彦の大將に於かせられ

ても千辛萬苦の御有様、やがて開門のシグナルの鐘が響き亘りますれば、それ迄ゆるゆる此處に御休息願ひたし。必ず必ず敵對申す者は一柱も居りませぬ。御安心下さいませ」

音彦「ヤア其方は何ぢや彼ぢやと暇取らせ、其間に戦闘の準備を整へ、吾々を塵殺せむとするの計略ならむ。ソナ ヨタリスクは聞く耳持たぬ、速に此門開けよ」

門番「これ程申上げてもお疑晴れずば、御自由に御這入り下さいませ」

と云ふより早く、潜り門を開いて、門内に姿を隠して了つた。

鷹彦「一つ吾々が還元の藝當をやつて、城内隈なく偵察をやつて見ませう」

と忽ち靈鷹と變じ、中空に舞上り、顯恩城の内外を隈なく偵察し、もとの大門に

現はれ來り、中より門を外し、門扉を左右に開いた。

鷹彦「サアサア是から吾々一同が活動のステージだ。轡を並べて七人がスパーク

を散らして、奮戦するの時や迫つた、ヤア面白し面白し、太玉命續かせ給へ」

と先に立つて進み行く。數多の敵は左右に、蟻の集ふが如く整列して、七人が通

行を敵對もせず、歡迎もせぬと云ふ態度にて見まもつて居る。

岩彦「ヤア各方、あれ丈澤山の敵が吾々に抵抗も致さず、各自手槍を携へ乍ら目

送しつつあるは、合點の行かぬ次第で御座る。餘り軽々しく進み過ぎて、四方八

方より取圍まれなば、如何とも出来ない様な破目に陥るかも知れませぬぞ、これ

は一つ考へねばなりませんまい」

太玉命「ナニ躊躇逡巡は三五教の大禁物、生死も、勝敗も、皆神の手に握られあ

れば、運を天に任せ、行く所迄行つて見ませう」

と太玉命は先に立つて進み行く。鬼雲彦の御殿の前に近付く折しも、瀟洒たる白

木の門をサラリと開いて悠々現はれ来る十數人の窈窕嬋研たる美人、スノーの如

き纖手を揉み乍ら、

「これはこれは三五教の宣傳使様の御一行様、能うマア遙々お越し下さいました。

鬼雲彦の御大將の御命令に依りて、妾一同はお迎へに参りました。譯の分らぬ者

共が種々と御無禮を働きましたでせう、何事も足らはぬスレーブの爲す業と、廣

き厚き大御心に見直し聞直し下さいまして、ゆるゆると奥殿にて御休息の上、尊

き御話をお聞かせ下さいませ、御大將も定めて御満足の事と存じます』
と言葉スガスガしく、満面に笑を湛へて慇懃に挨拶する。太玉命以下の宣傳使は、張合拔けたる如き心地し乍ら、美人一行の後に伴いて、奥殿に悠々と進み入るのであつた。

宣傳使の一行は、顯恩城の奥殿に深く進み入つた。山海の珍味は整然として竝べられてあつた。美人の中の最年長者と見ゆる、眼涼しく、背の高き愛子姫は溢るる許りの愛嬌を湛へ、

「これはこれは宣傳使様、能うこそ遠路の所入らせられました。顯恩郷の名産、桃の果實を始め、種々の珍らしき物を以て馳走を拵へました、お腹が空いたので御座いませう、どうぞ御遠慮なくお召あがり下さいませ。果實の酒も澤山御座いませう、御遠慮なく……サアお酌をさして頂きますせう」

と云ふより早く、杯を太玉命に獻した。

「ヤア思ひがけなき山野河海の珍味、御芳志の段恐れ入りました。それに就いても當城の御大將鬼雲彦に面會の上、戴きませう」

愛子姫あいこひめ「御大將おんたいしやうは只今ただいま御出席ごしゅつせきになります、それまでに御寛りごゆると御酒おさけを飲あつてお待ちま下さいませくだ」

岩彦いはひこ、大口おほぐちを開あけて、

「アハ、ハ、ハ、どこ迄までも脱ぬかりのない悪神あくがみの計略けいりやく、太玉命ふとたまのみことの御大將おんたいしやう、迂闊うつかり酒さけでも口くちに入れるものなら、それこそ大變たいへんだ。七轉八倒しちてんぱつたう、苦悶くもんの結果けつくわ、敢あへなき最期さいごを遂とげにけりだ。ナア梅彦うめひこサン、あなたはどう思おもひますか」

梅彦うめひこ「吾々われわれは五里霧中ごりむちうに彷徨はうくわうの爲體ていたらくだ、夢ゆめに牡丹餅ぼたんもち、食くつた牡丹餅ぼたんもちはダイナマイトの御馳走ごちそうか、何が何なにんだか、サツパリ不得要領ふとくえつりやうだ。ナア鷹彦たかひこサン、あなたはど

う思おもふか」

鷹彦たかひこ「先まづ十六人じふろくにんの別嬪べつびんさまから、毒味どくみをして頂いただきませう。其上そのうへでなくば到底安たうていあん心しんが出来できない、ナア愛子姫あいこひめさまとやら、さう願ねがひませうか」

愛子姫あいこひめ「オホ、ハ、ハ、御心配ごしんぱい下さいませな、然しからば妾わたしがお先さきへ失禮しつれい致しますいたす」
と杯さかづきに酒さけを注ついで、グツト飲のんだ。

岩彦いはひこ「妙々めづめづ、これや心配しんぱいは要いらぬらしいぞ、ナア音おとサン、駒こまサン………百味ひやくみの飲おん

食を心持よく頂きませうか」

音彦、駒彦は頭を左右に打振り、默然として俯むくのみであつた。奥の襖を引開けて悠悠として現はれ来る鬼雲彦夫婦、目鼻が無かつたら、萬金丹計量か、砂つ原の夕立か、山葵卸の様な不景氣な面付に、所々色の變つたアドラスの様な、膨れ面をニユツと出しドス聲になつて、

「これはこれは三五教の宣傳使様、當城は御聞及の通、靈主體従を本義と致すバラモン教の教を立つる屈強の場所、三五教は豫て聞く靈主體従の正教にして、ウラル教の如き體主靈従の邪教にあらず、バラモン教は茲に鑑る所あり、ウラル教を改造して、眞正の靈主體従教を樹立せしもの、是れ全く天の時節の到來せるもの、謂はば三五教とバラモン教は切つても斷れぬ、教理に於て、眞のシスター教であります。どうぞ以後は互に胸襟を開いて、相提携されむ事を懇願致します」

と御面相にも似合はぬ、御叮嚀な挨拶をするのであつた。太玉命はこれに答へて、

「何分宜しく、今後はシスター教として提携致したい。夫れに就いては互に長を採り短を補ひ、正を取り偽を削り、神聖なる大神の御心に叶ふべき教理を立てた

きもので御座います。吾々一行、當城に參る途中に於て、妖怪變化の數多出没するは何故ぞ。バラモン教は斯の如き妖術を以て世人を誑惑し、信仰の道に引き入れむとするや、其意の在る所承はりたし』
と稍語氣を強めて詰問的に出た。鬼雲彦、事もなげに打笑ひ、
「アハ、ハ、ハ、左様で御座いましたか、諺にも云ふ、正法に不思議無し、不思議有るは正法にあらず。此メソポタミヤは世界の天國樂土と聞えたれば、甘味多き果物に惡蟲の簇生するが如く、天下の惡神此地に蝟集して、妖邪を行ふならむ、決して決して靈主體從のバラモン教の主意にあらず。正邪を混淆し、善惡を一視されては、聊か迷惑の至りで御座います。又中には教理を能く體得せざる者多く、或パートに依りては羊頭を掲げて狗肉を鬻る宣傳使の絶無を保證し難し。何教と雖も、創立の際には總て、ハーモニーを缺くもの、何卒時節の力を待つてバラモン教の眞價を御覽下さい。創立間もなき吾教、到底ノーマルに適つた教理は、容易に完成し難いのは三五教の創立當初に於けると同様でありませう、アハ、ハ、ハ、』
と腮をしゃくり、稍空を向いて嘲笑的に笑ふのであつた。鬼雲姫は言葉優しく、

「これはこれは三五教の宣傳使様、能くこそ御訪問下さいました。教の話になりますと自然堅苦しくなつて、お座が白けます、お話はゆつくりと後に承はることに致しませう。心許りの馳走、何卒御遠慮なくお食り下さいませ、決して毒などは入つては居りませぬから………」

岩彦「これはこれは思ひがけなき御饗應、吾々の如き乞食宣傳使は、見た事も御座らぬ山野河海の珍味、有難く頂戴致しませう」

鬼雲彦は、愛子姫、幾代姫に向ひ、

「ヤア愛子姫、幾代姫の兩人、遠來の珍客を犒う爲、汝等二人はアルマの役を勤め、舞曲を演じて御目に掛けよ」

「アイ」

と答へて、兩女は白扇を開き、春野の花に蝶の狂ふが如く、身も軽々しく長袖を翻して、前後左右に踊り狂ふた。顯恩城の上役、數十人は此場に現はれ、酒に酔ひて、或は舞ひ、或は歌ひ、遂には無禮講と變じ、赤裸になつて踊り狂ふ。七人の宣傳使は心許さず、表面酒に酔ひ潰れたる態を装ひ、他愛もなく腮の紐を解い

て、或は笑ひ、或は歌ひ、餘念なき體を装うて居た。不思議や數十人の顯恩城の上役の面々は、忽ち黒血を吐き、目を剥き、鼻水を垂らし、さしもに廣き殿内を、呻吟の聲と諸共に、のたうち廻り、顔色或は青く、或は黒く、赤く、苦悶の息を嵐の如く吹き立てた。十六人の美人は、「てんで」に襷を十文字にあやどりて、人々の介抱に従事した。七人の宣傳使もお附合に、苦悶の體を装ひ、縦横無盡に、
『苦しい苦しい』

と言ひ乍ら、跳廻るのであつた。此態を見て鬼雲彦夫妻は高笑ひ、

『アハ、ハ、ハ、汝太玉命、吾計略にかかり、能くも斃ばつたな、口汚き宣傳使、毒と知らずに調子に乗つて、命を棄つる愚さよ。吁、さり乍ら味方の強者を數多殺すは殘念なれど、斯の如き豪傑を倒すには、多少の犠牲は免れざる所、……ヤアヤア數多の家來共、汝等は毒酒に酔ひ今生命を棄つると雖も、バラモン教の神力に依つて、榮光と歡喜とに充てる天國に救はれ、永遠にバラモンの守り神となるべきステーチなれば心残さず歸幽致せ、……ヤア三五教の宣傳使、豫が身變不思議の神術には恐れ入つたか、最早叶はぬ全身に廻つた毒酒の勢、ワツハ、ハ、ハ、ハ、

苛しい者だなア」

此時愛子姫、幾代姫、五十子姫、梅子姫は、鬼雲彦に向ひ、柳眉を逆立て、懐

劍を抜き放ち、四方より詰めかけながら、

「ヤア汝こそは悪逆無道の鬼雲彦、前生に於ては龍宮城に仕へ、神國別の部下と

ならむとして、花森彦命に妨げられ、是非なく鬼城山の棒振彦が砦に参加し、神

罰を蒙つて歸幽したる悪魔の再来、復び鬼雲彦と現はれて、この顯恩郷に城砦を

構へ、天下を紊さむとする悪魔の帳本、思ひ知つたか、妾十六人の手弱女は、神

素盞鳴の大神の密使として、汝が身邊に仕へ、時機を待ちつつありしを悟らざり

しか、城内の豪の者は残らず、汝の計略の毒酒に酔ひて、最早命旦夕に迫る。七

人の宣傳使には、清酒を與へ、元氣益々旺盛となり、一騎當千のヒーロー豪傑、

最早斯くなる上は遁るるに由なし、汝速に前非を悔いて三五教に従へよ……返答

如何に」

と前後左右より、鬼雲彦夫婦に向つて詰めかけた。残り十二人の美人は、又もや

手に手に懐劍スラリと引抜き、

「サアサアサア鬼雲彦夫婦、返答如何に」

と詰めかくる。鬼雲彦は此は叶はじと、夫婦手に手を執り、高殿より眼下の掘を
目にかけて、ザンブと許り飛込んだ。パツと立ち上る水煙、見るも恐ろしき二匹の
大蛇となつて雲を起し、雨を呼び、風に乗じ、東方波斯の天を目かけて、蛇々と
して空中を泳ぐが如く姿を隠した。

太玉命一行は、十六人の女神に向ひ、

「ハテ心得ぬ貴下等の振舞、これには深き様子のある事ならむ、逐一物語られた
し」

と叮嚀に頭を下げ、両手をついて挨拶するを、愛子姫は言葉淑やかに、

「妾はコーカス山に現れませる、神素盞鳴尊の娘、愛子姫、幾代姫、五十子姫、
梅子姫、英子姫、菊子姫、君子姫、末子姫の八人姉妹にて候、これなる八人の乙
女は妾の侍女にして、浅子姫、岩子姫、今子姫、宇豆姫、悦子姫、岸子姫、清子
姫、捨子姫と申す者、バラモン教の勢力旺盛にして、天下の人民を苦しめ、邪教
を開き生成化育の惟神の大道を毀損する事、日に月に甚しきを以て、吾父素盞鳴

大神は、妾八人の姉妹に命じ、各身を賣し、或は彼が部下に捕へられ、或は顯恩郷に踏迷ひたる如き装ひをなして此城内に運び入れられ、惡魔退治の時機を待ちつつありしに、天の時到りて太玉命は、父の命を奉じ當城に現はれ給ひしも、全く吾父の水も漏らさぬ御經綸、又八人の侍女は、今迄鬼雲彦の側近く仕へたるバラモン教の信徒なりしが、妾達が晝夜の感化に依りて、衷心より三五教の教を奉ずるに至りし者、最早變心するの虞なし。太玉命の宣傳使よ、彼等八人の侍女を妾の如く愛し給ひて、神業に参加せしめられよ[□]

と淀みなく述べ立つる。太玉命は首を傾け、感歎の聲をもらし、
「[□] 吁、宏遠なるかな、大神の御經綸、吾等人心小智の窺知すべき所にあらず。大神は最愛の御娘子を顯恩郷に乘込ましめ置き乍ら、吾れに向つて一言も漏らし給はず、顯恩郷に進めと云ふ御託宣、今に及んで大神の御神慮は釋然として解けたり。吁、何事も人智を棄て、神の命のまにまに従ふべしとは此事なるか、ア、有難し、辱なし[□]」

とコーカス山の方に向つて、落涙し乍ら手を合せ神言を奏上しける。六人の宣傳

使しを始はじめ、十六人じふろくにんの女性ぢよせいは、コーカス山ざんに向むかつて兩手りやうてを合あはし、太玉命ふとたまのみことと共にとも天津あまつのりのりと祝詞そつじやうを奏上そうじやうした。忽たちまち何處いづくともなく、馥郁ふくいくたる芳香はうかうしへん四邊つを包つつみ、百千ひやくせんの音樂おんがくりうりやう嚶うとして響ひびき渡わたり、紫むらさきの雲天くもてんより此場このばに下くだり來きたり、容色ようしよく端麗たんれいなる女神めがみの姿すがた、中空ちうくうに忽こつぜん然ぜんとして現あらはれ、

「われは妙音菩薩めうおんぼさつなり、汝なんぢが行手ゆくてを守まもらむ、益々ますます勇氣ゆうきを勵はげまし神業しんげふに參加さんかせよ。

また、安彦やすひこ、國彦くにひこ、道彦みちひこを始はじめ、田加彦たかひこ、百舌彦もずひこの五人ごにんは、一旦いつたんエデン河がはの濁流だくりうに溺おほれて歸幽きいうせりと雖いへども、未まだ宿世しゆくせの因縁いんねん盡つきず、イツの河邊かはべに於おいて、汝等なんぢらに邂逅かい逅こせば彼かれも亦また再びふたたび神業しんげふに參加さんかするを得えむ。一時いちじも早はやく、太玉命ふとたまのみことは本城ほんじやうに留とどまり、愛子姫あいこひめ淺子姫あさこひめは太玉命ふとたまのみことの身邊しんべんを保護ほごし、其他そなたの宣傳使せんでんしと女人めがみはエデン河がはを渡わたりて、イツ河がはに向むかへ、ゆめゆめ疑うたがふ事こと勿なかれ」

と云いふかと思みれば、姿すがたは搔かき消けす如ごとく、百千ひやくせんの音樂おんがくは天てんに向むかつて追々おひおひと消きえて行ゆく。一同いちどうは聲こゑする方ほうに向むかつて恭敬きやうけい禮拜らいはいし、感謝かんしゃの意いを表へうしたりける。

(大正一一・四・一 舊三・五 松村眞澄録)

第四章 神の榮光〔五七一〕

鬼雲彦夫妻は、美酒に強か酔ひ潰れ、苦悶の體にて堀に飛び込み、八頭八尾の大蛇の正體を現はし、風雲を捲き起し雲に乗つてフサの國の天空を指して姿を隠した。後に残りし勇將猛卒は、知らず識らず毒酒に酔ひ瀕死の状態に陥り、呻吟苦悶の聲目も當てられぬ慘状なりければ、太玉命は之を憐み、直に天に向つて解毒恢復の祈願を籠め、懷中より太玉串を取り出して、左右左に打ち振れば、不思議や神徳忽ち現はれ、残らず元氣恢復して命を始め七人の前に集まり來り、感謝の涙に咽びながら、助命の之恩に、心の底より悔改め、合掌恭敬到らざるなく、欣喜雀躍手を拍ち足をあげ、面白き歌を謠ひ、躍り狂うて、宣傳使の一行を犒ひける。

愛子姫は立ち上り、感謝の歌を謠ふ。

惠も深き顯恩の

里に現れます珍の御子

あななひけう 三五教の宣傳使 心も廣き【太玉】の
 かみ 神の命の現はれて 元の神代に造らむと
 いは 岩より固き誠心の 御稜威は開く【梅】の花
 おと 音に名高き麻柱の 教の花は萬代の
 かめ 龜の齡と諸共に 榮え榮えて春【駒】の
 いさ 勇むが如き神の國 教の花も【鷹】彦の
 かみ 神の恵の【愛子】姫 千代に榮えよ【幾代】姫
 こころ 心いそいそ【五十子】姫 香り床しき【梅子】姫
 やみよ 闇夜を照す【英子】姫 救ひの道を【菊子】姫
 たみ 民を治むる【君子】姫 ミロクの御代の【末子】姫
 かみ 神の恵も淺からぬ 心涼しき【淺子】姫
 いは 岩より固き【岩子】姫 救ひの神は【今子】姫
 をし 教へ尊き【宇豆】姫の 榮え嬉しき【悦子】姫
 あなた 彼方に渡す【岸子】姫 心の色も【清子】姫

百の罪咎【捨子】姫

十まり六の瑞靈

【神素盞鳴】の大神の

勅畏み顯恩の

園に巢くへる曲津見を

言向け和はし神國を

常磐堅磐に立てむとて

心を盡し身を盡し

晨夕と送るうち

神の恵の隈もなく

輝き渡り今此處に

救ひの道の宣傳使

【太玉】命の現れまして

メソポタミヤの秀妻國

いと平けく安らけく

知ろし召す世は來りけり

あな有難や尊やな

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

大地は沈む事あるも

顯恩郷は永久に

【南天王】の古に

返りて御代は末永く

花も開けよ實も結べ

稲麥豆粟黍稗も

豊に穰れ神の國

羊毛山羊も牛馬も

濱の眞砂の數多く

殖えよ榮えよ永久に
常磐の松のいつまでも

色は褪せざれ變らざれ
神が表に現はれて

善と惡とを立て分ける
此世を造りし神直日

心も廣き大直日
直靈の御魂現はれて

顯恩郷に塞がれる
怪しき雲を吹き拂ひ

月日は空に澄み渡り
夜毎閃く星の影

常磐堅磐に健くあれ
あゝ惟神神惟

御靈幸倍在しませよ
神の御靈の幸倍て

ためしも夏の木草まで
色麗しく賑しく

榮ゆる御代に【愛子】姫
【幾代】變らぬ五十鈴の

川の流れは永久に
濁らであれよ【五十子】姫

三千世界の梅の花
開き匂へる【梅子】姫

榮え久しき【英子】姫
十六辨の花匂ふ

【菊子】の姫や【君子】姫
【末子】の姫に至るまで

神かみの生うみます【宇豆うづ】姫ひめの 御み稜いづよろこ威よろこ喜よしこぶ【悦子よしこ】姫ひめ

尊たふとき御み代よも【岸子きしこ】姫ひめ エエデデンの河かはに身みの罪つみを

洗あらひ清きよめて【清子きよこ】姫ひめ 【安彦やすひこ】【國彦くにひこ】【道彦みちひこ】の

果は敢かなく命いのちを【捨子すてこ】姫ひめ 助たすくるすべも荒波あらなみの

底そこに潛くぐりて今いま此處ここに 現あらはれ來きたる【今子いまこ】姫ひめ

深ふかき流ながれも忽たちまちに 神かみの惠めぐみに【淺子あさこ】姫ひめ

心こころも固かたき誠まごころ心の 千代ちよも動うごかぬ【岩子いはこ】姫ひめ

巖いはほの上うへに松まつさへも 生おふるためしもある御代みよは

エエデデンの河かはに沈しづみたる 三あななひけう五ご教けうの宣せん傳でん使し

嬉うれしき顔かほを三柱みはしらの 時ときこそあらめ片時かたときも

いと速すみむやけく皇神すめかみの 惠めぐみの光ひかりに照てらされて

【百舌彦もずひこ】【田加彦たかひこ】 諸もろとも共に 救すくはせ給たまへ天津神あまつかみ

國津神くにつかみ達たち八百萬やほよろづ 萬よろづの願ねがひをかけまくも

畏かしこき神かみの引ひき合あはせ 遇あうて嬉うれしき五柱いっはしら

いづの靈みたまや瑞靈みづみたま 三五さんごの月つきの照てるまでに

救すくはせたまへ顯恩郷けんおんきやう 遍あまねく渡わたる峰みねの上うへ

谷底たにそこまでも尋たづねつつ 神かみの教をしへに麻柱あななひの

誠まことの御子みこを救すくへかし 誠まことの御子みこを救すくへかし

畏かしこき神かみの御前おんまへに 遙はるかに拜をがみ奉たてまつる

遙はるかに祈いのり奉たてまつる

と、祈願きぐわんを籠こめて聲こゑも涼すずしく歌うたひ舞まひ納をさめけり。 太玉神ふとたまのかみはツト立たつて感謝かんしゃの歌うたを

歌うたひ初はじめたり。

コ一カス山さんに現あれませる 瑞靈みづのみたまの大神おほかみの

勅畏みこかしこみ琵琶びはの海うみ 渡わたりて四方よもを宣傳せんでんし

稜威いづづの言靈ことたま遠近をちこちに 響ひびき渡わたらせ進すすみ來くる

吾言靈わがことたまの勢いきほひに 四方よもの草木くさきも靡なびき伏ふし

エデンの園に蟠まる

八岐大蛇や醜神の

醜の砦を言向けて

【松代】の姫が生みませる

光愛たき【照妙】姫の

貴の命を花園の

主宰の神と任けつつも

吾は進んでエデン河

河の傍をつたひ来る

安彦國彦道彦の

三の御魂の宣傳使

引き連れ急ぐ渡場に

漸々此處に月の空

濁流漲るエデン河

如何はせむと思ふうち

川の關所を守り居る

田加彦鳶彦百舌彦が

砦を兼ねし川館

先づ【道彦】を遣はして

事の實否を窺へば

鋭利な槍を扱きつつ

【道彦】目蒐けて突きかかる

神の恵を身に浴びし

珍の御子なる【道彦】は

攻め来る槍の切尖を

右や左に引きはづし

挑み戦ふ上段下段

火花を散らして戦へば

耐り兼ねてか一人は
忽ち川へ【鳶彦】の

猫に追はれた小鼠の
跡を掻き消す水の中

漸々岸に泳ぎつき
數多の手下を引き連れて

岸邊をさして迫り来る
吾等一行は勇み立ち

用意の船に身を任せ
棹を横たへ中流に

進む折しも流れ来る
征矢に當りて【百舌彦】は

忽ち河中に轉倒し
後白浪と消えて行く

泡立つ浪の【田加彦】も
またもや【ザンブ】と河中に

身を躍らして消え失せぬ
棹を取られし渡し船

操るよしも浪の上
嗚呼如何にせむ船體は

忽ち岩に衝突し
木葉微塵に成り果てて

御伴に仕へし宣傳使
姿も三つの魂は

河の藻屑となり果てぬ
吾はやうやう川縁に

神に守られ這ひ上り
群がる敵の諸聲を

目當に獨りとぼとぼと

進む折しも前方に

怪しの男の此處彼處

現はれ來り槍の穂を

揃へて一度に攻め來る

何の容赦も荒男

太玉串の神力に

恐れやしけむ雲霞

煙となつて消え失せぬ

忽ち月は大空の

雲の帳を押し分けて

四邊を照す嬉しさに

勇氣を鼓して進み行く

山河幾つ打ち渡り

進む折しも忽ちに

電光石火雷の

轟き渡る折からに

現はれ出でし神人は

嚴靈の大神の

第四の御子と現れませる

【活津彦根】の大御神

吾は魔神と怪しみて

争ふ折しも大神は

吾等が不明を笑ひつつ

天空目蒐けて歸ります

又もや怪しき物蔭に

眼をみはりつつ窺へば

【松代】の姫や【照妙】の姫の

貴うづの命みことは可憐いぢらしく 高たか手てや小こ手てに縛しばられて

口くちには堅かたき猿ざる轡くつわ 合がてん點ゆ行ゆかずと玉たま串ぐしを

取とるより早はやく打うち振ふれば 魔ま神がみは神しん威ゐに恐おそれけむ

又またもや泡あわと消きえ失うせぬ 路ろ傍ぼうの嚴いはほに腰こしを掛かけ

息いきを安やすらふ折をり柄からに 駒こまの蹄ひづめの夏かつかつと

音おと勇いさましく進すすみ來くる 又またもや曲まが津つの奸かん計けいと

心こころを配くばる折をりからに 思おもひがけなき「梅うめ彦ひこ」や

「音おと彦ひこ」 「駒こま彦ひこ」 六ろく人にんの 三あな五な教ひけうの宣せん傳でん使し

心こころも勇いさみ榮さかえつつ 轡くつわを並ならべて山やま奥おくに

進すすむ折をりしも八やち千ひる尋るの 「つと」 行ゆき當あたる谷たにの川かは

川かは幅はば廣ひろく橋はしもなく 行ゆき惱なやみたる折をり柄からに

運うん命めい天てんに任まかせつつ 一ひと鞭むちあてて飛とび越こゆる

此こ處こに佇たたずむ荒あ男らをとこ 此この勢きほひに辟へ易えきし

山やま奥おく指さして逃にげ歸かへる 後あと振ふり返かへり眺ながむれば

谷と見えしは薄原

又もや魔神の計略に

かかりて心痛めしか

嗚呼恥かしも恥かしも

眼暗みし宣傳使

確と腹帯締め直し

心の駒に鞭打ちて

息せき切つて二里三里

要心堅固の大門に

ピタリと當つた七人は

暫し思案に暮れけるが

茲に「鷹彦」宣傳使

早速の早業靈鷹と

變じて中空翔廻り

敵状残らず視察して

再び此處に舞ひ下り

さしもに固き大門を

苦もなく左右に押し開く

吾等一行七人は

勇氣を起して前進し

城砦目蒐けて近よれば

魔神の軍勢は進み行く

道の左右に堵列して

袖手傍觀その様は

心得難きシーンなり

又もや來る十六の

天女に擬ふ姫神は

吾等の一行を慇懃に

奥殿指して誘ひ行く
怪しみながら来て見れば

山野河海の珍肴は
處狭きまで竝べられ

木實の酒も澤々に
供へ足らはす此場面

鬼雲彦の大統領
忽ち此場に現はれて

表裏の合ぬ神の宣り
いと賢しげに述べ立つる

如何はしけむ城内の
勇將猛卒忽ちに

顔色變じ黒血吐き
悶え苦しむ訝かしさ

吾も毒酒に酔ひしれて
苦しきさまを装ひつ

七轉八倒するうちに
鬼雲彦の統領は

仕済ましたりと出で来る
神の賜ひし玉串を

そつと取り出し左右左と
魔神に向つて打振れば

鬼雲彦や妻神は
黒雲起し風に乗り

雨に紛れて逃げて行く
四四十六の花の春

未ださきやらぬ乙女子の
蕾の唇開きつつ

一伍一什の物語

聞いて胸をば撫で下し

神の恵を嬉しみて

善言美辭の神嘉言

唱ふる折しも大空に

微妙の音楽鳴り渡り

芳香四邊を包むよと

思ふ間もなく現はれし

妙音菩薩の御姿

天地に響く言靈の

その勳功ぞ尊けれ

その勳功ぞ畏けれ

と歌ひ終つて元の座につきぬ。

茲に太玉命は愛子姫、淺子姫を留めて侍女となし、顯恩郷の無事平穩に復する

まで蹕を留むる事となつた。城内の勇將猛卒も太玉命の神力に服し、忠實に三

五教を奉じ茲にメソポタミヤの樂土は、エデンの花園と相俟つて、再び元の天國

を形成る事となりける。

バラモン教を守護する邪神を始め、其の宣傳使は遠くペルシヤに渡り、印度に

向つて教線を擴充する事となり、岩彦、梅彦、音彦、駒彦、鷹彦の宣傳使を始め、

幾代姫、五十子姫、梅子姫、英子姫、菊子姫その他一同の女性は、顯恩郷を去つて四方に、三五教の宣傳使となつて出發する事となりける。
(大正一一・四・一 舊三・五 加藤明子録)

第五章 五天狗〔五七二〕

天津御空はドンヨリと薄墨を流せし如き光景に引換へ、青葉茂れる大野原を三五教の宣傳使、治まる御世も安彦や、榮え久しき松の五六七の國彦や、聖き教の道彦は、口から先に生れたる百舌彦、田加彦伴ひて、とある川邊に着きにけり。
安彦「ヨー又此處は一途の川だ。此前に來た時は、大變に清潔な水が涼々として流れてゐたが、夕立もせないのに今日は又如何した拍子の瓢箪やら、素敵滅法界な泥水だ。此の川を少しく上れば松竝木があつて、其の根下に二間造りの瓦葺きの立派な婆の館がある筈だ。のう道彦、貴様も未だ記憶に残つて居るだらう」

道彦「夢だつたか幻だつたか判然せないが、二人の婆が、鋭ぎすましたる出刃庖丁を振上げて、前後左右より斬つてかかりよつた時のシーンは、今思ひ出しても慄とするよ。移り替はるは浮世の習ひ、此の清潔な一途の川でさへも、泥川と變化した今日だから彼の鬼婆だつて、さう何時迄も同じ所に固着してゐる筈はなからう。遠の昔に磨滅して了つて影も止めず、訪ふ者は川風の音、波の響位なものだらうよ。さう心配するには及ばぬさア」

安彦「誰が心配をして居るものか。今度は彼の婆が居つたら、一つ掛合つて見ようと思ふのだ。なア國彦、お前は未だ經驗が無いから、非常に恐ろしい鬼婆だと思ふであらうが、それはそれは素敵滅法界な美人だよ。花の顔色、月の眉、スノーの膚、言ふに言はれぬ逸物だ。年は寄つたと言つても未だ残りの色香も失せない姥櫻、手折る可き價は確にアリソの海だ。深い契を結び昆布、俺とお前と二人の仲は、二世も三世も先の世かけて、一途の川の涸れる迄、たとへ大地は沈むとも……とノロケテ、現を脱かすやうな別嬪だ。安彦、道彦の兩人が仲人をして一つ合衾の式を擧げさしてやりたいものだよ」

國彦「莫迦にするない、モウ忘れたか。俺も貴様と一所に探險したではないか。俺だつて未だ三十男の花の盛りだ。散りかかつた姥櫻を女房にせよとは、あまり男を輕蔑するにも程がある。男が四十で女が三十ならば、些とはハ―モニーも取れるであらうが、十餘りも老うとると云ふ様な女房は御免だよ。女旱りも無い世の中に、あまり冷笑して呉れるない。ア、何となく身體中がぞうぞうして來た。何うやら娑婆の空氣とは見當が違ふやうだ。一體此處は何國の何と云ふ所だらう」
安彦「エデンの河の渡場で船を濁流に流して、河中に衝立つた岩石に船を打當て、木葉微塵に碎いた結果、濁流漲る水底に暫時蟄居したと思つたら、何時の間にかコンナ大野ヶ原を横斷し、又もや一途の川の岸邊に着いたのだ。吾々一同は一旦土左衛門となつて、冥途の旅を今やつてゐるのだ。四邊の狀況が違ふのも當然だよ」

國彦「困つたことだなア。併し好い死時だ。可愛い女房も無ければ子もなし、別に娑婆に執着心も無いのだから、何うだ一つ奮發して幽冥界を跋渉し、宣傳歌でも歌つて三途の川の鬼婆や、數多の鬼共を片端から言向和し、聽かぬ奴は笠の臺

を縦横無盡にチヨン斬つて、地獄開設以來のクーデターを開始してやらうではな

いか。エーンアーン

安彦「猛烈な勢だなア、併し乍ら今から喇叭を吹くと、先へ往つてから原料が缺乏して了うよ」

國彦「ナ―二舊は與太彦と云つた此方だ。俺の言つたことは決してノンセンスでは無い。深遠微妙の意味が含んであるのだ。マア細工は粒々仕上げを見て下され

よ。開いた口が閉まらぬ、牛糞が天下をとるのは今度のことであるぞよ。世界の人民改心致されよだ」

安彦「又汽笛を吹き出しよつた。コンナ奴と道連れになると騒がしくて烏も燕も雀も百舌鳥も、みな逃げて了ひよるから、幽界旅行も面白く無いワイ。好い加減

に沈黙せぬかい」
國彦「乃木將軍の猛烈なる攻撃に會ひ、南山の砲臺は漸く沈黙したが、二百三高

地の與太彦砲臺は仲々以て容易に沈黙せない。一度生命をステツセルの吾々、旅順口の片顚がむしられようとも、さう【やす】やすと休戦の喇叭は吹かないから、

其の積りで貴様達も吾輩に従軍するのだ。一途の川の二人婆の館まで突貫々々。

全隊進め、一二三四五

と自分一人、人員を數へ乍らコムパスに油をかけて、急足滑車を走らせた。安彦、

道彦、田加彦、百舌彦は一齊に手を揚げ、聲を限りに、

四人「オーイオーイ」

と呼び止める。國彦は耳にもかけず尻ひとつからげて、トントンと驀地に婆の館を

指して走り行く。勢餘つて半丁ばかり通り越して了ひ

「ヨ一國彦サンの御威光に恐れてか、一途の川の二人婆も共に何處とも無く煙散

霧消の大惨事とけつかるワイ。それにつけても安彦、道彦その他の足弱共、何を

愚圖愚圖してゐるのだらうか。大方此風に吹き飛ばされて、夏の蚊が夕立に逢う

たやうに木の葉の裏に、しがみついてゐるのだらう。ア、弱蟲だなア」

と得意になつて、モノログを囀つてゐる。此聲を聞いてか、松の根下の小屋の中

より澁紙のやうな手を出し、皺枯れ聲を出して、

「オーイ　オーイ」

と招く婆の聲、

國彦「ヤーあまり馬力をかけ過ぎたので、婆の家を見落したと見えるワイ。ナア
ンダ、安彦の言つたのとは餘程年の寄つた穢い婆だ。大方彼奴の娘の中婆のこと
だらう。ナンデモ二人の婆だと云ふから一人の方は若い奴に違ひない。どうれ、
首實檢と出掛けてやらうかい」
と又もやテクテクと松の下の川縁の小屋を指して引返し來たり、門口を三つ四つ
打叩き乍ら、

國彦「吾こそは音に名高き與太彦ドツコイ國彦の宣傳使、眼涼しく眉秀で、鼻筋
通り口元凜として苦味を帶び、英氣に充ちたる古今無雙のヒーロー豪傑、一途の
川の渡守を致す鬼婆の娘の中婆、天下の人民を救け、幽界の身魂を救ふ三五教の
宣傳使だ。何時迄も斯様な所に熏つて霜枯れ近き無味乾燥なる生活を致すより、
國彦サンと手に手を握つて死出三途は申すにおよばず、地獄の釜のドン底迄探險
と出掛けたら如何だ。併し乍ら中婆の四十女に限るぞ。皺くちや婆は眞平御免だ
と妙な手振り、足つきし乍ら戸の外に踊つて居る。中より十七八歳の優しき女の

聲、

「何れの方かは存じませぬが、能くマアこの茅屋を御訪ね下さいました。御供の衆がございませう、何卒一度に御這入り下さいませ」

國彦「イヤーナンダ。この茅屋を能う御訪ね下さいましたナンテ、四十女どころか、十七八歳の優しい鈴蟲のやうな、味はひのある玉の御聲、これだから旅はよいもの、辛いもの、辛いと思へばコンナ好いことがある。それに就て迷惑千萬なのは、安彦、道彦其他の道連れだ。聲の色から考へても、古今無雙の逸物と見える。美人か、お多福か、婆か、娘かと云ふことは聲の色に現はれてゐるものだ」
と呟き乍ら、武者窓からソツと竊むやうに覗いて見た。娘は濡れ烏のやうな髪を結び窓の方を背にしてゐるから、その容貌はしかとは分らぬが、其の姿勢の何處となく優美なるに肝を潰し、

「アア成るは嫌なり、思ふは成らずだ。冥途へ來てもコンナ奴が居るのならば、娑婆よりも幾何か楽しみだ。娑婆に居つた時には、お多福の奴に肘鐵の亂射に會ひ男を下げて自暴腹になり、終には宣傳使にまでなつたが、冥途と云ふ所は、ナン

トしたマア好い所だらう。夢ではあるまいか……アー矢張り夢でも現でも無い、擬ふ方なき美人の姿、コンナ女をスウヰートハートとするのは、男として別に恥づることは無い。先方の奴屹度俺の顔を見て目を細くしよつて、此の國彦サンにラブするは請合ひの西瓜だ。皆の奴が出て来るまでに一つ交渉をやつて見ようかなア

安彦、道彦外二人は、國彦の後を追うて走り來たりしが、其邊は何となく俄に暗くなり、ナンダか途の眞中に横はる影がある。

安彦「オイオイ三人の連中、ナンダか此處に妙な者が横はつてゐる。どうだ一つ貴様の金剛杖を貸して呉れ。こづいて見るから」
と言ひ乍ら、俄造りの節だらけの杖を百舌彦の手より引奪り、力を籠めて亂打する。

國彦「アイタ、アイタ、痛いワイ痛いワイ、貴様は可愛らしい娘に似合はぬ酷い奴だ。ソナ節だらけの杖を以て此色男を打擲するとは何事だ。コリヤ婆、貴様も一つ挨拶をせぬかい。娘に斯様な亂暴を働かして置いて、親の役が濟むか。

これでも一途の川の渡守か

安彦「オイオイ國公、ナンド、此闇黒に横になりよつて、ナニ寢言を言つて居るのだ、しつかりせぬかい」

國彦「ヤー貴様は安彦ぢやないか、娘の癖に俺を打擲しよつた。貴様一つ仇を討つてくれないか」

安彦「莫迦、恍けない」

と云ひ乍ら二つ三つ背中をウンと言ふほど叩きつける。國彦は漸く起き上り、

國彦「アーア妙だ、冥途へ來てからでも夢を見るものかなア」

安彦「定つたことだ。世の諺にも幽冥に夢見る心地と云ふことがある。ワ

ハ、ハ、ハ、

小屋の中より婆の聲、

婆「コラコラ此前に出てうせた二人の耄碌、出刃の合戦が未だ残つて居るぞ、サ

ア此處で引返して尋常に勝負を致せ」

安彦「オー貴様はホシホシ婆だな。蛙の日干のやうな面をしよつて、何時迄も何

時迄も此の茅屋に腐り罌が網に附いたやうに平太張りついてゐるのか、粘着性の強い婆だな

婆「定つたことだい、粘着性が強い婆だよ。貴様もモ一此處へ藜桶に足を突込んでやうなものだ。藜に蠅がとまつたも同然、一寸でも動けるなら、サア動いて見よ。今貴様等の身體に電氣をかけてやるから」

と云ひ乍ら、柱に装置せる握手をグイグイと押した。五人は適度に間隔を置いて圓形を畫き、クルクルと舞ひ乍ら、陸地を離れて次第々々に中空に昇り行く。

國彦「ヤ一文明の利器と云ふ悪戯者がコンナ所まで跋扈しよつて、亡者の身體を中天に捲き揚げるとは面白い。ヤイ婆の奴、モットモットハンドルを押して、俺を此儘天國まで上げるのだよ。無形の空中エレベーター式だ。面白い面白い、天國へ往つたら貴様の功に免じ、蓮の臺に半座を分けて待つてゐてやらう。併し乍ら皺くちや婆は此限りに非ずだ。若い奴若い奴」

と呶鳴り乍ら、次第々々に中空に捲き揚げられた。天上に捲き揚げられたる五人の男は上空の烈風に煽られ空氣稀薄のため、殆ど息も絶えなむ許りの苦痛を感じ

た。五人は一時に聲を振り絞り、

「オーイオーイ、一途の川の婆アサン、ヤーイ、マア一度元の場所に降して呉れ。オーイオーイ」

と叫んで居る。婆の聲は蚯蚓の泣くやうに幽かに聞えて来た。

婆「三五教の宣傳使及び二人の馬鹿者共、胴體無しの烏賊上り、宣傳使たるの貫目は全然ゼロだ。元の所にをり度くばモー少し汝が身魂に重味を附けよ。さすれば自然に元の所に下り来るだらう。塵芥の如き軽々しき薄片な魂を以て大地を闊歩するとは分に過ぎたる汝の振舞、蚊、蜻蛉にも均しき蠅蟲奴等、今レコード破りの大風が吹くぞ、風のまにまに太平洋か印度洋の【ごもく】となつて鱧の餌食になつたがよからう。アハ、ハ、ハ、オホ、ハ、ハ、ハ」

と千切れ千切れに半ば毀損した遠距離電話のやうに聞えて来た。五人は風の波に漂ひ乍ら互に堅く手を握り、右に左に上に下に縦になり横になり、頭が下になり上になりしつ、ふわりふわりと何處ともなく風のまにまに散り行く。

忽ち空中に電光閃き雷鳴轟き渡ると見るまに、電氣に打たれた如く五人は手を

繫つないだ儘まま、鳥とりも通かよはぬ山さん中に矢やを射いる如ごとく一直線いつちよくせんに落らく下かするのであつた。フツト
氣きが附つけば高かう山ざんと高かう山ざんの谷たに間まを流ながる細ほそ谷たに川がはの細まい砂ごみの上うへに、五ご人にんは枕まくらを列ならべて横よこはつてゐたのである。

これは妙音菩薩めうおんぼさつがエデンの河かはの河下かはしもにて漁夫れうしと變へんじ、五ご人にんの男をとこを網あみを以もつて救すくひ
上あげ、息いきを吹ふきかけコーカス山ざんの大天狗だいてんぐをして空くう中ちゆうに引ひ摺つみ、メソポタミヤの北きた
野山のさん中ちゆうに誘いざなひ來きたり、谷川たにがはの砂すなの上うへにどつかと下おろして自みづからは密ひそかにコーカス山ざんに立たち
歸かへつたのである。

嗚呼ああくし奇あきびなる哉かな、神かみのはたらき、
嗚呼ああくし有あ難あき哉かな、大神おほかみの救すくひよ。

(大正一一・四・一 舊三・五 外山豊二録)

第六章 北山川きたやまがは (五七三)

誠まことを教をしふる四方よもの國くに

廣道ひろみち別の宣傳せんでん使し

太玉命ふとたまのみことに従したがひて

ハムの一いち族ぞく婆羅門ばらもんの

教をしへを築きつき立て籠こもる

顯恩城けんおんじやうに向むかはむと

エデンの河かはの渡わたし場ばに

來きたる折をりしも枉神まががみの

篠しのつく征そ矢やに惱なやまされ

或あるは倒たふれ又また溺おほれ

木葉こつば微塵みぢんに船ふねは割われ

一いち同どうエデンの河底かはそこに

沈しづみつ浮うきつ河下かはしもの

巖いはほの間に挟はさまれて

露つゆの玉たまの緒を緯いとれし

其折柄そのをりからに何處どこよりか

微妙びめうの音おん樂がく聞きえきて

救すくひの網あみを下おろしつつ

妙音めうおん菩薩ぼさつの御守みまもりに

生命いのち拾ひろひし五人ごにん連づれ

忽たちまち來きたるコーカス山ざんの

神かみの使つかひの鷹津神たかつかみ

小脇こわきに抱かかへ中空ちうくうを

東ひがしを指さして翔かけり行ゆく

安彦やすひこ、國彦くにひこ、道彦みちひこや

百舌彦もずひこ、田加彦たかひこ、五人ごにん連づれ

神かみに救すくはれ北山きたやまの

千尋ちひろの谷間たにまの砂原すなはらに

投げ下されて目を醒まし 一途の川に向ひたる

夢の思ひ出恐ろしく 身慄ひし乍ら起上り

四方の景色を眺むれば 此はそも如何に此は如何に

山と山とに包まれし 細谷川の川の邊に

枕を竝べて睡るこそ 實に訝かしの限りなり

實にも不思議の極みなり。

國彦「アア恐ろしい事だつた。膽玉がすつての事で洋行する處だつたよ。マア

マア御蔭様で何うやら無事着陸した様な鹽梅だ。能う不思議な事があればあるも

の、エデンの河を渡る時に肝腎のスクリウを押し流し、乗つたる船は波にまかせ、

生た心地も無く生命からがら神言を奏上する間もなく、無殘や吾船は激流の中に

立てる大岩石に向つて大衝突を試み脆くも木つ葉微塵の厄に遭ひ、太玉命の宣傳

使を始め吾々一同は水の藻屑となつたと思へば際涯もなき草野の原を五人連れ、

テクテク彷徨ひつつ濁流漲る邊にやつと到着し、怪しき婆の妙な器械に操られ、

木の葉の如く天上高く捲き上げられ、生命も今や絶えむとする折しも大空に轟く
雷の聲、稻妻の光に打たれて地上に眞逆様に墜落し、骨も身も木つ葉微塵になつ
たかと思ひきや、不思議にも生命を助かつたは全く大神様の御守護だ。何しても
不思議な事だ、吾々は飽迄も生命のつづく限りお道の爲に驀進せなくてはならな

いなア

安彦「何とも知れぬ吾々の境遇、夢に夢見る心地がして現界に居るのか、幽界に
居るのかまだ判然と確信がつかぬ哩、ヤイ道彦サン、お前は如何思ふか、矢張冥

土の旅をやつて居るのではあるまいかなア

道彦「サア斯うなつて來ては薩張り見當が付かない。現幽混淆、判然と區劃がつ

いてゐないのだからお前の考へも決して馬鹿げた事とは斷定出來ないなア

百舌彦「モシモシ宣傳使様、彼處に生つて居る香具の木の實を一つ採つて食つて

見ませう。幽界の果實は總て苦味があると言ふ事ですから、若しも苦かつたら矢

張り幽界でせうし、酢っぱかつたら矢張り現界でせう。私が一つ木登りをして採

つて來ませうか

國彦「それは良い考へだ、早く登つて採つて見て呉れ。然し乍ら比較的大木だ。枝も高いなり用心して登らないと、今の夢の様に空中滑走を演じて樹下の岩石に頭蓋骨を衝突させ、又もや幽界の行脚をする様な事ではつまらないから十分に氣をつけて呉れ給へ」

百舌彦「私は顯恩郷に於ても猿の百舌公と言はれた位木登りの名人ですから、決して決して御心配はして下さいますな」

と言ふより早く猿の如くに大木の枝高く登り行く。田加彦は樹下に立寄り、「オーイ、百舌彦、どうだ。酸っぱいか、苦いか、甘いか、どちらだ」

百舌彦は「むし」つて皮を剥き、グツと頬張り又「むし」つては皮を剥き、咽喉をならせ乍ら眼を細くして肩をすくめて食つて居る。さうして皮を掴んでは、樹下に口を開けてポカンとして見上げてゐる田加彦の顔を目蒐けて打ちつける。

田加彦「オーイ、百舌公、どうだ、味は、……早く返答せぬかい」

百舌彦「八釜しい哩、二十や三十食つたつて味が分るかい。酸いか、甘いか、苦いか、三つの中だ。坂の下の子供ぢやないが、お上り遊ばすのを悠然と見て御座

れ。ア、酸い事も無い、甘い事も無い、苦い事も無い。何だか言ふに言はれぬ味^{あぢ}がする、ア、生^{いき}とればこそコンナ美味^{おい}しい物が澤山^{たくさん}に頂^{いただ}けるのだ。オイ田加公^{たかこう}、貴様^{きさま}も一つ登^{のぼ}つて食^くつたら如何^{どう}だ」

田加彦^{たかひこ}「俺^{おれ}は貴様^{きさま}の知^しる如^{ごと}く身^みが重^{おも}くつて木登^{きのぼ}りは出^で来^きないのだ。屋根^{やね}葺^ふきの手^て傳^{たひ}と木登^{きのぼ}りする奴^{やつ}は馬鹿^{ばか}の中^{なか}の大關^{おほせき}と言^いふ事^{こと}だ。オイ馬鹿^{ばか}の大關^{おほせき}、一つ美味^{うまさう}相^あな奴^{やつ}を落^{おと}さぬかい」

百舌彦^{もずひこ}「仲々^{なかなか}一寸落^{おと}さぬ哩^{わい}、落^{おと}したら最後^{さいご}、貴様^{きさま}が皆^{みな}拾^{ひろ}つて食^くつて仕舞^{しま}ふから落^{おと}し損^{そん}だ。それ程^{ほど}欲^ほしけりや猿蟹^{ざるかに}合戦^{がっせん}ぢやないが、瘡蓋^{かさぶた}のカンカンの石^{いし}の様^{やう}な奴^{やつ}を落^{おと}して與^やらうか」

と云^いふより早^{はや}く田加彦^{たかひこ}の頭^{かしら}を目^め蒐^がけてピシヤツと打^うちつける。田加彦^{たかひこ}は烈火^{れつくわ}の如^{ごと}く憤^{いきどほ}り手頃^{てごろ}の石^{いし}を拾^{ひろ}つて樹上^{じゆじやう}目^め蒐^がけて速射^{そくしゃ}砲^{ぱう}的に打^うちつける。百舌彦^{もずひこ}は青^{あを}き果實^{このみ}を「むし」つて田加彦^{たかひこ}目^め蒐^がけて打^うちつける、此場^{このば}に一場^{いちぢやう}の戦鬪^{せんとう}は開^{かい}始^しされた。百舌彦^{もずひこ}は飛^とび來^くる石^{いし}を右^{みぎ}に賺^すかし左^{ひだり}に賺^すかし、樹上^{じゆじやう}を猿^{ましら}の如^{ごと}く驅廻^{かけまは}り足踏^{あしふ}み外^{はづ}しスツテンドウ………、田加彦^{たかひこ}が頭^{かしら}の上^{うへ}に眞逆^{まっさかさま}様に唸^{うな}りを立^たてて落^{らく}下^かした。田加彦^{たかひこ}

はヤツと一聲、體を躲した途端に蛙をぶつつけた様に百舌彦は大地に大の字になつてウンと一聲、手足を伸ばしビリビリビリ、眼の玉はくるくるくる、一言も發せず、フンのびて仕舞つた。

安彦「ヤア大變だ、酸いとも苦いとも判断のつかぬ中に落命されては吾々も益々方向に苦しむ譯だ。何とかして甦らせ確な答を聞き度いものだ。オイ田加彦、百舌彦は貴様が殺した様なものだ、此責任は貴様にあるぞ。何とか工夫を致さぬかい」

田加彦「鷹も百舌も一所には寄せぬぞよと神様が仰有ります。私は田加彦、到底百舌の世話は出来ませぬ」
安彦「何を愚圖々々言つてるのだ、早く水でも呑まして與れ、死んだら如何致すか」

田加彦「一旦吾々一同は死んだのですから滅多に死ぬ様な事はありません。死んだ奴の晝寢でせう、マア悠然目の醒める處まで放つといたら如何でせうか。大分に百舌公も空中飛行の疲勞が出て居るから、マアマア大目に見てやつて下さい

な
□

道彦 『ヤア國彦サン、安彦サン、どうも吾々は未だ現界の人間らしい、百舌公を此儘にして置けば本當に死んで仕舞ひます。何卒一同揃うて神言を奏上してやつて下さいな』

三人は異口同音に天津祝詞を奏上し始めた。百舌彦は忽ち身體振動し、大口を開けて、

『ア、ゝ、』

と聲張り上げ、中風病みの様に涎をダラダラ流しかけムクムクと身體を動かし始めた。

安彦 『ヤアヤアもう此方の者だ、生命丈は大丈夫だ』

百舌彦は忽ち四つ這ひになり、ヒン ヒン ヒンと馬の様な嘶きを連發し乍ら足を以て河砂を足掻し、ムクムクと這ひ出した。

田加彦 『ヤア此奴一旦死によつて馬に生れて來よつたナ。大善大惡に中有は無いや、と言ふ事だが如何にも此奴は常から大惡人だつた。中有なしに忽ち畜生道へ早變

り、否生れ代り、俺も今迄永らく交際つた誼で此奴の馬に跨つて與れば因業が満ちて再び人間に生れて来るだらう。サア百舌彦の四つ足、貴様は餘つ程幸福者だ。勞役に服する畜生も澤山あるのに、勿體なくも三五教の宣傳使の御供、田加彦サンを乗せて歩くとは何たる幸福者ぞ、サア驅出せ驅出せ」

百舌彦「ヒンヒンヒン」

田加彦「ヤア此奴は本式だ、馬にしては少し背が低いから乗り心地が悪い。然し乍ら資金要らずの小馬だから辛抱するかい」

と云ひつつ百舌彦の背に跨つたまま、有りあふ木片を以て鞭に代へ無性矢鱈に鞭つた。忽ち百舌彦は身體膨張し、象の如き巨大なる人面獸體の怪しき獸となつて仕舞つた。

田加彦「ヤア三人の宣傳使様、御覽の通り顔は人間、胴體は象の様な大きな脚の太い馬が出来ました、皆サン御一緒にお乗りになつては如何ですか。昔エデンの園で此世の造物主の大神様がアダムとエバとの二人の男女にこの果物を食ふなど警められた。それも聞かずにエバの奴、餓虎の勢でムシヤムシヤと採つて食ひ、

ハズバンドのアダムに迄勧め食はして遂に神罰に觸れ、其邪氣は凝つて八頭八尾の大蛇となり、金毛九尾の悪狐となり天下に横行する様になつたと云ふ事だ。罰は靦面、百舌公の奴、此結構な果實を唯一人吾物顔に人にも呉れず食つた酬い、樹上より顛落して生命を失ひ、忽ち畜生道に陥りコンナ怪體な人獣となつて仕舞つた。皆サン、袖振り合ふも他生の縁だ、此奴の罪亡ぼしの爲めに乗つてやつて下さいな」

百舌彦の身體は忽ちウ、ウ、ウと唸り始めた。

田加彦「エー靜かにせぬかい、あまり唸りよるので貴様の身體中がビリビリ震うて、俺の尻まで撥ゆくなつて來た。八釜しう吐すと尻を叩くぞ」

と木片を以てピシヤリピシヤリと打ち叩く。人象は上下に運動を始めた。初めの間は四五尺の間を上下しつたが遂には七八間の中空を昇降し、上下左右に躍り始めた。其震動に跳飛ばされて田加彦は以前の香具の木の枝に噛み付き顛落を免れた。人象の姿は忽ち容積を減じ以前の百舌彦の姿に還元して仕舞つた。

百舌彦「アハ、ハ、ハ、オイ田加彦、どうだ、酸いか、甘いか、苦いか、返答せぬ

かい

田加彦「ナ、、、、何を吐しよるのだ。酸いも、甘いも苦いもあつたものかい。

俺をコンナ甚い辛い目に會はせよつて、こら、俺が死んだら化けて出てやるから

さう思へ、ヒュー、ドロ　ドロ　ドロぢやぞ

百舌彦は目を剥き舌をペロリと出して、

「御縁があつたら又お願致します、サア　サア　サア三人の宣傳使様、彼奴をあ

あして香具の木の實に預けて置けば死ぬ迄大丈夫です。皆サン一時も早く此場を

立ち去り宣傳に向ひませう

安彦「アハ、、、、」

國彦「オホ、、、、」

道彦「ヤア百舌彦、貴様は化物だ、妙な病氣を持つてるな。然し乍ら田加彦をあ

の儘に放擲て置く譯にはゆくまい、之は貴様の責仕だからソツと樹下に下して連

れて行くが宜からう

田加彦「モシモシ道彦サン有り難う御座います、能う言つて下さいました。人情

知らずの安彦、國彦の宣傳使、百舌彦の馬鹿野郎、永らく御心配を掛けました、
大きに憚り様」

と云ひ乍ら猿の如く樹上よりスラスラと下つて來た。四人一度に、
一同「アハ、ハ、ハ、」

と轉けて笑ふ。田加彦は百舌彦の尻をクレリと引ん捲り、

「コラ、屁放き馬、能く此方を馬鹿にしよつたな」

百舌彦は「何ツ」と云ひ乍ら矢庭に拳骨を固めて田加彦の頭を續け打ちにポカポ

カとやつた。田加彦は烈火の如く又もや拳を固めて骨も挫けと打下す。此時遅く

彼時早く、百舌彦は細くなつて雑草茂れる田圃道を一目散に驅け出す。田加彦は、

「おのれ百舌彦、卑怯未練な、逃がしてならうか」

と尻ひつからげ後を追つかけ、雲を霞と彼方を指して姿を隠して了つた。

安彦「ヤア、面白き活劇を見物した。然し乍ら此儘にして居れば二人の奴、如何
な事をするかも知れない。國彦、道彦殿、一時も早く後追つかけて彼の所在を探

しませう」

と安彦は慌しく先に立つて驅出せば、二人も續いて跡を追ひ行く。

(大正一一・四・一 舊三・五 北村隆光録)

第七章 釣瓶攻(五七四)

百舌公、田加公は、汗をタラタラ流し乍ら、蛙の行列向う見ずと云ふ大速力を以て、細き田圃路をマラソン競走的に進行して行く。

行く事十數丁、忽ち前途に突當つた石像の姿、百舌公は此石像に現を抜かして見惚れて居る。後より追付いた田加彦は、矢庭に拳骨を固めてポカポカポカと擲り付ける。石地藏は一尺有餘の長き舌をノロノロと吐き出し、目を白黒と剥いたまま、一尺許りも前に突き出し、鼻をムケムケさせて居る。田加彦は又もや現をぬかして、異様の石像を見詰めて居た。百舌彦は又もや拳骨を固めて、田加彦の横面をポカポカとやる。

田加彦「アイタタ、もう是れで借金済しが済んで居る筈なのに、又二つも擲りよつて仕方のない奴だ。待て待て今に返報がやしをしてやらう」

と捻鉢巻となり、拳を握つて打つてかかるを、百舌彦はヒラリと體をかはし、

「ヤア田加彦、モウ返金は仕て要らない。利息も免除して遣る」

と逃げ廻る。田加彦は、

「ナニ、貴様に借金して返さずに男が立つかい。ドツサリ利子を附けて、返して

やらう」

と追ひかける。百舌公は石像の周圍を逃まはる、田加彦は追ひかけまはる。殆ど

石像を中心に巡る事數十回、遂には兩人とも目をまわし、山も野も一時にモーター

の如くに廻轉し始めた。二人は大地にしがみ付き、

「ア、地震だ地震だ、天變だ」

とわめいて居る。此場に現はれた四五人の荒男、手早く二人を後手に縛り上げ、

肩に綱をひっかけ、ドンドンドンドンと、草生え茂る畔路を林の中に驅けて行く。

二人は引きずられ乍ら、

「ア、天變だ、地妖だ。天が地となり、地が天となる」

と言ひ乍ら、縛られたる事に氣付かず、わめきつつ、數百丈の瀧の下に引きずられて行つた。四五人の荒くれ男は、忽ち瀧水を汲み來つて、二人を仰向けに寢させ、目鼻口の區別なく瀧の如くに注ぎかけた。二人は苦しさに眩暈も止まり、

「ヤア助けて助けて」

と泣き出すを大の男は聲を荒らげ、兩人に向ひ、

「其方はエデンの河の關守を致せし百舌彦、田加彦の兩人であらう。此方は鬼雲

彦の家來、鳶彦であるぞ、吾面をトツクリ見よ」

と、ズズ黒い顔を又ツと突出し、目を剥いて見せる。

百舌彦「ヤア貴様は鳶彦だな、何時の間にコンナ所へ來よつたのだ。俺の縛を解

いて呉れぬかい、石地藏の奴、失敬千萬な、吾々兩人を後手に縛りよつて、コン

ナ所へ吹飛ばしよつたのだ。友達の好誼だ、グツグツ致さずに早く吾々の繩を解

かぬかい」

鳶彦「ナニ愚圖々々言うのだ、貴様は三五教に寢返りを打ち、遂には神罰の爲、

エデン河の藻屑となつた其方ではないか。憎まれ子世に覇張るとかや、又もノソ娑婆に甦つて來よつて、再び三五教を開かうと致すのか、……待て待て此方にも一つの考へがある。……サア是からバラモン教の最も厳しき修行を爲して遣らう。靈主體從の極致を盡し、貴様の肉體を、散り散りバラバラに致して、靈丈は天國に救うてやらう、有難く思へ」

と縛めを解き、瀧壺へ押込まうとした。百舌彦は作り聲をし乍ら、

「アー恨めしやな、吾れこそはバラモン教の信者となり、エデンの河の關守を勤めて居たが、思ひの外に神力の強い肝の太玉命が三人の勇士を伴れて、ニユーと其場に現はれた。俺は計略を以て四人の宣傳使を河の中に葬つてやらうと思つたが、ハーテ恨めしやなア、ウ恨めしやなア、事志と違ひ鶉の嘴の、船は忽ち木葉微塵、俺はエデンの河の藻屑となつて此世へ迷うて來たワイ、ヤイ鳶彦の奴、貴様も靈主體從の教を奉ずる代物、汝が生首をひっこ抜き、冥途へ伴れて酔つてやらうか、ホーホーホーホー、恨めしやなア」

田加彦は、手を前にニユツと下げ、舌をペロリと出し、右の手を前に突出し、

『ヒュードロドロドロドロ、恨めしやなア………』

鳶彦 『ヤイヤイ貴様達何だ、生きて居る間から結構なバラモン教を棄てて、三五

教に迷う娑婆の幽霊だと思つて居たが、ヤツパリ死んでも又迷うのか、此處はバ

ラモン教の修行場だ、亡者の來る所でない。一時も早く姿を隠せ、消えて了へ、

アタ厭らしい、シーツシーツシーツ』

百舌彦 『恨めしやなア、鳶彦の生首が欲しいワイ』

田加彦 『冥途の土産に鳶彦の御首頂戴仕らむ。ホーイホーイホー』

と蠅螂の様な手附をして、稍後方に體を反り乍ら空中を搔く。

鳶彦 『ヤア此奴は半死半生の化物だ、幽霊にしては立派な足がある。此奴ア偽幽

霊かも知れないぞ、オイ家來共、此奴を縛れ』

百、田 『ヤア待つた待つた、幽霊を縛る奴が何處にあるか。チツト量見が違ひは

せぬかのう、ホーホーホーホーイ』

鳶彦 『エー量見違も糞もあつたものかい、モウスうなつては、どこ迄も了見なら

ぬのだ』

と言ひ乍ら、二人の帯に大き綱をシツカと結び付けた。

鳶彦「サアもう大丈夫だ、ハンドルを廻せ」

四五人の家來は「ハツ」と答へて、修行用のハンドルをクルクルと繰り始めた。

井戸の釣瓶の如うに、一人は頭上に高く舞上る。一人は瀧壺にドブンと落ち込む。

今度は反對に、上の奴が下の瀧壺に落ち、交る交る數十回、上げては下ろし上げ

ては下ろし、井戸の釣瓶の如く、上り下りの道中最も雑踏を極め、お蔭參りの伊

勢道中の光景其儘である。二人は息も殆ど絶え、眞青になつて九死一生の憂目に

會うて居る。此時涼しき宣傳歌が聞えて來た。鳶彦は四五人の家來と共に一目散

に、山奥指して姿を隠したり。安彦、國彦、道彦は何氣なく瀧の音を知邊に此場

に現れ來り、百舌彦が瀧壺の中空にひつかかり居るを見て打驚き、

「ヤア此奴は大變だ、一時も早く助けてやらねばなるまい」

と矢庭に兩刃の劍を抜いて綱をブチ切つた。忽ち百舌彦は瀧壺にドボンと落ち込

んだ。安彦は赤裸となり、瀧壺に飛込んで、百舌彦の足を握り、ひつ張り上げた。

又も一人の田加彦の頭髮は水面に現はれて居る。再び瀧壺に飛込みさま、頭髮を

握つて救ひあげた。二人共多量の水を呑み、息も絶え絶えになつて居る。

安彦「ア、能う水に縁のある男だナア、何とかして水を吐かしてやらうかい。ま

だビコビコと動いて居るから、今の間なら助かるだらう」

國彦「大變に澤山に水の御馳走を頂きよつたと見えて、腹は太鼓の様だ。一つ此

雙刃の劍で、腹袋を破つて水を出してやらうか」

道彦「馬鹿を言うな、ソナ事したら、それこそ締切れて了うよ」

國彦「締切れるか、締切れぬか、ソナ事は吾々の關する所にあらずだ。生きる

も死ぬるも神の御心だ。神が生かさうと思へば生かして下さる。吾々はどうなつ

として水さへ出せば良いのじゃないか、アハ、ハ、ハ」

安彦「洒落所かい、九死一生の場合だ。此兩人を見殺にする譯にも行くまい。吾々

宣傳使は敵でも助けねばならぬ職掌柄だ。どうしたら宜からうかな」

道彦「どうも斯うも仕方があるものか、吾々は天津祝詞の言靈を奏上して、神助

を仰ぐより外に道はない」

安、國「ア、さうだつたナア。餘りの事に周章狼狼、肝腎の言靈の奏上を忘れて

居たワイ」

と言ひ乍ら、瀧水に口を漱ぎ、手を洗ひ、拍手再拜、天津祝詞を奏上し、天の數歌を聲もスガスガしく歌ひ了つた。二人は忽ち水を吐き出し、ムクムクと起きあがり、附近キヨロキヨロ見廻し乍ら、三人の此場に在るに驚き、

「ヤア宣傳使様、能う來て下されました。バラモン教の鳶彦の奴にスツテの事で代用の無い生命を奪られる所でした。ア、有難い有難い、生命の親の安彦サン、國彦、道彦の生神様……」

と兩人は大地に齧伏して、涙を瀧の如くに流し感謝する。此時何處ともなく美妙の音樂響き渡り、妙音菩薩の冥護有り有りと伺はれける。五人は又もや手を拍ち、妙音菩薩の恩恵を感謝した。

是より五人は又もや道を轉じて廣野を涉り、東南指して足を速めた。行く事數百丁にして、十數軒の小さき家の建ち竝ぶ村落に出た。この村落の中に巍然として聳えたる大廈高樓がある。五人の宣傳使は此館を目標に足を速め門前に佇めば、琴の音幽かに聞え、何處となく覺えのある女の笑ひ聲、門外に千切れ千切れに漏

れ來たる。安彦、道彦は首を傾け、

「ハテナア」

（大正一一・四・一 舊三・五 松村眞澄録）

第八章 ウラナイ教（五七五）

安彦、國彦、道彦の宣傳使を始め、田加彦、百舌彦の五人は、此廣き館の門前に佇み内部の様子を耳を澄ませて聞き居たり。

フト表門を眺むれば、風雨に曝された標札に幽に「ウラナイ教の本部」と神代文字にて記されてある。安彦は覺束なげに半剥げたる文字を読み、

「ヤア此奴は、ウラル教と三五教を合併した變則的神教の本山と見える哩、それにしても最前の女の聲、何となく聞き覚えのある感じがする。ハテナア、オー百舌彦、田加彦、汝はそつと此塀を乗り越え、中の様子を探り吾等の前に報告して

呉くれ」

百舌彦もずひこ、田加彦たかひこは嬉うれし氣げに打うち諾うなづき、木傳こづたふ猿さるか、小蟹ささがにの蜘蛛くもの振舞ふるまひ逸いち早く、ヒラリと塀へいを飛越とびこえて、庭先にはさきの木きの茂しげみに姿すがたを隠かくし、様子やうすを窺うかがひつつありき。

ウラナイ教けうの教主けうしゆと見みえて、ぼつてり肥こえた婆ばば一人ひとり、雑水ざふづ桶けに氷こほりのはつたやうな眼めをキヨ口くちつかせながら中央ちゆうあつに控ひかへて居ゐる。七八人しちはちにんの宣傳せんでんし使しらしき男女だんぢよは、孰いづれ

も白内障はくないしやうか、黒内障こくくないしやうを病やんだ盲人まうじんの如ごとく、表面眼へうめんまなこはキロキロと光ひかりながら、何なにも

見みえぬと見みえて手探てさぐりして巨大きよだいなる井鉢どんぶりばちに麥飯薯蕷汁むぎめしとろろじるを多量どつさりに盛もり、ツルリツル

りと吸すうて居ゐる。二人ふたりの藥罐頭やくわんあたまの禿爺はげおやぢは、頻しきりに摺鉢すりばちに山やまの薯いもを摺すつて居ゐる。こ

れも何どうやら盲人めくららしく手探てさぐりしつつ働はたらいて居ゐる。二人ふたりは此この光景くわうけいを見みやり、

「オイ百舌公もずこう、此處ここの奴やつは何奴どいつも此奴こいつも皆盲人みなめくらばかりだと見みえる。大きな井鉢どんぶりばちに

麥飯薯蕷汁むぎめしとろろじるをズルズルと啜すつて居ゐるぢやないか、俺達おれたちも之これを見みると俄にはかに胃ゐの腑ぶの

格納庫かくなふこが空虚くうきよを訴うったへ出だしたよ。どうだ、盲めくらを幸さいひひにそつと一杯頂戴いっぱいちやうだいして來きようぢ

やないか」

百舌彦もずひこは、

「ソイツは面白からう」

と言ひながら、のそりのそりと足音を忍ばせ一同の前に現はれ、素知らぬ顔して控へて居る。禿爺は井鉢に麥飯薯蕷汁を盛り、

「サアサアお代りが出来ました、高姫サン」

とニウツと突き出す。高姫と云ふ中年増のお多福婆は機械人形のやうに両手を前にさし出した。折も折百舌彦の面前に突き出した井鉢を百舌彦は作り聲をしながら、

「ハイ、これは御馳走様、もう一杯下さいな」

爺は井鉢を百舌彦に渡し、

「よう上る高姫サンぢや」

と小聲に呟きながら又探り探り臺所の方に歸り行き、一生懸命に薯を摺つて居る。高姫「コレ松助、何處に置いたのだえ、早く此方へ渡して呉れないか」

松助は耳遠く盲と来て居るから、何の容赦もなく一生懸命に鼻を啜りつつ薯を摺つて居る。彼方にも此方にも「ミツバナ」を啜るやうな聲が、ずうずうと聞え

て居る。

百舌彦、田加彦は、井鉢の兩方より嚙みつくやうに腹が減つたまま、ツルツルと非常な吸引力で、蟆蛙が黽を引くやうに大口開けて呑み込んだ。此時松助は又探り探り麥飯に薯蕷汁を掛た大井鉢を、足許覺束なげに、川水の中を歩くやうな體裁で、

「サアサア高姫サン、お代りが出來ました」

田加彦は又もや作り聲をして、

「アア松助、御苦勞であつた。もう一杯お代りを頼むよ」

「ハイハイ、もう薯の【へた】ばかりじゃが、それでも宜しければお上りなさいませ」

と面膨らし、部屋に引返す。高姫は、

「コラコラ松助、未だ持つて來ぬか、何處へ置いたのだい」

田加彦、百舌彦は矢庭に一杯を平げた。傍に十數人の盲人は、井鉢を前に据ゑ、一口食つては下に置き楽しんで居る。

百舌彦は甲の井鉢をソツと乙の前に置き、乙の井鉢を丙の前に置き、丙の井鉢を高姫の前にソツと据ゑた。

甲「まだ半分餘りはあつた積りだに何時の間に此様に滅つて仕舞つたらう、オイ貴様俺のと一緒に平げて仕舞つたな」

乙「馬鹿を云ふな、俺の井鉢を何處かへやりよつたのだ。自分は一人前平げて置いて未だ他人のまで取つて食うとは、餘りぢやないか」

と互に盲人同志の喧嘩が始まつた。十數人の盲人は、取られては一大事と井鉢を堅く握り、下にも置かず、ツルツルズルズルと吸うて居る。田加彦は、火鉢の灰を掴んで、盲人の井鉢に一掴みづつソツと配つて廻つた。

「ヤア何んだ、この井鉢の………俄に薯蕷汁の味が變つたやうだ。他人が盲人だと思つて馬鹿にしよるナ、誰か灰を入れよつたわい」

百舌彦「ハイハイ」、左様々々」

高姫「ヤ、誰か聲の違ふ奴が來て居るらしい、オイ皆の者氣をつけよ、何だか最前から怪しいと思つて居た。俺は最前から盲人の眞似をして居れば、何處の奴

か知らぬが、二人のヒヨットコ野郎奴、要らぬ悪戯をしよつた。サアもう了見ならぬ、家の爺が酷い肺病で、此處に薯蕷汁によつた痰が一杯蓄へてある。之を食つてサツサと出て失せ

百舌と田加は頭を掻きながら、

「ヤア、そいつは御免だ」

高姫「御免も糞もあつたものか、ヤアヤア長助、伴助、二人の者を縛つて了へ」

「畏まつた」

と次の間より、現はれ出でたる大の男、出刃庖丁を振り翳し、二人に向つて迫り来る。高姫も眉を逆立て、出刃庖丁を逆手に持ち、三方より二人に向つて斬つてかかる。百舌彦、田加彦は井鉢を頭に被りトントンと表を指して逃出す。百舌彦の被つた井鉢には爺の吐いた痰が一杯盛つてあつた。頭から痰を一ぱい浴びたまま、スタスタと表を指して駆け出す。二人の荒男は大股に踏ん張りながら二人の後を追ひかけ来り、濡れた痰に「つるり」と這つて、スツテンドウと仰向けに倒れた。

高姫は出刃を振り翳しながら表に駆け出で、二人の荒男に躓き、バタリと轉けた機に長助の腹の上に出刃を突き立て、長助はウンと一聲七轉八倒、のた打ち廻る。忽ち館の中は大騒動が「おつ」始まりける。

田加彦、百舌彦は一生懸命に駆け出し、道端の溜り池にザンブと飛び込み、痰を洗ひ落さうとした。此水溜は數多の魚が圍うてある。鼬や川獺の襲來を防ぐために柚の木の針だらけの枝が一面に投げ込んであつた。二人はそれとも知らず眞裸となつて飛び込み柚の木の針に刺されて身體一面に穴だらけとなり辛うじて這ひ上りメソメソ泣き出してゐる。

婆は眉を逆立て二本の角を一寸許り髪の間より現はしながら此場に現はれた。二人が姿を見て心地よげに打ち笑ひ、蹠跟く機に又もや池の中にザンブと斗り落ち込み、

「アイタタアイタタ」

と婆々が悶え苦しむ可笑しさ、二人は眞裸のまま、

「態ア見やがれ」

と云ひつつ足を「ちが」ちがさせ田圃道を走つて往く。安彦、國彦、道彦の三人は素知らぬ顔して宣傳歌を歌ひつつこの池の傍を通り過ぎむとするや、池の中より高姫は掌を合し、頻りに助けを呼んで居る。三人の宣傳使は氣の毒さに耐へ兼ね、漸くにして高姫を救ひあげた。高姫は大に喜び三人に向つて救命の大恩を感謝したりける。

此時逃げ去つた百舌、田加二人の男は眞裸の儘慄ひ慄ひ此場に現はれ來り、
「モシモシ宣傳使様、寒くつて耐りませぬワ、何うぞウライナイ教の婆アサンに適當な着物を貰つて下さいな。ナア婆アサン、お前も宣傳使のお蔭で命拾ひをしたのだから着物位進上なさつても安いものだらう」

安彦「ヤア吾々は着物の如きものは必要が御座らぬ。平にお斷り申します」
國、道「吾々も同様、衣服なんか必要が御座らぬ」

百舌彦「エ、氣の利かぬ宣傳使だな、此處に二人も着物の要る御方が御座るのが目につきませぬかい」

道彦「吾々はウライナイ教の信者になつたと見え、薩張明盲人になつて仕舞つたよ。」

アハ、ハ、ハ、ハ、

高姫「お前等は、ノソノソと吾が座敷に這ひ込み、薯蕷汁を二三杯もソツと横領して喰ひ、其上大勢の盲人を附け込み、薯蕷汁の中に灰を掴んで入れた不屈きの奴ぢや、着物をやる處ぢやないが、併し生命を救けてもらつた其お禮として、長公、伴公の死人の着物を呉れてやらうか」

道彦「これやこれや、貴様等二人は薯蕷汁を盗み食つたのか」

百舌彦「ハイ、【トロロウ】をやりました。其代り酷い目に遭つ【たん】ぢや、汚い物を頭に被つ【たん】ぢや。盲人を瞞して薯蕷汁を多量食つ【たん】ぢや、

それから長公伴公に追ひかけられて【タンタンタン】と一生懸命逃げたんじや。

門口で長公伴公が轉倒つ【たん】ぢや、其處へ婆が飛んで来て轉け【たん】ぢや、

倒けた拍子に長公のどん腹を突い【たん】ぢや、二人は一生懸命、痰の體を清め

んと溜池に矢庭に飛込ん【たん】ぢや、柚の針に身體を突かれて痛かつ【たん】

ぢや、【たんたん】と立派な着物を頂戴致し度いもんぢや、なア田加【たん】

道彦は吹き出し、

「アハ、ハ、ハ、身魂みたまの汚きたない奴やつぢやなア、貴様きさまは之これから改心かいしんを致いたしてウライナイ教けうの盲人めくらなかも仲間なかもに入れて貰もらうと都合つがふがよからう。モシモシお婆おばアサン此等これらふたり二人ふたりは三五教あななひけうの教理けうりは到底たうてい高遠かうゑんにして體得たいとくする事ことは出来できませぬ、善ぜんとも惡あくとも愚おろかとも譯わけの分わからぬ半はんド口的てきの人間にんげんですから、ウライナイ教けうの宣傳使せんでんしにでもお使つかひ下くださらば最もつとも適任てきにんでせう」

婆おば 「それはそれは誠まことに有難ありがたい御仰おんあふせ、ウライナイ教けうの宣傳使せんでんしには至極しごく適當てきたうの人物じんぶつ、幾何いくらで賣うつて下くださいますか」

道彦みちひこ 「サア、ほんの残りのこ者ものの未成品みせいひんもので御座ございますから、無料ただにまけて置おきます。米こめや麥むぎを食たべさして貰もらうと胃ゐを損そこねますから、身魂みたま相當さうたうに鱈どちやうや蛙かわづで飼かうてやつて下ください、アハ、ハ、ハ、」

婆おば 「オホ、ハ、ハ、」

(大正一一・四・一 舊三・五 加藤明子録)

第九章 薯蕷汁（五七六）

千早振る遠き神代のその始め、神の教に背きたる、天足彦や胞場姫の、醜の身魂の凝結し、八岐大蛇や、金毛九尾白面の悪狐となつて、天地の水火を曇らせつ、常世の國に現はれし、常世彦や常世姫、盤古大神の體に宿りて世を亂し、一度は神の御教に、服ひ奉り眞心に、立歸りしも束の間の、いや次々に傳はりて、ウラル彦やウラル姫の、又もや體に宿りつつ、天地を亂す曲業の、力も失せて常世國、島の八十島八十國の深山の奥に立籠り、人の身魂を宿として、バラモン教やウライの、教を樹て北山の、鳥も通はぬ山奥に、數多の魔神を呼び集へ、ウライイ教と銘打つて、又もや國を亂し行く、其の曲業ぞ由々しけれ。

館の主高姫は、安彦、國彦、道彦の宣傳使に危難を救はれ、感謝の意を表はし館に迎へ入れて、鄭重に響應せむと強て一行を迎へ入れた。

一行五人は美はしき一室に招ぜられ、手足を伸ばし悠々として寛いでゐる。高姫は此の場に現はれ、

「コレハコレハ三人の宣傳使様、能うマア危き所を御救け下さいました。これと云ふも全く妾が日頃信仰するウラナイ教の御本尊大自在天様の御引合せでございませう。神様は三五教の宣傳使に憑依つて、妾の危難を御救ひ下さつたのです。謂はば貴方等は神の御道具に御使はれなさつただけのもの、貴方の奥には大自在天様が御鎮まりでございます。誠に以て御道具御苦勞でございました。何もございませぬが悠々と御あがり下さいませ」

と言ひ棄てて徐々と次の間に姿を隠した。

國彦「ナンダ、怪體な挨拶じゃないか。われわれは三五教の教理に依つて、敵と致さず生命を的に危険を冒して救つてやつたのだ。それに何ぞや、大自在天の御道具に使はれなさつたなぞと、減ず口を叩きよつて何うも宗旨根性と云ふものは、何處迄も抜けぬものとみえるワイ」

道彦「マアマア何うでも好いぢやないか。彼奴を片端から三五教に兜を脱がしさへすれば好いのだ。何でも好いから言はずだけ言はして置けば、腹の底が自然に解つて来る。さう言葉尻を捉へて、ゴテゴテ言ふものでは無い。洋々たる海の如

き寛容心を以て衆生濟度に掛らねば、彼れ位なことに目に角を立てて鼻息を喘ますやうなことでは、到底宣傳使どころか、信者たるの價値さへもないと云つても然りだよ」

斯く話す折しも以前の高姫は、縁の缺けたる井鉢に麥飯を盛り、粘々したものをドロリとかけ、三人の小間使に持たせて入り來り、

「コレハコレハ皆サン、ご苦勞でございました。山家のこととて何か御構ひを致さねばなりません、麥飯に薯蕷汁が出来ました。これなりとドツサリ御あがり下さい。俄の客來で澤山の鉢の中から探しましたが、縁の缺けたのは漸く三つよりございませぬ。二人の御供は最前ソツとあがれとも音はぬのに、喜三郎をなさいましたから、どうぞ辛抱して下さいませ。貴方等に出すやうな器は漸う三つ見つかりました。後は立派な完全無缺の器ばかりでございます。この様に見えても痰などは滅多に混入してゐる氣遣ひはございませぬ。どうぞタント タント御あがり下さいませ。オホ、ハ、ハ、ハ、」

と厭らしき笑ひと共に、白い出齒をニユツと出し、のそりのそりと又もや元の居

室に姿を隠しける。

國彦「われわれを飽く迄侮辱しよる怪しからぬ奴だ。恰で一途の川の二人婆のや

うな面をしよつて、モ一堪忍袋の緒が切れた」

と云ひ乍ら、井鉢の麥飯「とろろ」を座敷一面に投げつける。座敷は又ル又ルと

「とろろ」の泥田のやうになつて了つた。

又もや二人分の井鉢を次の室に投げ付け、次の室も亦「とろろ」の泥田となつ

た。

國彦「さアこれで溜飲が下つた。婆の奴滑り倒けよると一層御愛嬌だがナア」

安彦「オイ國彦、貴様は亂暴な奴だナア。三五教の宣傳使が喧譁を買うと云ふこ

とがあるものか、如何なる強敵に向つても飽く迄無抵抗主義で、誠で勝つのだよ。

ナント云ふ情無いことをして呉れるのだ。今日限り破門を致すから、さう心得る」

國彦「それだから三五教は腰抜け教だと云ふのだよ。貴様の方から破門する迄に、

こちらの方から國交斷絶だ」

と自暴棄になり、捻鉢巻となつてドンドンと四股を踏み鳴らし、荒れ狂ふ此の物

音に驚いて、高姫を始め數人の男女此場に現はれ、
高姫「コレハコレハ三五教の宣傳使様、誠に御立派な御教理には感心致しました。
口では立派なことを仰有るが、其の行ひは一層見上げたもの、人の座敷に泊り乍
ら、吾々一同が心を籠めた御馳走を座敷一面に撒き散らし襖を蹴倒し、障子の骨
を折り、イヤもう亂暴狼藉、實に立派な御教理には、ウラナイ教の吾々も、あま
り感心の度が過ぎてアフンと致します。開いた口が閉まりませぬ。三五教の御教
通り手も足も踏込む所がございませぬ。オホ、、、、、。コレコレ皆の者ども、こ
の宣傳使様の立派な御教をお前達は、能く腹へ入れて置くがよいぞや」
もう一人の婆は口を尖らし、
「コリヤお前達は三五教の宣傳使だと云つて偉さうに天下を股にかけて歩く代物
だらう。大方三五教は斯んな行ひの悪い宗教だと思つて居つた。やつぱり人の風
評は疑はれぬワイ。屹度變性女子の世の亂れたやり方を見倣うて、其處中をへと
ろろ「ドツコイ泥だらけに穢して歩く悪の御用だらう。素盞鳴命は天の岩戸を閉
める役だと云ふことだが、悪も其處まで徹底すれば反つて面白い。このウラナイ

教は斯う見えても立派なものだぞ。變性男子の生粋の教を守つとるのだぞ。三五教も初めは變性男子の教で立派なものだったが、素盞鳴命の身魂の憑つた肉體が出て来て、人の苦勞で徳を取らうとしよつて、變性男子を押し込めて世の亂れた行り方の、女子の教が霸張るものだから三五教もコンナ惡の教になつて了つたのだ。三五教の奴は二つ目には、ウラル教が何うだのバラモン教が惡だのと、お題目のやうに仰有るけれど、今の宣傳使の行ひは何うぢやな。これでも善の立派な教と云ふのかい。この高姫も元は變性男子の御血筋の肉體だ、日の出神の生宮ぢや。龍宮の乙姫さまもチヨコチヨコ御出でになつて、體主靈從國の惡神の仕組を、すつかりと握つてござるのぢや。變性女子と云ふ奴は胴體無しの烏賊上り、三文の大神樂のやうに頤太ばかり發達しよつて、鰐のやうな口を開けて、其方此方の有象無象を嚙んだり、吐いたりする大化物だ。お前達は其の大化物を神様だと思つて戴いて居る小化物ならよいが、小馬鹿者の薄馬鹿者だよ。これからちつとウライ教の教を聴きなさい。身の行ひを換へて誠水晶のやり方に立替へねば何時まで經つても五六七の世は來はせぬぞえ」

國彦「エーエ、ツベコベと能う八釜敷く吐す婆だな。貴様は偉さうにツベコベと小理窟を竝べよるが、人を招待するに缺けた穢い鉢を選んで出すと云ふことがあるかい。これが抑も貴様の方から俺を焚きつけにかかつてゐよるのだ。三五教だつて、いらはぬ蜂はささぬぞ、釣鐘も叩くものが無ければ音なしなものだ、春秋の筆法で言へば、貴様が井鉢を投げたのだ。イヤ自在天がやつたのだ。俺は自在天の道具に使はれたのだ。此處の大將が最前さう云つたぢやないか。ナント大自在天と云ふ神は亂暴な神だなア。ウラナイ教はコンナ惡魔の亂暴な神を御本尊にして居るのか苟くも三五教の宣傳使は、至粹至純の身魂の持主だぞ」

高姫「オホ、至粹至純の身魂の持主の爲さること哩のー。自分のした責任を、勿體無い、大自在天様に塗りつけて、それで自分は知らぬ顔の半兵衛をきめこんであるのか。都合の好い教理だなア」

國彦「われわれの魂は水晶魂だ。眞澄の鏡も同様だ。それだからウラナイ教の惡がすつかり此方の鏡に映つて居るのだ。アア水晶の身魂も辛いものだワイ。アハ、ハ、ハ、」

黒姫「團子理窟をこねる日には際限が無い。兔も角行ひが一等だ。立派な御座敷の眞ん中に主人の好意で出した麥飯「とろろ」を打ち開けるとは沙汰の限り、やつぱり悪の性來は何うしても現はれるものぢや。ソナ馬鹿な教の宣傳使になるよりも、一つ改心してウライナイ教になつたら如何だい。誠の變性男子の教は此の高姫さまと、黒姫がチャント要を握つてゐるのだよ。昔の神代の根本の身魂の因縁から、人民の大先祖のことから又萬劫末代のこと、根の國、底の國、なにも彼も知つて知つて知り抜いた世界で、たつた一人の日の出神の生宮ぢや。この黒姫は龍宮の乙姫の守護だぞ。良の金神様も元は此處から現はれたのだ。本が大事ぢや。「本斷れて末續くとは思ふなよ。本ありての枝もあれば、末もあるぞよ」と三五教は教へて居るぢやないか。その根本の本の本の本の本の本の本の本の本の本の本のト握つて居るのぢや。神の奥には奥があるぞ。三五教の宣傳使のやうに理窟ばかり言つてこの頃流行る學の力を以て、神の因縁を説かうと思つても、それは駄目ぢや。千年萬年經つたとて誠の神の因縁が判つて堪るものか。誠の神の御用が致し度くば、ウライナイ教に改心して隨うがよからう」

國彦「婆アサン、大きに御心配かけました。この國彦は三五教でも無ければ、ウラル教でもない、ウラナイ教では尚更ないのだ。あまり三五教の悪いことばっかり仰有ると、ウラナイ教の化けの皮が現はれるぞえ。左様なら、モシモシ三五教の二人の宣傳使サン御悠くりと下らぬ説教でも聽かして貰つて、眉毛を讀まれ、尻の毛が一本も無いとこ迄抜かれなさるがよろしからう。コラ二人の皺苦茶婆、用心せーよ。何處に何が破裂致さうやら判らぬぞよ」

と尻をクリツと捲つて裏門から、一發破裂させ乍ら何處とも無く姿を隠して了つた。

道彦「アハ、ハ、ハ」

安彦「アア道彦サン、彼様乞食を伴れて來るものだから、薩張り三五教と混同されて偉い迷惑をした。これから迂闊と何でも無い者を連れて歩くものぢやない」

道彦「ア、左様ですな、モシモシ高姫サン、黒姫サン、三五教には彼の様な宣傳使は、一人も居りませぬよ。彼の男は途中から道案内に伴れて來たのですから、好い氣になつて宣傳使氣取りでアンナことを言つたのですよ。アハ、ハ、ハ」

黒姫「神様の宣傳使は嘘は言はぬもの、誠一つの教を樹てるのは、此のウライナイ教。三五教は矢張り嘘をつきますなア。彼の男は元は與太彦と云うて、貴方等と一緒に宣傳に歩いて居つた人でせう。違ひますかな」

「サア」

「サア返答は」

「サアそれはマアマアマア彼奴は俄に氣が違つたのですよ。それだからアンナ脱線した行ひをやるのですワ。アハ、ハ、ハ、」

黒姫「能う嘘をつく人だナ。今お前サンは道案内に途中から雇うて來たと云つたぢやないか。それだから三五教は駄目、ウライナイ教が誠の教と云ふのだ」

安彦「一體此處の館には盲人ばかり居りますな」

と話を態と横へ轉じた。

黒姫「誠の教を聴かうと思へば、目が開いて居つては小理窟が多くつて仕様がないから、みな盲目や聾ばかり寄せてあるのだ。見ざる、聞かざると言うて、盲目聾程よいものは無い。此處へ來る奴は、みな此高姫サンと黒姫が耳の鼓膜を破り、

眼の球を抜いて、世間の事がなにも解らぬやうに、神一筋になるやうにしてあるのだ。お前も怪體な目をウラナイ教に、すつくり御供へしなさい。さうしたら本當の安心が出来るぢやらう。昔龍宮城に仕へて居つた小島別は、盲目であつたお蔭で、結構な國魂の神となつて神の教を筑紫の島でやつて居るといふことだ。目の明いた奴に碌な奴が居るものかい。盲目千人に目明き一人の世の中に、十目の視る所十指の指さす所、大勢の盲目の方に附くのが誠だ。サア、これからウラナイ教に歸順さしてやらう」

と高姫、黒姫の二人は、出刃庖丁をひらめかし、安彦、道彦の眼球目蒐けて突いてかかる。二人は、

「コリヤ大變」

と逃げ出す途端に、座敷一面の「とろろ」汁に足を、にらして、スツテンドウと仰向けになつた。

二人の婆も、「とろろ」に足を滑らし、仰向けにドツと倒れた。婆の持つた出刃庖丁は道彦の眼の四五寸側に光つてゐる。

道彦、安彦は一生涯命逃げ出さうとすれど、又ル又ルと足が滑つて同じ所にジ
タバタやつてゐる。百舌彦、田加彦は一室から飛んで出て、

「コラコラ婆の癖に手荒いことを致すな。その出刃渡せ」
と矢庭に引捉へむとして、又もやズリと滑り、二人は尻餅搗いた途端に、道彦
の顔の上に臀をドツカと下ろした。その痛さに氣が付けば王仁は、宮垣内の茅屋
に法華坊主の數珠に頭をしばかれ居たりける。

(大正一一・四・二 舊三・六 外山豐二録)

(昭和一〇・三・二〇 於彰化支部 王仁校正)

第一〇章 神樂舞(五七七)

神素盞鳴尊の治食す大海原の國々島々は、國治立尊、野立彦の神と現はれて、
埴安彦命に神言依さし、黄金山下に現はれて三五教を開き給ひ、豊國姫尊は野立

姫神めのかみと現あらはれ、神素盞鳴尊かむすさのをのみことの水い火きを合あはして、埴安姫命はにやすひめのみこととなり、三五教あななひけうを經緯たてよこより天下てんかに宣傳せんでんし、神人しんじん皆其德みなそのとくに悅服えつぷくし、天あめが下四方したよもの國くには一時いちじは無事ぶじ泰平たいへいの神國かみくにと治をさまりけるが、天足彦あだるひこ、胞場姫えはひめの靈みたまの邪氣じやきより現あらはれ出いででたる、八頭八尾やつがしらやつをの大蛇をろちを始め、金狐きんこ、惡鬼あくき諸々もろもろの醜女しこめ、探女さぐめは油あぶらの浸潤しんじゆんするが如ごとく、忍しのび忍しのびに天下てんかに擴ひろがり、邪惡じやあく充みち、荒あらぶる神かみの訪おもふ聲こゑは、山嶽さんかくも搖ゆるぐ許ばかり、河海かはうみ殆ほとんど涸かれなむとす。

神素盞鳴大神かむすさのをのおほかみは、大海原おほうなばらの國くにを治おさめかね、熱あつき涙なみだに咽むせばせ給たまふ折をりしも、御父神おんちちがみなる神伊邪諾大神かむいざなぎのおほかみ、尊みことの前に現あらはれ給たまひ、

爾なんじは何故なにゆゑに吾わが依よさせる國くにを守まもらず、且かつ女々めめしくも泣なきつるか

と言葉ことば鋭とどく問とはせ給たまひければ、神素盞鳴大神かむすさのをのおほかみは、

「われ、大神おほかみの勅みことのりほつを奉ほうじ、晝夜ちつや孜し々しとして神政しんせいに心力しんりよくを盡つくすと雖いへども、地上ちじやうの惡魔あくま盛さかんにして、容易よういに歸順きじゆんせしむ可べからず。到底たうてい吾等われらの非力ひりよくを以もつて、大海原おほうなばらの國くにを治おさむべきにあらず、吾われは是これより根ねの堅洲國かたすのくにに至いたらむ」
と答こたへ給たまひぬ。此時このとき父伊邪諾大神ちちいざなぎのおほかみは、

「然らば汝が心の儘にせよ、この國には住む勿れ」
と言葉厳しく詔らせ給ひぬ。茲に素盞鳴尊は已むを得ず、母の坐します根の堅洲に至らむと思はし、天教山の高天原に坐ます姉の大神に暇乞ひをなし、根の堅洲國に至らむと、雲霧押分けて、天教山に上らせ給ふ。その勢當るべくもあらざる如く見えければ、御姉の大神は、いたく驚かせ給ひ、
「吾が弟神の此處に上り來ませるは、必ず美はしき心ならざらめ、此高天原を奪はむとの汚き心を持たせ給ふならむ」
と部下の神々に命じ、軍備を整へ、防戦の用意に掛らせ給ひける。
神素盞鳴尊は、姉大神の斯くも深き猜疑心に包まれ給うとは夢にも知らず、コーカス山を立出でて、天磐船に乗り、天空を翔りて、天教山に下らせ給ふ時、姉の大神は伊都の竹鞆を取佩ばして、弓腹振立て、堅庭に現はれ給ひ、淡雪の如く、土石を蹶散らし、勢猛く弟神に向ひ、高天原を占領するの野心ある事を厳しく詰問されたりける。

茲に神素盞鳴尊は、案に相違の顔色にて答へ給ふよう、

「吾れは、貴神の思さるるが如き汚き心は露だにもなし、父大神の御言もちて、吾泣く有様を言問はせ給ふが故に、應へ難くて、吾れは母の坐します根の堅洲國に行かむと思ふ、戀しさの餘り泣くなりと答ふれば、父大神は、然らば汝が心の儘にせよと仰せあり。母の國に行かむとするに先だち、姉大神に一目遭ひまつらむと思ひてこそ上り來つれ、決して怪しき心なし。願はくば姉の大神よ、吾が心の清き事を悟り給へ」

と涙と共に答へ給ひぬ。

茲に姉大神は、
「然らば汝が心の清き事、何を以て證明せむ」

と詰り給へば、弟神は、

「吾が持てる十握の劍を姉の命に奉らむ、姉の命は御身にまかせる八尺の曲玉を

吾にわたさせ給へ」

と請ひ給へば、姉大神も諾かせ給ひて、玉と劍の交換の神業を始め給ひ、天の安河を中に置き各も各も天の眞名井に振り滌ぎ、佐賀美にかみて吹き棄ち給へば、

素盞鳴尊の神實なる十握の劍より三柱の女神現はれ給ひ、姉大神の纏せる八尺の曲玉より五柱の男神現はれ給へば、ここに神素盞鳴大神の清く、若く、優しき御心現はれ玉へり。姉大神は始めて覺り、
「此三柱の女神は、汝が靈より現れませるやさしき瑞の靈なり。また五柱の男神は、あが靈より生れませる雄々しき男神なり」と了解け給ひぬ。

ここに姉大神の疑は全く晴れたれども、未だ晴れやらぬは、神素盞鳴大神に仕へまつれる八十猛の神々の御心なりき。吁、八十猛の神の無謀なる振舞に依りて、天照大御神は、天の岩戸の奥深く隠れ給ひ、再び六合暗黒となり、晝夜咫尺を辨ぜず、萬妖悉く起り、草の片葉に至る迄、言問ひさやく惡魔の世を現出したりける。茲に高天原に坐します、思慮分別最も深き神と聞えたる、金勝要の大神の分靈思兼神は、八百萬神を天の安の河原邊に、神集へに集へ、神議りに議りて、再び日の大神の御出現を請ひ奉る其神業を行はせ玉ひける。

三五教の道を傳へたりし數多の宣傳使は、天の安の河原に集まり來り、尚も進

んで天教山の天の岩戸の前に現はれ給ひ、五伴男の神、八十伴男の神を始め八百萬の神達、天津神籬を立て、眞神を圍らし、鏡、玉、劍を飾り、出雲姫命は天の細女命と現はれて、岩戸の前に桶伏せて、一二三四五六七八九十の天の數歌うたひ上げ、舞ひ狂ひ給ひし其可笑しさに、八百萬の神は思はず吹き出し、常暗の世の苦しさも忘れて、笑ひ興じ給へば、天照大神も岩戸を細目に押開き給ふ折しも、手力男神は岩戸を開き御手を取りて引出しまつり、六合の内、再び清明に輝きわたる事を得たり。ここに八百萬の神は此度の事變を以て神素盞鳴尊の罪に歸し、手足の爪まで抜き取りて、高天原を神退ひに退ひ給ひしなり。是より神素盞鳴大神は、今迄海原の主宰神たる顯要の地位を棄て、心も細き一人旅、國の八十國、島の八十島にわだかまり、世人を損ふ八岐大蛇の悪神や、金狐、悪鬼の征服に向はせ給ひける。嗚呼、今後の素盞鳴大神の御身、は如何になり行くならむか。

(大正一一・四・二 舊三・六 松村眞澄録)

第二篇 古事記言靈解

第一章 大蛇退治の段〔五七八〕

「故、退はれて、出雲の國の肥河上なる鳥髪の地に降りましき」(古事記の大蛇退治の段)

出雲國は何處諸の國と云ふ意義で、地球上一切の國土である。肥河上は、萬世一系の皇統を保ちて、幽顯一致、神徳無窮にして皇朝の光り晴れ渡り、弘り、極まり、氣形透明にして天體地體を靈的に保有し、支障なく神人充滿し、以て協心戮力し、完全無缺の神政を樹立する至聖至嚴至美至清の日本國といふ事なり。

鳥髪之地とは、十の神の顯現地と云ふ事にして、嚴の御魂、瑞の御魂が經と緯との神業に従事し、天地を修齋し玉ふ神聖の經綸地といふことなり。要するに世界を大改良せむ爲めに素盞鳴尊は普く天下を經歷し、終に地質學上の中心なる日

本國の地の高天原なる至聖地に降臨し玉ひたるなり。明治三十一年の秋八月に、瑞の御魂の神代として高座山より神退ひに退はれて綾部の聖地に降りたるは、即ち素盞鳴尊が、一人の選まれたる神主に憑依し給ひて、神世開祖の出現地に參上りて神の經綸地たることを感知されたるも同様の意味なり。古事記の預言は古今一貫、毫末も變異なく、且つ謬りなき事を實證し得るなり。

「此時しも箸其の河より流れ下りき」

【ハシ】の靈返しは【ヒ】なり。【ヒ】は大慈大悲の極みなり。【ハシ】の靈返し【ヒ】なるもの、【ヒノカハカミ】より流れ來ると云ふ明文は實に深遠なる意義の包含されあるものなり。又箸は凡てを一方に渡す活用あるものにして、川に架する橋も、食物を口内へ渡す箸も【ハシ】の意味に於ては同一なり。惡を去り善に遷らしむる神の教の【ハシ】なり。暗黒社會をして光明社會に改善せしむる神教も【ハシ】なり。故に御神諭にも、綾部の大本は世界の大本であるから、此大橋を渡らねば、何も分りは致さむぞよ云々とあるも、改過遷善、立替立直しの神教の意味なり。その箸は肥の河より流れ下りきとは、斯る立派な蒼生救濟の

神教も、邪神の爲に情無くも流し捨てられ、日に日に神威を降しゆく事の意味なり。是を大本の出来事に徴して見るに、去る明治三十一年に瑞の御魂の神代として十神の聖地に降りたる神柱を、某教會や信者が中を遮り、以て嚴の御魂、瑞の御魂の合致的神業を妨害し、瑞靈の神代を追返し、彼等の徒黨が教祖を看板として至嚴至重なる神教を潜め隠し、某教會を開設したる如き状態を指して「ハシ其の河より流れ下りき」といふなり。

於此須佐之男命其の河上に人有りけりとおもほして尋ね上りて往まししかば老夫と老女と二人在りて童女を中に置いて泣くなり」

茲に顯幽兩界の救世主たる須佐之男命は、肥の河上なる日本國の中心、地の高天原に神人現はれ、世界經綸の本源地有りと御考へになり尋ねて御上りありしが、變性男子の身魂現はれて、國家の騷亂状態を治めむと血涙を吐き乍ら晝夜の區別なく、世人を教戒しつつありしなり。二人といふ事は、艮の金神様の男子の御魂と、教祖出口直子刀自の女子の身魂とが一つに合體して神業に従事し玉へると同じ意義なり。【ヒト】とは靈の歸宿する意義で人の肉體に宇宙の神靈憑宿して天

地の經綸を遂行し玉ふ、神の生宮の意なり。老夫と老女と二人とあるは女姿男靈の神人、出口教祖の如き神人を意味するなり。

「童女を中に置いて泣なり」とは「オトメ」は男と女の意味にして、世界中の老若男女を云ふ。又老と若ともなり、現在の世界の人民を稱して老若男女と云ふ。

靈界にては國常立大神、顯界にては神世開祖出口直子刀自の老夫と老女とが、世界の人民の身魂の、日に月に邪神の爲に汚され亡ぼされむとするを見るに忍びず、手を盡して足を運びて救助せむと艱難辛苦を嘗めさせられ、天地の中に立ちて號泣し給ふことを、童女を中に置いて泣くなり云ふなり。

亦神の御眼より御覽ある時は世界の凡ての人間は、神の童子なり女子なり。故に世界の人民は皆神の童女なる故、人民の親がその生みし子を思ふ如くに、神は人民の爲に晝夜血を吐く思ひを致して心配を致して居るぞよ、と御神諭に示させ給へる所以なり。亦「オトメ」の言靈を略解する時は、

【オ】は親の位であり、親子一如にして、大地球を包む活用であり。

【ト】は十全治平にして、終始一貫の活用であり。

【メ】は世を透見し、内に勢力を蓄へて外面に露はさざる意義なり。

之を約むる時は、日本固有の日本魂の本能にして、花も實もある神人の意なり。

「汝等は誰ぞと問ひ賜へば、其の老夫僕は國津神大山津見神の子なり、僕が名は

足名椎、妻が名は手名椎、女が名は櫛名田比賣と謂すと答す」

明治三十一年の秋瑞の御魂の神代に須佐之男神神懸したまひて綾部の地の高天

原に降りまし、老夫と老女の合體神なる出口教祖に對面して汝等は誰ぞと問ひた

まひし時に、嚴の御魂の神代なる教祖の口を藉りて僕は國津神の中心神にして大

山住の神也。神の中の神にして天津神の足名椎となり手名椎となりて、天の下の

【オトメ】を平かに安らかに守り助けむとして、七年の昔より肥の河上に御禊の

神事を仕へ奉れり。又この肉體の女の名は櫛名田姫と申し、本守護神は禁闕要の

大神なりと謂し玉ひしは、以上の御本文の實現なり。【クシナダ】の

【クシ】は神智赫々として萬事に拔目なく一切の盤根錯節を料理し、快刀亂麻

を斷つの意義なり。

【ナ】は、萬物を兼ね統べ、能く行届きたる思ひ兼の神の活用なり。

【ダ】は、麻柱の極府にして大造化の器であり、對偶力であり、主從師弟夫妻等の縁を結ぶ神なり。

要するに、櫛名田姫の守護厚き天壤無窮の神國、大日本國土の國魂神にして、神諭の所謂大地の金神なり。

亦、汝の哭由は何ぞと問ひたまへば、吾が女は八稚女在りき。是に高志の八岐遠呂智なも、年毎に來て喫ふなる。今その來ぬべき時なるが故に泣くと答白す

以上の御本文を言靈學の上より解約すると、吾が守護する大地球上に生息する、息女即ち男子や女子は、八男と女と云つて、種々の澤山な神の御子たる人種民族が有るが、年と共に人民の靈性は、鬼蛇の精神に惡化し來り至粹至醇の神の分靈を喫ひ破られて了つた。高志の八岐の遠呂智と云ふ惡神の口や舌の劍に懸つて歲月と共に天を畏れず地の恩恵を忘れ、不正無業の行動を爲すものばかり、人民の八分迄は、皆惡神の容器に爲れて、身體も靈魂も、醉生夢死體主靈從に落下し、猶も變じて八岐の遠呂智の尾となり盲從を續けて、天下の騷亂、國家の滅亡を來しつつ、最後に殘る神國の人民の身魂までも、喫ひ破り亡ぼさむとする時機が迫

つて來たので如何にしてか此の世界の慘状を救ひ助け、天津大神に申上げむと、心を千々に碎き天下國家の前途を思ひはかりて、泣き悲しむなりと答へ玉うたと曰ふことなり。

高志といふ意義は、遠き海を越した遠方の國であつて、日本からいへば支那や歐米各國のことなり。海外より種々雑多の惡思想が渡來する。手を替へ品を替へて、宗教なり、政治なり、教育なりが盛んに各時代を通じて、侵入して來り敬神尊皇報國の至誠を惟神的に具有する、日本魂を混亂し、滅絶せしめつつある状態を稱して、高志の八岐の遠呂智の喫ふなると云ふなり。亦外國の天地は、數千年來此惡神の計畫に誑らかされて、上下無限の混亂を來し、國家を亡ぼし來たりしが、彼今猶其計畫を盛んに續行しつつ、遂に日本神國の土地まで侵入し、天津神の直裔なる日本オトメの身魂まで、全部喫ひ殺さむとする、それが最近に迫つて居る、只一つ神國固有の日本魂なるオトメが後に遺つた許りである。之を惡神の大邪靈に滅ぼされては、折角天祖國祖の開き玉へる大地球を救ふ事は出來ない。どうかして之を助けたいと思つて艱難辛苦を嘗めて居るのである。實に泣くにも

泣かれぬ、天下の状態であると云つて、之を根本的に救ふ事は出来ない。どうして良いかと途方に暮れ、天地に向つて號泣して居りますとの、變性男子の身魂の御答へなりしなり。

「其の形は如何さまにかと問ひたまへば、彼が目は赤加賀知なして、身一つに頭八つ尾八つあり。亦其の身に苔、及び檜、すぎ生ひ、其の長さ溪八谷、峽八尾を渡りて、其の腹を見れば、悉に常血爛れたりと答白す。（此に赤加賀知といへるは、今のほほづきなり）」

そこで其形は如何さまにかと、問ひたまへばと云ふ意義は、八岐の遠呂智なす悪思想の影響は如何なる状態に形はれ居るやとの須佐之男命の御尋ねなり。

そこで變性男子の身魂なる老夫と老女は、彼悪神の經綸の事實上に顯現したる大眼目は、赤加賀知なして身一つに、頭八つ尾八つありと云つて、悪神の本體は一つであるが、その眞意を汲んで、世界覆滅の陰謀に参加して居るものは、八人の頭株であつて、此の八つの頭株は、全地球の何處にも大々的に計畫を進めてをるのである。政治に、經濟に、教育に、宗教に、實業に、思想上に、其他の社會

的^{てき}事業^{じげふ}に對^{たい}して陰密^{いんみつ}の間に、一切^{いっさい}の破壊^{はくわい}を企^くてて居^ゐるのである。就^{つい}ては、尾^をの位^ゐ地^ちにある、惡神^{わるがみ}の無數^{むすう}の配下^{はいから}等^らが、各^{かく}方面^{ほうめん}に盲動^{まうどう}して知^しらず識^しらずに、一^{いち}人^{にん}の頭^{とう}目^{もく}と、八^やつの頭^{かしら}の世界的^{せかいてき}大陰謀^{だいいんぼう}に參^{さん}加^かし、終^{つひ}には既^き往^{わう}五^ご年^{ねん}に亘^{わた}つた世界^{せかい}の大^{だい}戰^{せん}争^{そう}など^らを惹^{じゃ}起^きせしめ、清露^{しんろ}其他^{そなた}の主^{しゅ}權^{けん}者^{しや}を亡^{ほろ}ぼし、勞^{らう}働^{どう}者^{しや}を煽^{せん}動^{どう}して、所^あ在^ら世^せ界^{かい}の各^{かく}方^{ほう}面^{めん}に、大^{だい}惑^{わく}亂^{らん}を起^{おこ}しつ^つあ^るので^ある。赤^あ加^か賀^が知^ちとは砲^{はう}煙^{えん}彈^{だん}雨^う、血^{けつ}河^か死^し山^{ざん}の慘^{さん}状^{じやう}や、赤^{せき}化^{くわ}運^{うん}動^{どう}の實^{じつ}現^{げん}で^ある。實^{じつ}に現^{げん}代^{だい}は八^や岐^{また}の大^を蛇^{ろち}が、い^いよ^いよ赤^あ加^か賀^が知^ちの大^{おほ}め^{だま}玉^{たま}をム^だキ出^だした所^{ところ}で^あり、既^{すで}に世^せ界^{かい}中^{ちゆう}の七^{なな}「オ^おト^とメ」を喫^くひ殺^{ころ}し、今^{いま}や最^{さい}後^ごに肥^ひの河^{かは}なる、日^に本^{ほん}ま^までも現^{げん}界^{かい}幽^{いう}界^{かい}一^{いち}時^じに喫^くはむとしつ^つあ^る處^{ところ}で^ある。要^{えう}するに八^やつ頭^{がしら}とは、英^{えい}と^とか、米^{べい}と^とか、露^ろと^とか、佛^{ぶつ}と^とか、獨^{どく}と^とか、伊^いと^とかの強^{きやう}國^{こく}に潛^{せん}伏^{ぶく}せる、現^{げん}代^{だい}的^{てき}大^{だい}勢^{せい}力^{りき}の有^ある、巨^{きよ}魁^{くわい}の意^い味^みで^あり、八^やつ尾^をとは、頭^{かしら}に盲^{まう}從^{じゆう}せる數^{あまた}多^たの部^ぶ下^かの意^いである。頭^{かしら}も尾^をも寸^{すん}斷^{だん}せ^なく^ては成^ならぬ時^じ機^きとな^りつ^つあ^るなり。

亦^{また}其^{その}身^みに苔^{こけ}及^{およ}び檜^ひす^ぎ生^おひ、其^{その}長^{なが}さ、溪^{たに}八^や谷^{たに}、峽^を八^や尾^をを渡^{わた}りて其^{その}腹^{はら}を見^みれば、悉^{ことごと}に常^{じつ}も血^ち爛^{ただ}れりと答^ま白^をす」とい^いふ意^い味^みは地^{ちきう}球^{じやう}上^{やう}の各^{かく}國^{こく}は皆^{みな}この惡^{あく}神^{がみ}蛇^だ神^{しん}の爲^{ため}に、山^{やま}の奥^{おく}も水^{みづ}の末^{すゑ}も暴^{あら}され、不^ふ穩^{おん}の状^{じやう}態^{たい}に陥^{おち}り、終^{つひ}には尼^{にかう}港^{じけん}事^{ごと}件^との如^{ごと}く、暉^{こん}春^{しゆん}事^{じけん}件^と

の如く、染血虐殺の憂目に人類が遇つて、苦悶して居ることの形容である。また
苔と云ふ事は、世界各国の下層民の事であり檜と云ふ事は上流社會の人民であり、
【すぎ】と云ふ事は國家の中堅たる中流社會である。要するに上中下の三流の人
民が常に不安の念に驅られて居る事であつて、實に六親眷屬相争ひ、郷閭相鬪ぎ
戦ふ、悲惨なる世界の現状を明答されたといふ事である。御神諭に、
「今の人民は外國の、惡神の頭と眷屬とに、神から貰うた結構な肉體と御魂を自由自在に汚
されて了うて、畜生餓鬼の性來になりて居るから、欲に掛けたら、親とでも兄弟
とでも、公事を致すやうな惡魔の世になりて居るが、是では世は續いては行かぬ
から、天からは御三體の大神様がお降り遊ばすなり、地からは、國常立尊が變性
男子と現はれて、新つのに世に立替立直して、松の五六七の世に致して、世界の人
民を歡ばし、萬劫末代勇んで暮す神國の世に替へて了はねばならぬから、良の金
神は、三千年の間に長い經綸を致して、時節を待ちて居りたぞよ。八つ尾八つ頭の
守護神を、今度はさつぱり往生いたさすぞよ」云々と明示されてあるのも、要は
この御本文の大精神に合致して居る一大事實である。

爾、速須佐之男命、其の老夫に是汝の女ならば、吾に奉らむやと詔たまふに、
恐れれど御名を覺らずと答白せば、吾は天照大御神の同母男なり。故今天より降
り坐つと答へたまひき。爾に足名椎、手名椎、然坐さば恐し立奉らむと白しき」
右御本文の老夫にとあるは良の金神國常立尊神靈に對しての御言である。また
足名椎手名椎神と並び稱せるは、肉體は出口直子であつて手名椎の神であり靈魂
は國常立尊の足名椎の意である。

茲に天より降り給へる須佐之男命は、老夫なる國常立尊の神靈に對し玉ひて、
是は汝の守護し愛育する所の、至粹至醇の神の御子たる優しき人民であるなれば、
吾に是の女の如き可憐なる萬民の救濟を一任せずやと、御尋ねになつた事である。
そこで國常立尊は實に恐縮の至りではあります、貴方は如何なる地位と、御職
掌の在す神で居らせらるるや。御地位と御職名とを覺らない以上は御一任する事
は出来ませぬと白し給ひければ、大神は至極尤もなる御尋ねである。然らば吾が
名を申し上げむ、吾は天津高御座に鎮まり坐ます、掛巻も畏き天照大御神の同母
弟であつて、大海原を知食すべき職掌である。されば今世界の目下の慘状を默視

するに忍びず、萬類救護の爲に、地上に降り來たのである。故に國津神たる汝の
治むる萬類萬民を救はむが爲に、吾に其の職掌を一任されよ然らば汝と共に八岐
の大蛇の害を除いて天下を安國と平けく進め開かむと仰せになつたのである。茲
に變性男子の身魂は、大變に畏み歡び玉うて、左様に至尊の神様に坐ますならば
吾女なる可憐なる人民を貴神に御預け申すと、仰せられたのである。是は去る明
治三十一年の秋に變性男子と變性女子との身魂が二柱揃うて神懸りがあつた時の
御言であつて、實に重大なる意義が含まれて在るのである。然し乍ら是は神と神
との問答でありまして、人間の肉體上に關する問題ではないから、讀者に誤解の
無いやうに御注意願つておく次第である。

爾速須佐之男命、乃ち、其の童女を湯津爪櫛に取成して、御角髮に刺して、其
の足名椎、手名椎神に告りたまはく、汝等、八鹽折の酒を醸み、且、垣を造り廻
し、その垣に八つの門を造り、門毎に八つの棧敷を結ひ、その棧敷毎に酒船を置
きて船毎にその八鹽折の酒を盛りて、待ちてよと、のりたまひき」
湯津爪櫛の言靈を略解すれば、

【ユ】は、天地、神人、顯幽、上一切を眞鈞合せ、國家を安寧に、民心を正直に立直す大努力の意であり、

【ツ】は、日の大神の御稜威を信じ、大金剛の至誠心を振り起し、言心行一致の貫徹を期し、以て神靈の極力を發揮するの意である。

【マ】は、生成化育の大本合致し、大決斷力を發揮し、實相眞如の神民たりとの意である。

【グ】は、暗愚を去つて賢明に歸し、萬事神助を得て意の如く物事成功するの意である。

【シ】は、信仰堅く、敬神尊皇報國の忠良なる臣民の基臺なりとの意である。

以上の六言靈を総合する時は、靈主體從の眞の日本魂を發揮せる神の御子と立直し玉ふ、神の經綸を進むると謂ふことである。

御角鬚の言靈を略解すれば、

【三】は、形體具足成就して、日本神國の神民たる位を各自に顯はし定めて眞實を極め、以て瑞の御魂に合一する意である。

【三】は、の御威徳を明かに覺知し、惟神の大道を遵奉し實行し、以て玲瓏たる玉の如き身魂と成るの意である。

【ツ】は、神の分身分靈として天壤無窮に眞の生命を保全し、肉體としては君國を守り、靈體としては神と人民とを助け守るの意である。

【ラ】は、言心行の三事完全に實現し、本末一貫、靈主體從の臣民と成りて、自由自在に本能を發揮するの意である。

以上の四言靈を總合する時は、愈日本魂の實言實行者となりて、其の靈魂は神の御列に加はるべき眞の御子と成りたる意である。

要するに、瑞の靈魂なる速須佐之男命は、二靈一體なる神政開祖の神人より、男と女の守護と化育とを一任され一大金剛力を發揮して、本來の日本魂に立替へ立直し、更に進んで其の實行者とし賜ふた事を「其の【オトメ】を【ユツツマガシ】に取成して御角髪に刺して」と言ふのである。

斯の如く、天下の萬民の身魂の改良を遊ばして、足名椎、手名椎の御魂に御渡しになるに就ては、相當の歲月を要したのである。或は神徳を以てし、或は物質力を以てし、或は自然力を以てし、或は教戒を以てし、慈愛を以てし、種々の御苦辛を嘗めさせ玉ふ其神恩を忘れては成らぬのである。そこで速須佐之男命は、足名椎手名椎なる變性男子の靈魂に對つて告り給ふた御言葉は左の通りである。幸ひ残れる「オトメ」は斯の如く、湯津爪櫛に取成し、御角髪に刺て立派に日本魂を造り上げたといふ事は、全く天津神の御靈徳と、吾御魂の活動と、汝命の至誠の賜であるから、第一に天地八百萬の神に、精選した立派な美味なる、所謂八鹽折の神酒を醸造し、且つ汚穢を防ぐ爲に清らかな瑞垣を四方に作り廻して、其の垣毎に祭壇を設け（八つ門）て、祭壇毎に祝詞座を拵へ、酒を甕の戸高知り甕の腹満て竝べて神々に報恩謝徳の本義を盡すべく、詔りたまふたのである。凡て酒と云ふものは、大神に獻る時は、第一に御神慮を和げ勇ませ歡ばせ奉る結構な供へ物であるが、體主靈從的の人間が之を飲むと決して碌な事は出来ないのである。同じ種類の酒でも、人間は御魂相應に、種々の反應を來すものであつて、惡

靈の憑つた人間が吞めば直ちに言語や、動作や精神が惡の性來を現はし、且つ酔ひ且つ狂ひ亂れ暴れるものである。或は泣くもの、笑ふもの、怒るもの、妙な處へ行きたくなるものなぞ、種々雑多に變化して、身魂の本性は現はし、吐たり倒れたり苦しみ悶えたりするものである。常に至誠至實の人にして、心魂の下津岩根に安定したものは、假令酒を常に得吞まぬ人でも、少々位時に臨んで戴いた所が、決して前後不覺になつたり、倒れたり苦しんだり、動作や言語や精神の變亂するもので無く、心中益々壯快を覺え、笑み榮え勇氣を増し、神智を發揮するものである。故に酒は神様に獻る所の清淨なる美酒と雖も、心の醜惡なるものが吞む時は、忽ち身魂を毒し弱らしむるものである。同じ酒を甲は一合吞んで酔ひ潰れて了ふかと思へば、乙は一升吞んでも酔はず、丙は三升位吞まなくては少しも酔うた如うな心持がしないと、云ふ區別の附くのは、乃ち身魂の性質に依りて反應に差異ある事の證である。甲は吞んで笑ひ、乙は怒り、丙は泣くと云ふ如うに、同じ味のある同じ種類の酒でも、區別の附くと云ふのは、實に不思議なもので、是はどうしても身と魂との性來關係に依るものである。

故、告りたまへる隨にして、如此設け備へて待つ時に、其の八岐大蛇、信に言ひしが如來つ。乃ち、船毎に、己々頭を垂入て、その酒を飲みき、於是、飲み酔ひてみな伏寝たり。爾ち速須佐之男命、その御佩せる十拳劍を抜きて、その大蛇を切散りたまひしかば肥の河、血に變りて流れき。そこで變性男子の身魂は命の隨々芳醇なる神酒を造りて、天地の神明を招待し、以て歡喜を表し賜ひ、神恩を感謝し給うたのである。八岐の大蛇の靈に憑依された數多の惡神の頭目や眷族共が大神酒を飲んで了つた。丁度今日の世の中の人間は、酒の爲に腸までも腐らせ、血液の循環を悪くし、頭は重くなり、フラフラとして行歩も自由ならぬ、地上に轉倒して前後も辨知せず、醜婦に戯れ家を破り、知識を曇らせ、不治の病を起して悶え苦しんで居るのは、所謂「飲み酔ひて皆伏寝たり」と云ふことである。爾に於て瑞の御靈の大神は、世界人民の不行跡を見るに忍びず、神軍を起して、此の惡鬼蛇神の憑依せる、身魂を切り散らし、亡ぼし給うたのである。十拳劍を抜きてと云ふ事は遠津神の勅定を奉戴して破邪顯正の本能を發揮し給うたと云ふことである。そこで肥の河なる世界の祖國日の本の

上下一般の人民は、心から改心をして、血の如き赤き眞心となり、同じ血族の如く世界と共に、永遠無窮に平和に安穩に天下が治まつたと云ふ事を「肥の河血に變りて流れき」と云ふのである。流れると云ふ意義は幾萬世に傳はる事である。古事記の序文に、後葉に流へんと欲すとあるも、同義である。

「故其の中の尾を切りたまふ時、御刀の刃毀けき。怪しと思ほして、御刀の端も刺割きて見そなはししかば、都牟刈之太刀あり。故此太刀を取らして、怪異しき物ぞと思ほして天照大御神に白し上げたまひき。是は草薙太刀なり」

中の尾と云ふ事は、葦原の中津國の下層社會の臣民の事である。其臣民を裁斷して、身魂を精細に解剖點檢し玉ふ時に、實に立派な金剛力の神人を認められた状態を稱して、御刀の刃毀けきと云ふのである。ア、實に豫想外の立派な救世主の身魂が、大蛇の中の尾なる社會の下層に隠れ居るわい。是は一つの掘り出しものだと謂つて、感激されたことを、怪しと思ほしてと云ふのである。御刀の端もと云ふ事は、天祖の御遺訓の光に照し見ると云ふ事である。

「刺割きて見そなはししかば都牟刈之太刀あり」と云ふことは今迄の點檢調査の

方針を一變し、側面より仔細に御審査になると、四魂五情の活用全き大真人が、中の尾なる下層社會の一隅に、潛みつつあつたのを初めて發見されたと云ふことである。都牟刈之太刀とは言靈學上より解すれば三千世界の大救世主にして、伊都能賣の身魂と云ふ事である。故、此太刀なる大救世主の靈魂を取り立て、異數の真人なりと驚歎され、直ちに天照大御神様、及びその表現神に大切なる御神器として、奉獻されたのである。凡ての青人草を神風の吹きて靡かす如く、徳を以て萬民を悦服せしむる一大真人、日本國の柱石にして世界治平の基たるべき、神器的真人を稱して、草薙劍と云ふのである。八岐大蛇の暴狂ひて萬民の身魂を絶滅せしめつつある今日、一日も早く草薙神劍の活用ある、眞徳の大真人の出現せむことを、希望する次第である。

また草薙劍とは、我日本全國の別名である。この神國を背負つて立つ處の真人は、即ち草薙神劍の靈魂の活用者である。

(大正九・一・一六 講演筆録 谷村眞友)

第三篇 神山靈水

第一二章 一人旅〔五七九〕

天津神達八百萬 國津神達八百萬

百の罪咎身一つに 負ひてしとしと濡れ鼠

猫に追はれし心地して 冨荒ぶ冬の野を

母の命に遇はむとて 出ます姿ぞ不愼しき

天の岩戸も明放れ 一度清き神の代と

輝き渡るひまもなく 天足の彦や胞場姫の

醜の靈魂の荒び来る 山の尾上や河の瀬は

風腥く土腐り 河は濁水満ち溢れ

雨は日に夜に降り續き

流れ流れて進む身の

蓑もなければ笠もなく

とある家路に立ち寄りて

一夜の宿を訪へば

はつと答へて出で来る

荒くれ男の顔みれば

こは抑も如何にこは如何に

鬼雲彦の夫婦づれ

地教の山の山の下

奇石怪巖立ち竝ぶ

谷の邊に細々と

立つる煙も幽かなる

奥に聞ゆる唸り聲

神素盞鳴の大神は

物をも云はず戸を開き

つかつか立ち寄り見給へば

八岐大蛇の蜿蜒と

室一面に蟠まり

赤き血潮は全身に

洟み涉りて凄じく

命を見るより驚愕し

忽ち毒氣を吹きかくる

鬼雲彦と思ひしは

全く大蛇の化身にて

鬼雲姫と思ひしは

大蛇に従ふ金毛の

白面九尾の古狐

裏口あけてトントンと
後振り返り振り返り

深山をさして逃げて往く
神素盞鳴の大神は

天津祝詞の太祝詞
聲爽かに宣りあげて

この曲津靈を言靈の
御息に和め助けむと

心を籠めて數歌の
一二三四五つ六つ

七八九十の數
百千萬の言靈に

さしもに太き八つ岐の
大蛇も煙と消えて行く

あゝ訝かしと大神は
眼を据ゑて見たまへば

家と見えしは草野原
跡方もなき蟲の聲

不審の雲に蔽はれつ
地教の山を目標とし

息もせきせき登ります
折柄吹き來る山嵐

八握の鬚のぼうぼうと
風に吹かれて散り果つる

木々の梢の紅葉も
命が赤き誠心を

照らしあかすぞ殊勝なる。

素盞鳴尊は、地教山の中腹なる道の邊の巖に腰打ち掛け、高天原に於ける磐戸隠れの顛末を追懐し、無念の涙にくれ居たまふ時こそあれ、忽ち山上より岩石も割るるばかりの音響陸續として聞え來る。

怪しの物音は刻々に近づき來たる。素盞鳴尊は又もや大蛇の惡神襲來せるかと、ツト立ち上り、劍の握に手をかけて身構へしつ待つ居たまへば、雲突く許りの大男四五十人の手下と共に、尊の前に大手を擴げて立ち塞がり、

「ヤア、其方は天教山の高天原に於て、天の岩戸に、皇大神を閉ぢ込めまつりたる惡魔の張本、建速素盞鳴尊ならむ。一寸たりともこの山に登る事罷りならぬ」と呶鳴りつくるを、尊は言葉優しく、

「吾は汝が言ふ如く、高天原を神退ひに退はれたる、素盞鳴尊なり。さりながらこの地教の山には、吾母の永久に鎮まり居ませば、一度拜顔を得て、身の進退を決せむと思ひ、遙々此處に來れるものぞ。汝物の哀れを知るならば、一度は此道を開きて、吾を母に會はせかし」

と下から出ればつけ上り、大の男は鼻息荒く仁王の如き腕を二ウツと前に出し、

「男子の言葉に二言は無いぞ、罷りならぬと云へば絶対に罷りならぬ。假令天地は上下にかへるとも、ミロクの世界が來るとも、いつかな、いつかな、吾々が守護する限りは、一分一寸たりとも當山に登る事は許さぬ。たつて登山せむと思はば此方の腕を捻ぢて登れ、此方は天教山に坐し在す大神の命を奉じ、素盞鳴尊萬一此山に登り來らば都牟刈の太刀をもつて斬りはふれ、との厳しき御仰せ、萬々一其方を此岩より一歩たりとも登すが最後、吾々一族は天地間に居る事は出來ないのだ。汝も元は葦原の國の主宰ならずや、物の道理も分つて居らう、下れ下れ、一時も早く此場を立ち去らぬか」

「ア、是非に及ばぬ、然らば汝の勝手に邪魔ひろげ、吾は母に面會のため、「たつて」登山致す」

と群がる人々の中を悠然として登り往かむとしたまふを、大の男は「ぐつ」と猿臂を延ばし、

「コラコラコラ、俺を誰方と思うて居るか、實の事を白状すれば、バラモン教の大棟梁、鬼雲彦のお脇立と聞えたる、鬼搦なるぞ」

と云ひながら尊の胸倉を「ぐつ」と取りぬ。尊はエ、面倒と云ひながら、片足をあげて「ポン」と蹴り玉ひし拍子に、鬼摺の體は四五間ばかり空中滑走をしながら片邊の林の中に、ドスンと倒れさまに着陸し、頭蓋骨を打つてウンウンと唸り居る。尊は委細構はず大手を振つて急坂をとぼとぼ登りたまへば、數多の家來は此勢に辟易し、蜘蛛の子を散らすが如く四邊の森林に姿を隠したりけり。

尊は猶も足を速めて急坂を登りたまふ時しもあれ、傍の木の茂みより、又ツト頭を出したる滅法界巨大なる大蛇の姿路上に横はり、尊の通路を妨げて動かず。

尊は大蛇に遮られ、稍當惑の體にて暫し思案に暮れたまふ時、山上より嚙喰たる音樂響き來り、數多の美はしき神人列を正し此場に現はれ給ひ、中に優れて高尙優美なる一柱の女神は、素盞鳴尊に向ひ、

「ヤヨ、愛らしき素盞鳴尊よ、妾は汝が母伊邪册命なるぞ、汝が心の清き事は高天原に日月の如く照り輝けり。さりながら大八洲國になり出づる、數多の神人の罪汚れを救ふは汝の天賦の職責なれば、千座の置戸を負ひて洽く世界を遍歴し、所在艱難辛苦を嘗め、天地に蟠まる鬼、大蛇、惡狐、醜女、曲津見の心を清め、

善ぜんを助たすけ悪あくを和なごめ、八や岐またの大を蛇ろちを十とつ握かの劍つるぎをもつて切きりはふり、彼かれが所しよ持ぢせる叢むら雲くもの劍つるぎを得えて天てん教けう山ざんに坐まし在ます天あま照てら大す神おほに奉たてるまでは、唯ただ今いま限かぎり妾わらはは汝なんぢが母ははに非あらず、汝なんぢ又また妾わらはが子こに非あらず、片かた時ときも早はやく當たう山ざんを去されよ、再ふたび汝なんぢに會あふ事ことあらむ、曲まが津つの猛たけび狂くるふ葦あし原はらの國くに、隨ず分ぶん心ころを配くばらせられよ」

と宣のらせ給たまふと見みれば、姿すがたは煙けぶりと消きえて後あとには地ち教けう山ざんの峰みね吹ふき渡わたる松まつ風かぜの音おとのみにして、道みちに障さ碍やりたる大を蛇ろちの影かげも何い時つしか見みえずなりぬ。

素す盞さ鳴の尊のみは止やむを得えず此こ處こより踵きびすをかへし、急きふ坂はんを下くだらせたまへば、以い前ぜんの男をとこ、鬼おに摑つかは大地たいちに平ひ伏れし尊みことに向むかつて歸き順じゆんの意いを表へうし、

「私わたくしは實じつを申まをせば鬼おに雲くも彦ひこの家け來らいとは偽いつはり、高たか天あま原はらの或ある尊たふとき神かみ様さまより内ない命めいを受うけ、貴き神しんの當たう山ざんに登のぼらせたまふを道みちにて遮しや斷だんせよとの嚴げん命めいを頂いたきしもの、嗚あゝ呼しか併しながら此この度たびの天あまの岩いは戸との變へんは貴き神しんの罪つみに非あらず、罪つみは却かへつて天あま津つ神かみの方ほうにあり、何いれがら此この度たびの天あまの岩いは戸との變へんは貴き神しんの罪つみに非あらず、罪つみは却かへつて天あま津つ神かみの方ほうにあり、何いれの神かみも御ご心しん中ちゆう御お察さつし申まをあへ居ある方かた々たのみ。吾われは之これより心こころを改あらため貴き神しんの境きやう遇ぐに滿まん腔かうの同どう情じやうを表へうし奉たてまつ勞らう苦くを共ともにせむと欲ほす、何なに卒そ々な々な世せ界かい萬ばん民みんの爲ために吾わが願ねがひを許ゆるさせ給たまへ」

と誠心表に現はれ涙を流して歎願したりける。尊は、

「其方は頭の傷は如何なせしや」

と尋ね玉ふに、鬼搦は畏みながら、

「ハイ、お蔭様にて思はず知らず、神素盞鳴の大神様と御名を稱へまつりし其刹

那より、さしも激烈なる痛みも忘れたる如くに止まり、割れたる頭も元の如くに

全快致したり。瑞靈の御神徳には恐れ入り奉る」

と両手を合して涙をホ口ホ口流し居る。素盞鳴尊は大に喜びたまひ、

「吾れ、高天原を退はれしより、時雨の中の一人旅、實に淋しい思ひを致したる

が、世の中は妙なものかな、一人の同情者を得たり。いざ之より汝と吾とは生の

兄弟となりて大八洲の國に蟠まる悪魔を滅し、萬民を救ひ天下に吾等が至誠を現

はさむ、鬼搦來れ」

と先に立ち、柴笛を吹きながら足を速めて何處ともなく天の數歌を歌ひつつ、西

南指して進みたまふ。

（大正一一・四・二 舊三・六 加藤明子録）

(昭和一〇・三・二〇 於彰化神聖會支部 王仁校正)

第一三章 神女出現〔五八〇〕

神素盞鳴の大神は

天の岩戸の變に依り

百千萬の罪咎を

其身一つに引受けて

千座置戸の艱難辛苦

神の御運も葦原の

瑞穂の國を此處彼處

漂ひの旅に立立ち給ひしより

今まで影を潛めたる

八岐大蛇や金毛九尾

醜の曲鬼遠近に

又もや頭を擡げつつ

此世を紊すウラル教

バラモン教やウラナイの

教の道の人々の

肉の宮居を宿となし

以前いぜんに勝まさる惡逆無道あくぎやくぶだう

世人よびとの心こころは悉ことごとく

ねぢけ曲まがりて一柱ひとはしら

誠まことを守る者ものも無なく

世よは日ひに月つきに曇くもり行ゆく

遠近をちこちの山やまの伊保理いほりや川かはの瀨せに

伊いた猛けり狂くるふ曲まが神かみの

聲こゑは嵐あらしか雷いかづちか

譬たとふる由よしも地震なみふるの

一時いちじに轟とどろく騒さわがしさ

山川やまかはどよみ草木くさき枯かれ

非時雨ときじくあめは降ふり頻しきり

風荒かぜあららぎて家いえを倒たふし

木き々の梢こつゑは裂さき折おられ

木この葉はは破やぶれて鋸のこぎりの

齒はを見みる如ごとくなりにけり。

神かむす素さ盞さん鳴の大神おほかみは、神代かみよに於おける武勇ぶゆう絶倫ぜつりんの英勇えいゆうにして、仁慈じんじの權化ごんげとも稱たふ

べき、瑞靈みづのみたまの雄々をしき姿すがた、漆うるしの如ごとき黒髮くろかみを長ながく背後はいごに垂たれ給たまひ、秩序ちつじよ整然せいぜんたる鼻び

下かの八字鬚はちじひげ、下頤したあごの御鬚おんひげは、瑠璃光るりくわうの如ごとく麗うるはしく、長ながく胸先むなさきに垂たれ給たまひ、雨あめに浴よく

し風かぜに梳くしけつ、山やまと山やまとに圍かこまれし、西藏チベット國こくに出いで給たまふ。

地ちけつ教山ざんに現あらはれて、一度いちどは尊みことの登山とぎんを塞ふさぎ奉まつりし鬼搦おにつかみは、昔むかしペテロの都みやこに在あり

て、道貴彦の弟と生れたる高國別の後身、幾度か顯幽二界に出没し、又も身魂は神界の、高天原に現はれて、天の岩戸の大變に差加はりし剛の者、神素盞鳴の大神の、清き御心推しはかり、義侠に富める逸男の、いかで此儘過ごすべき、天教山に坐しませる、皇大神の御言もて、地教の山に立ち向ひ、一度は神命もだし難く、瑞の靈の大神に、刃向ひまつり、尊の登山を惱まさむとしたりしが、心の奥は裏表、神素盞鳴の大神を、心の限り身の限り、助け奉らむものをとて、地教の山に夫れとなく、尊の登り來ませるを、今か今かと待ち居たる、其御心ぞ尊けれ。神素盞鳴の大神は、高國別を伴なひて、地教の山を後にして、青垣山を繞らせ、豊葦原の秘密國、夙荒び雪深き、ラサフの都に差掛る、斯かる例は昔より、まだ荒風のすさぶ野を、神を力に誠を杖に、心の駒の嘶きに、勇み進んで出でて行く。一天俄に掻き曇り、灰色の空ドンヨリと、包む折しも降り來る、激しき雪に二柱、とある藁屋に驅け込みて、一夜の宿を請ひ給ふ。

素盞鳴尊は門口に立ち、聲も靜に、
吾々は漂ひの旅を致す二人連、雪に閉され日は暮果て、行手に困り、困難を致

す者何卒お慈悲に一夜の宿を許せかし」

と訪ひ給へば、

「アイ」

と答へて一人の浦若き娘、門口に立ち現はれ、

「これはこれは旅のお方様、さぞ雪にお困りで御座いましたでせう。みすぼらしい茅屋なれど、奥には相當の廣き居室も御座いますれば、どうぞ御寛りと御休息を願ひます」

尊は、

「ア、世界に鬼はないもの……夫れは千萬忝ない、御言葉にあまえ、今晚はお世話になりませう」

「どうぞ、そうなさつて下さいませ、奥へ御案内致しませう」

と娘は淑やかに、足許優しく奥の一室に二人を導き行く。二人は娘の案内に連れ、奥の一室の圍爐裡の前に安坐して、手をあぶりつつ、ヒソヒソと話に耽り給ふ。

此時主人らしき男揉手をし乍ら此場に現はれ、二人に向つて叮嚀に會釋し、

「これはこれは旅の御方様、能くも此茅屋に御逗留下さいました。何分焚物の不自由な所にて、嘸お困りで御座いませう」

と云ひ乍ら、黎牛の糞の乾きたるを籠に盛りて、圍爐裡に焚べ、室を暖めるのであつた。此地方は四面高山に包まれたる、世界の秘密國にして、交通不便の土地なれば、他國人の入國を許さざる所である。されど高天原の大事變より、人心大に軟化し、稍世界同胞主義に傾きたる折柄なれば、他國人の入り来るを、今は反對に歓迎し、物珍らしがりて、部落の老若男女先を争ひ訪ね來り、面白き話を聽聞せむとするのである。平素の燃料は麥藁又は黎牛の糞を乾かせて用ゐ、麥を炒りて粉末とし、食料として居る。一時晴るれば、一時雪霰降り來り、天候常に定まらざる土地である。世界に於ける大高地なれば、穀物も餘り豊熟ならず、豊作の年と雖も、例へば五升の麥種を蒔いて、一斗の收穫を得れば、是を以て豊作となす位な所である。この家の主人の名はカナンと云ふ。カナンは炒麥の粉を木の椀に盛り、茶を沸かせ持ち來り兩手をつき、

「お二人のお方、御存じの通り不便の土地、他國の方に差上ぐる様な物は御座い

ませぬが、此れが吾々の國にては、最良の馳走で御座いますれば、ゆるゆる召しあがり下さいませ」

と言ひ棄てて一室に姿を隠したり。二人は麥の炒粉に茶を注ぎ、匙もて捏ね乍ら食事せる最中に、五人の美しき娘この場に立現はれ、叮嚀に兩手をついて辭儀をなし、一度に立つて歌を歌ひ且舞ひ、二人の旅の疲れを慰めむと努むる様子なり。「ヤア各方、遅がけに参り、御邪魔を致した上、結構な馳走に預り、實に満足の至りである。汝等は此家の娘なりや」

と言葉も終らざるに、年長の娘、

「ハイ妾は此家の主人カナンの妻で御座います。此處に居ります女は、皆妾の姉妹何れもカナンの妻となつて樂しき月日を送る者、併し乍ら高天原より神素盞鳴の大神様、千座の置戸を負はせ給ひ、何處ともなく落ち行き給ひしより、今迄平穩無事なりし此秘密郷に、ウラナイ教の魔神侵入し來り、古來の風俗を攪亂し、人心恟々として安き心無き折柄、又もやバラモン教の邪神、潮の如く押寄せ來り、今や國內は恰も修羅の巷の慘状で御座います。神素盞鳴の大神が此大地の御主宰

と現はれましたる世は、此秘密郷も實に天國樂土の様なもので御座いましたが、大神様がお隠れ以來と云ふものは、俄に國外より諸々の悪神入り來つて、種々の變異をなし、此儘に放任せば、忽ち地獄道を現出するやも計り難しと、國人の心ある者は、再び大神の出現を希ひ、茶斷ち鹽斷ち火の物斷ちを致し、天に祈願を籠めて居ります。夫故ここ一月許りは、吾々は總ての飲食を斷ち、日夜祈願を凝らし、善根を勵み居りまする様の次第、御相手も仕らず、御無禮の段は、右様の次第なれば、何とぞ悪からず御見直して下さいませ、一同の姉妹に代りて御願ひ致します」

素盞鳴尊は雙手を組み、兩眼より涙をホ口ホ口と落とし、默然として吐息をつき給ふ。

高國別「ア、實に感心だ、有難い有難い。汝等國人が憧憬する、神素盞鳴の大神様は、即ち此處に……否……やがて此國に御降臨遊ばして、汝等が望みを叶へさして下さるであらう、必ず心配されなよ」

「妾はカナンの妻カエンと申す者、どうぞ宜しくお願い致します。十日も二十日

其中の一人が男であれば、此男を夫とし、決して他家へ縁付はせないのである。又一戸の家に五人の男があり、一人の娘の出来た時は、五人の夫に一人の妻といふ不文律が行はれて居る。夫れ故男子許り生れたる時、或は女子許り生れたる時は、此家の血統は絶えて了ふといふ不便があるのである。茲に素盞鳴尊は、此惨状を見るに忍びず、他家と縁組をすることを許された。是れより素盞鳴神を縁結びの神と賞讃へ、此國にてはイドムの神として、國人が尊敬する様になつた。素盞鳴尊は、男女の囁き聲にフト目を醒まし、耳を澄して聞き給へば、何事か祈りの聲である。尊は高國別の肩をゆすり乍ら、尊「ヤア高國別、目を醒されよ。何だか怪しき人の祈り聲」と言葉終らぬに、高國別はパツと跳起き、
「如何にも大勢の聲で御座います。最前も此家の女房力エンとやらの話に、茶斷ち、鹽斷ちを致し、素盞鳴尊の再出現を祈つて居るとか聞きましたが大分ソナ事ではありますまいか」
尊「吾は此室に於て休息致し居れば、汝はこれより事の實否を調べ來れよ」

高國別「承知致しました」
と此場を立つて、忍び足に聲する方に進み行く。見れば數十の男女、眞裸の儘、庭前の野原に両手を合せ蹲踞み乍ら、力なき聲を振絞り、何事か一心不亂に祈願をこめ、やがて一人の男、大麻を打振り乍ら神懸状態となつて、驀地に西北指して駆け出したり。數多の男女はわれ遅れじと一生懸命に追跡する。されど永らくの斷食に身體弱り、轉けつ輾びつ其後を追ひ行く。高國別はその状況を瞬きもせず打眺めて居たが、知らず識らず自分も歩み出し、引きずらるる如き心地して、大勢の後に忍び忍び従ひ行く。遙前方に當りて枯芝の盛りたる如き小さき饅頭形の丘が見えて居る。麻振りつつ先に進んだ男は小丘の上につ突つ立ち、何事か叫び乍ら、麻を前後左右に打振り打振り狂氣の如く踊り廻り、飛びあがり跳まはり、キヤツキヤツと怪しき聲を立てて居る。數十人の老若男女は同じく小丘の上に駆けあがり、これ亦先の男と同様踊りまはり跳廻る。高國別は原野の草に身を隠し、其怪しき祈禱を息を殺して見つめて居た。暫くあつて麻持った男は、小丘の彼方に忍ち姿を隠した。續いて數多の男女は一人減り二人減り、三人、五人と數

を減じ、終には唯一人の麗しき女を残して、残らず姿を没して了つた。

高國別「ハテ、不思議な事があればあるものだ。あれ丈け大勢の老若男女が、何處へ往つたか、見渡す限り目を遮る物なき此廣原に、煙の如く消え失せるとは合點の行かぬことだ。まさか大地に吸収されて粉末になつたのでもあるまい」

と獨ごち乍ら、前後左右に心を配り、一足々々進み行く。一人の娘は小丘の上にもろて雙手を組み、稍伏目勝に無言の儘俯むいて居る。高國別はつかつかと進み、

「何れの女中か知りませぬが、先程物蔭にて窺へば、幣束を持てる男の後より數十人の男女、此小丘を目がけて駆け上り、前後左右に踊り狂ふよと見る間に、忽ち姿は消え失せて了つた。あなたは其中の一人らしく思はるるが如何なる次第な

るか、詳細に………お構ひなくば物語られたし。吾は天下を救ふ神の使………」

と問ひかけたるに、女は其聲に驚いて高國別の顔を打見守り、首を左右に振つて何の應答もせざりける。高國別は已むを得ず、自ら小丘に駆け上り、附近を

点検すれ共、別に穴らしきものもなければ、人の倒れたる姿も見えぬ。蟲の聲さへ聞えない。高國別は、

「ハテ訝かしや」

と丘上に「どつか」と坐し、雙手を組んで思案に暮れ居たり。此時、以前の女は、突然高國別の首に細紐をひっかけ、背中合せに負ひ乍ら、トントントンと元來し路へ走り出す。高國別は喉を締められ、息も絶え絶えに、手足を藻掻きつつ負はれて行く。大の男が命懸の大藻掻きに屁古垂れたと見え、女は一二丁來たと思ふ時、石に躓き、脆くも其場に倒れた。途端に女は細紐を放す、高國別はヒラリと身返し起上り、女の素首をグツと握つて、

「コラ汝は大膽不敵の曲者、容赦はならぬぞ」

と蝶螺の如き拳骨を固めて、骨も砕けよと許り、打下ろさむとする形勢を示す。併し高國別の心の中は、決して此孱弱き女を打擲する心は、毫末もなかつた。唯勢を示して事實を白状せしめむ策略であつた。

女は、

「ホ、ホ、ホ、あのマア恐ろしいお顔わいなア。ソナ怖い顔をなされますと、此西藏の國は女房になる者が御座いませぬよ。あのマアお【むつ】かしい顔……」

ホ、、、、

「アハ、、、、ナント大膽至極な女もあればあるものだなア」

「オホ、、、、何程怖い顔をなさつて、拳を固め、妾を打つ様な形勢をお示しになつても、あなたの腹の中はさうではありますまい。何を言うても、一方は孱弱き女一方は鬼をも挫ぐ荒男の英雄豪傑、どうして纖弱き女が、……………馬鹿らしくも打擲が出来ませう」

とニタリと、高國別の顔を打まもる。

「ナント妙な女だ。……………コラ女、此方はソナ優しい女の腐つた様な男でないぞ、鬼雲彦の一家來の鬼搦とは俺の事だ。頭からかぶつて喰てやらうか……………」

「ホ、、、、、夫れ程偉い鬼搦なら、何故妾に油斷をして、細紐に喉を締められ

たのか。それや全く偽り、お前は高天原から下り來たれる高國別であらうがなア」

「イヤ拙者は決して左様な者では御座らぬ。惡逆無道のバラモン教の惡神だ。この方が此國に現はれた以上は、何奴も此奴も、片つ端から雁首を引抜いて、御大將鬼雲彦や、八岐大蛇の神に御馳走を献上するのだ」

「ホ、、、、、置かんせいなア、これ高サン
と肩をポンと叩く。」

「オイ馬鹿にするな。金毛九尾のお化奴が色で迷はず浅漬茄子、何程巧言令色の
限りを盡し、吾を誑惑せむとするも、女にかけては無関係、没交渉の拙者だ。女
色に迷うて、どうして此惡の道が弘まらうかい。グズグズ吐すと股から引裂いて
やらうか」

「サアサア股からなつと、首からなりと、あなたに任せた此體、一寸刻か五分試
し、焚いて喰はうと、焼いて喰はうと、あなたの御勝手、妾は夫れが満足で御座
んす。ホ、、、、」

「益々分らぬ奴だ。エー、怪つ體の悪い、此廣野ヶ原で幸ひ人が居ないから好い
ものの、天知る地知る吾も知るだ。七尺八寸の荒男が、六尺足らずの纖弱き女に
口説かれて、グズグズ致して居るのは、實に何とも慙愧汗顔の至りだ……… オイ
女其方は一體全體何者だ。早く化の皮を現はさぬか」

「ホ、、、、、妾はあの天教……… 否々やつぱり化物の女で御座います」

「アハア、さうか、貴様はやつぱり、癡狂院代物だな。コンナキ印に暇を潰して居つては尊様に對して申譯がない………オイ女、貴様ゆつくりと、夢でも見て、獨言を言つて居るが宜からう」

と踵を返し、小丘を指して進み行かむとす。以前の女又もや細紐をパツとふりかけた途端に、足をさらへられて、大の男はドスンと大地に倒れた。

「アイタ、エーエーまた引つかけよつた。馬鹿にするない、モウ了見ならぬぞ」

「ホ、ホ、高國別の弱い事わいのう、アイタとは、そら何とした又弱音を吹きやしゃんす。ひつかけ戻しの仕組ぢやぞい。神が綱を掛けたら、逃げやうと言つても逃しはせぬ、アイタとは誰に會ひたいのだ工、神素盞鳴の大神にか………」

「エーやつぱり此奴ア金毛九尾の化狐だ。何もかも皆知つてゐる、サアもう勘忍袋の緒が切れた、………ヤア女、此高サンが首途の血祭だ、覺悟を致せ………」

「ホ、ホ、あの言靈でなア」

「エー言靈もあつたものかい、高サンの腕力で荒料理だ、覺悟を致せ」

「ホ、、、、、、妾は數萬年の昔より、磐石の如き覺悟を定めて居りますよ。あのソワソワしい高サンの振舞、わしや可笑しい、ホ、、、、」

「エー邪魔臭い、コンナ奴に相手になつて居つたら、日が暮れるワイ。兔に角怪しき彼の小丘、一伍一什を取調べて尊様へ報告を致さねばなるまい、尊におかせられても、さぞやお待兼であらう。エー此綱を此奴に持たして置けば、又もやひつかけ戻しに遭はしよるかも知れない」

と云ひ乍ら、細紐をクルクルと手繰つて、懐に揆ぢ込まうとする。

「ホ、、、、、廣野ヶ原で七尺八寸の泥棒が現はれた、ナントまあ甲斐性のない泥棒だこと、女の腰紐を奪つて歸る様な泥棒に口クな奴はない」

「エー面倒臭い、今度は眞劍だ、股から引裂いてやらう………ヤイ女、俺が怒つたら、本眞劍だ」

「オホ、、、、、其本眞劍も怪しいものだ、細紐一本で貴重な女の生命を取らうとする腰拔泥棒………美事取るなら取つて見よ。妾もサル者、此細腕の續く限り、

力の限り、お相手になりませう」

「アハ、ハ、ハ、一寸やりよるな、………アーア、女子と小人は養ひ難いだ。ヤア何處のお女中か知らぬが、觀客の無い芝居は根つかからはづまない。モウ此處らで幕切れと致して二人手に手を取つて、二世や三世はまだ愚、五六七の世までも、生死を共に、死出も三途も、駱駝の道伴れ、鴛鴦の衾の睦み合ひと云ふ段取だ。サアサア最早平和克復だ。あなにやしエー乙女、チャツとおじや」

と目を細くし、舌をペロリと出して、腰付怪しく手を差し延ばせば、女は三十珊の榴彈を撃つたる如く、

「マア好かんたらしいお方」

と云ひ乍ら、肱鐵砲を二三發亂射したり。

「アイタ、益々合點の行かぬ剛の女、古今無雙のヒーロー豪傑、高國別も半分許り感服仕つた」

「ホ、ハ、ハ、自我心の強い高國別、半分感服とはそりや何の囁語」

「イヤもう全部感服仕つた。金毛九尾白面の惡狐と云ふ奴は實に巧なものだ。それ位の力量がなくては、到底此秘密郷を蹂躪する事は出来ないワイ。何は免も有

れ是これから貴様きさまの氣きに入いらぬ彼かの土饅頭どまんじゅうの探險たんけんだ」

と大股おほまたにノソリノソリと驅出かけだしたり。

女をんなは（義太夫調ぎだいふてう）

「マアマア、待つて下くださいませ。折角せつかく顔見かほみた甲斐かひも無なう、モウ別わかるとは曲まががな

い。お前まへに會あひたさ、顔見かほみたさ、死しなば諸共もろとも死出しで三途さんづ、神々かみがみ様に願ぐわんをかけ、先さきへ

廻まはつてお前まへの行衛ゆくゑ、お前まへの來くるのを待つて居ゐた妾わらはが思おもひ、物ものの憐あはれを知らぬ男をとこは、

人間にんげんではあるまい、妾わらはが切せつなき思おもひを推量すいりやうして下くださんせ」

「アア馬鹿ばかにしよる、斯こうして何時いつまでも暇取ひまとらせ、其間そのまに數十人すうじふにんの老若男女らうにやくなんによ

を計略けいりやくを以もつて虐殺ぎやくさつするの計畫たくみであらう。………エー邪魔じゃまひろくな」

と女をんなを蹴飛けとばし、踏ふみ散ちらし、韋駄天ゐだてん走りに進すすみ行く。

「オーイオーイ、高サたかン待つた」

「エー待つても、待つたもあるものか、貴様きさま、勝手かつてに何なんなとほざけ」

と一足ひとあし々々小丘ひとあしの周圍まはりを四股踏しこふみ乍ながら歩あゆみ出した。忽たちまちバサリと大地だいちは凹くぼんで四しこ

五間地けんちの底そこへズルズルと落おち込こんだ。以前いぜんの女をんなは落おち込んだ穴あなの口くちより、下したを

覗のぞいて、

「ヤア高たかサンか感かん心しん々々 ホほ、、、、」

と笑わらつて居ゐる、高たか國くに別わけの身みの上うへは果はたして如い何かなるであらうか。

（大正一・四・三 舊三・七 松村眞澄録）

第一四章 奇くしの岩がん窟くつ（五八一）

高たか國くに別わけはドサリと陷おとし竈あなに落おち込こんだ。以い前ぜんの女をんな、又またもや追おひ掛かけ來きたり、

「ホ、、、、」

と笑わらひ乍ながら、何い時つの間まにか金きん線せんを吊つり下おろし、高たか國くに別わけの腮あこに引ひつかけ、振ふり釣つる瓶べを手た繰ぐる様やうにプリンプリンと引ひき上あげる。高たか國くに別わけは喉のど締しめ上あげられ、又またもや舊もとの穴あなの口くちに上あが上あつて來きた。

「ホ、、、、、あのマア蒼あをいお顔かほ」

高國別「エー、又しても又しても、能く悪戯をする女だなア。織弱き女の分際として荒男の腮に綱を掛け、引き上るとは不届千萬な、飽迄も圖々しい奴だ。見た割りとは力の強い女だなア」

「オホ、何處までも執着心の綱は離れませぬよ。此者と見込みを付けて神が綱を掛けたら放さぬぞよ、引掛戻しの此仕組、開いた口が閉まるまいがな」

「人の腮太に堅い堅い金線を引掛けよつて開いた口が閉んで仕舞つた哩、コウ之見よコンナ型がつきよつた」

「喉の型はついたが妾の「かた」は、如何してつけて下さる」

「エー、五月蠅い奴だ、「かた」をつけるも、つけぬも有つたものかい。貴様と俺とは夫婦でも無ければ味方でも無い、又不俱戴天の敵でも無いのだ。あまりチ

ヨツカイを出すと將來の爲めにならぬぞ」

「貴方、ちつと見方が違ひは致しませぬか、堅き誠の心を以て飽迄も神の道を進まねばなりません。輕學妄動を慎み慎重の態度を以て神の道に仕ふるが貴方の

お役」

「エー味方が違ふの、敵が違ふのと、あた八釜しい哩、一體貴様は何者だ、如何も腑に落ちぬ代物だなア」

「妾は腑に落ちぬ代物か知りませぬが、貴方は穴に落ちる代物だ。ホ、ホ、ホ、一寸當てて御覽、妾の正體が分らぬ様な事で、如何して此地底の岩窟が探險出来ませうか。第一着手として妾の素性を能く審神して下さい」

「呵、邪魔臭いな、お前の方から「妾は何々の何々じゃ」と自白せぬかい。さうしたら此方が正か邪か、真か偽かと言ふ事を審神して與るのだ」

「ホ、ホ、ホ、デモ審神者の、探り審神者の、へボ審神者サン、妾のネームを聞かねば審神が出来ませぬか、貴方には神様の御守護は零ですな」

「何だ、審神者には審神者としての権能があるのだ、人に物を尋ねるのに何故自分のネームを名告らないのか、「妾は何か當てて御覽」ナンテ、まるで十字街に立てる旅人が「俺は何方へ行くか知ってますか」と尋ねる様なものだ。ソナ理窟が何處にあるかい、早く名告らないか」

「ホ、ホ、ホ、お前サンは丁度「私の行く處は何處で御座います」と、人に訊ね

る様な審神者だ。ソナ審神者が如何して地底の岩窟が探險出来ませうぞ。妾の素性がはつきり分る迄、千遍でも萬遍でも綱を掛けて引掛戻しをしますから覺悟をなさいませ、ホ、ホ、ホ、」

「ア、ア、進退維れ谷まる」とは茲の事だ、藜桶へ足をつツ込んだ様な者だ、困つたな。オイオイ女、良い加減に洒落て置いたら如何だ、神界の御經綸の妨害致すと爲めにならぬぞ。如何だ、神界へ汝の罪を奏上致さうか」

「何と言つても放しはせぬ、いや一寸も動かしはせぬ、動くなら動いて御覽うじ、ホ、ホ、ホ、」

「ア、ア、仕方が無いなア、いやもう何れの神か知りませぬが、トコトン往生致しました。何卒今迄の御無禮、お氣障は千萬御座いませうとも、廣き厚き大御心に見直し聞直し下さいまして御勘辨を願ひます。鼻の高國別も斯うなつちや臺なした、此鼻は薩張り常世城の鷹取別ぢやないがベシヤベシヤだ」

「ホ、ホ、ホ、此鼻々々、不細工屋姫の低國別サン、合點がゆきましたか」

「オ、オ、オ、いつたいつた、いやもう、ずんと合點がいつた哩」

ソナナラ當てて御覽

ママア矢つ張女ぢや。怪體な譯の分らぬ女神だな

妾のネームは何と申しますか

サア何と申して好いやら、一向合點がゆかぬ、大方お前サンはジユピターの神

であらう

女は首を左右に振り、

違う違う

ソナナラ、ジユピターの神のシスターだらう

違う違う

アポロの女神か、アテーナの女神か、あてなア、合點の往かぬ事だ

お前も餘つ程アポーロ（阿呆）の男神だよ、オホ、

ア、斯うなると天下の審神者は竝や大抵では無い哩

さうさ、俄信心の俄審神者では此女神の正體は分りますまい

と鼻をチヨンと抑へて見せた。高國別は忽ち大地に平伏し、

「これはは御無禮を致しました。いやもう梅花の春陽に會うて一度にパツと開く如く爛漫たる櫻花の如く心の暗は開けました。貴神は天教山に坐します木花姫の命様」

と兩手を合せて拜跪する。忽ち空中に微妙の音樂聞え、馥郁たる梅花の香、鼻に迫るよと見る間に如何はしけむ、女神の姿は煙と消えて、野路を吹き渡る風に雪さへ交つてちらつき初めた。

此時捺鉢卷、禪十文字に綾どり、息せききつて此場に現はれた一人の男、大地にピタリと頭を下げ、

「もうしもうし、高國別の神様、カナンの家に御逗留遊ばす立派なお方から、大事變が突發したから貴神様を呼んで来いと仰せられました。サア一時も早く私の後についてお歸り下さいませ。タ、大變な事が出来ました」

「ナニ、須佐之男の尊様が某に歸れと仰有つたか、はて、合點の往かぬ事だワイ」と雙手を組んで小丘の上に端坐した儘考へ込んで居る。地底よりは何者の聲とも知らぬ、

「ヤアヤア、高國別、何を愚圖々々致して居る、早く地底の岩窟へ這入つて來な
いか、岩窟内には大慘事が突發致して居るぞ。人を救ふは宣傳使の役だ、數十人
の生靈をみすみす見殺しに致すか」
と嗚鳴り聲が聞えて來た。

男は、

「もしもし高國別サン、大神の御命令で御座います、サアサア早く御越し下さい
ませ。神様の御命令には一時も早く立歸れ、愚圖々々致さば主従の縁をきるとの
厳しき御仰せ、サア早くお越し下さい」

地底の岩窟より、

「ヤア高國別、汝は數十人の生靈を見殺しに致す所存か、宣傳使の天職を何と心
得て居る。九死一生の場合だ、一刻も早く岩窟に侵入して人命を救へ」

「もしもし何卒早くお歸り下さい、大神様の一大事」

「大神様の一大事とは如何なる事が突發いたしたか、詳細に物語れよ」
男は、

「大神様には數百人のウラナイ教の魔神に十重二十重に取圍まれ、衆寡敵せず御身邊刻々に危機に瀕し給ふ。早く早くお歸り遊ばせ、時遅れては一大事、必ず必ず躊躇逡巡して吞臍の悔を貽し給ふな」

地底の岩窟より、

「ヤアヤア高國別、數十人の生靈を見殺しに致す所存か、疾く來りて可憐なる彼等の生命を救へ」

と兩方より絞木にかかつた高國別はホツと一息、免やせん斯くや詮術もなくなく涙に暮れて居る。忠と仁との板挟みになつた高國別は忠ならむとすれば仁ならず、仁ならむとすれば忠ならず、心は宙に岡の上、雙手を組んで深き思案に沈み居る。地底の岩窟よりは阿鼻叫喚の聲、益々烈しく手にとる如く耳朶をうつつた。

「ア、如何にせむ、彼方たてれば此方がたたため、此方たてれば彼方がたたため、兩方たつれば身がたたため」

と兩刃の劍を執るより早く兩肌を脱いで、左の脇腹にグツと突き立てむとする折しもあれ、忽然として此場に現はれたる以前の女神、忽ち高國別が右手をグツト

抑へて動かさず。高國別は身を藻掻き手を振り放ち、又もや兩刃の劍を我脇腹に突き立てむとする折しも、以前の女神は飛鳥の如く飛びかかり、兩刃の劍を手早くもぎ取り聲嚴かに、

「汝は忠と仁との分水嶺に立ち其去就に迷ひ、今や自ら身を殺さむとせしは不覺の至りなり、先づ先づ心を落付けよ。神須佐之男の大神は御安泰に坐しますぞ、汝が眞心を試さむ爲め、木花姫之命身を變じて迎への男となり、所存の臍を固めしめむとなしたる神業なり。須佐之男尊は神變不思議の神力在しませば心慮を煩はずに及ばず、一時も早く地底の岩窟に落ちて、魔神に惱まされつつある數多の生靈を救へ」

と言葉終ると共に女神の姿も男の影も煙の如く消え失せた。高國別は地底の岩窟目蒐けて身を躍らしヒラリと飛び込んだ。岩窟は意外に廣く幾十丁ともなく前方に開展して居る。高國別は足を速め神歌を歌ひ乍ら先へ先へと進んで行く。

(大正一一・四・三 舊三・七 北村隆光録)

第一五章 山の神〔五八二〕

此世を澄す素盞鳴の神の命に従ひて

御稜威も高き高國別は奇の岩窟に陥りし

老若男女の生命を一人も残さず助けむと

地底の洞に飛び込みて神に願をかけまくも

雄々しき姿すたすたと聲する方を辿りつつ

往き當りたる岩の戸に又もや両手を組みながら

進退茲に谷まりて暫し思案に暮れ居たる。

時しもあれや何處よりか、閃光輝き高國別が前に火玉となりて進み來るものあり。

高國別は劍の把に手をかけて、寄らば斬らむと身構へす。巨大なる火の玉は、

高國別が四五間前に萬雷の一時に落つるが如き音響と共に落下し、白煙となつて四邊を包み咫尺を辨ぜざる靄の中、高國別は「きつ」と腹を据ゑ臍下丹田に息を詰め、天津祝詞を奏上しければ、今迄咫尺を辨ぜざりし猛煙は拭ふがごとく消え失せて、優美なる一人の女神、莞爾として佇立して居たまふ。

高國別は、

「ヤア汝は何者なるぞ、察する所此岩窟に蟠まる金毛九尾の惡狐の眷屬ならむ、吾が兩刃の長劍に斬り捨てむ」

と云ふより早く劍光閃く電の早業、斬つてかかれば女神は中空に舞ひ上り、飛鳥の如く右に左に上に下に體を躲し、遂には又もや以前の火彈と化し、唸りを立てて岩窟の内を矢を射る如く逃げ去りにける。

油斷はならじと高國別は附近キヨロキヨロ見廻す折しも、身の丈一丈五六尺もあらむと思はる大男、異様の獸を引きつれながら此場に現はれ、高國別に一寸會釋したり。高國別は又もや魔神の襲來ならむと眼を配り身構へする。大の男は大口開けて高笑ひ、

「アハ、、、、、、汝は高天原より下り來れる俄造りの似非審神者、吾正體を見届けよ」

と鏡の如き眼を見開き、「かつ」と睨めつけたり。高國別は兩手を組み、鎮魂の姿勢を取り、ウンと一聲言靈を發射したるに、大の男は忽ち體を變じ優美なる女神となりぬ。

高國別は、

「千變萬化の惡神の惡戯、今に正體を現はして呉れむ」

と兩刃の長劍を閃かし、女神に向つて骨も通れとばかり突きかかる。女神は手早く體をヒラリと躲した途端、勢餘つて高國別は岩窟の中の隧道を、トントントン、と七八間許り行き過し、底ひも知れぬ陷穽に眞逆さまに轉落し、高國別は其儘息絶え、最早此世の人にはあらざりけり。

高國別は唯一人、天青く山清く百花爛漫たる原野を神言を奏上しながら何處を當ともなく、足の動くままに身を任せ進み行く。

前方に屹立する雲の衣を半被りたる高山が見えて來た。高國別は山に引つけら

るる如き心地して、足に任せて進み行く。パタリと行き當つた峻坂、仰ぎ見れば鮮花色の男女の群四五人、何事か面白可笑しく囁きながら、此方に向つて悠々と進み来る。高國別は両手を組んで獨言、

「ア、吾は素盞鳴尊の大神の御伴仕へまつり、カナンが一家に休息し給ふ尊の命によつて諸人の後を追ひ、不思議の岩窟に忍び入りしと思ひきや、天空快闊一點の雲霧風塵もなき大原野を渡り、今又此山口に来るこそ合點がゆかぬことである
哩」

と後振り返り四方の光景を眺めて思案に暮れて居る。五人の男女は此處に現はれて一齊に恭しく目禮しながら、

「貴下は高國別の宣傳使、活津彦根神に在さずや、吾等は神伊邪諾大神の使者として貴下を迎への爲に罷越たり、イザイザ御案内申さむ」

と先に立つて進み行く。高國別は何心なく、いそいそと五人の後に従ひ急坂を登り行く。漸う坂の絶頂に達した。二男三女の神人は口を揃へて、

「これはこれは高國別様、お疲れで御座いませう。此處は珍の峠の絶頂、先づ御

休息うそく下くださいませ」

高國たかくに別わけは、

「ア、思おもひも寄よらぬ一人旅ひとりたび、何なんとなく此麗このうるはしき山野さんやを跋渉ばつせふするにも話相はなしあひて手てもなく
稍寂寥ややせきれうを感じかんて居ゐました。然しかるに此坂このさかの下したより麗うるはしき貴方等あなたたらの御迎おむかへ、一圓合點いちえんがてん
が参まゐり申まをさず、珍うづの峠たうげとは何國なにくにの山やまで御座ござるか」

五人ごにんは、

「ハイ」

と云いつたまま、ニコニコと笑わらつて答こたへぬ。折をりしも得えも云いはれぬ涼すずしき風徐かぜもむろに吹ふき
來きたり、高國別たかくにわけの顔かほを撫なで颯々さつさつたる聲こゑを立て、幅廣はばひろの木葉このはを翻ひるがへしながら過すぎて行ゆく。
「オ、恰まるで天國淨土てんごくじやうどのやうな心持こころもちが致いたす、百鳥ももどりは空そらに謠うたひ百花爛漫ひやくくわらんまんとして咲さき亂みだ
れ、風かぜは清きよく香かばしく、幽かすかに聞きこゆる微妙びめうの音樂おんがく、曇くもり果はてたる葦原あしはらの國くににもか
かる麗うるはしき郷土きやうどのあるか、ア、心持こころもちよや」
と芝生しばふの上うへにどつかと坐まし、言葉涼ことばすずしく一同いちどうに向むかひ、
「合點がてんの行ゆかぬ今日けふの旅行りょかう、貴方等あなたたらは何れいづの神かみに坐まし在ますか、名乗ならせたまへ」

ひとり 一人の男は恭しく、

「私は三五教の宣傳使たりし龜彦で御座います。これなる女は菊子姫と申し、神素盞鳴の大神の第六の御娘、今は大神の御心により千代も變らぬ宿の妻、此處は地底の國の天國、珍の峠で御座います」

「ア、貴方は音に名高い龜彦の宣傳使、貴方は大神の御娘菊子姫様か、思はぬ處でお目に懸りました。してして父素盞鳴の大神は今何處くに在すか、聞かま欲しう存じます」

菊子姫は涙をはらはらと拂ひながら、

「申すも詮なき事ながら、父大神は天地諸神人のために、千座の置戸を負はせたまひ今は味氣なき漂泊の一人旅、何處の果に在すらむ、せめては其御消息なりとも聞かま欲し」

と涙ぐみ芝生の上に泣き伏しにけり。

梅彦は、

「これはこれは菊子姫殿、此處は地底の天國で御座る。天國に涙は禁物、歡喜の

花はなの開ひらくパラダイスで御座ござるぞ。いや高たかく國くに別わけ様さま、吾われ々われは三五あななひけう教せんの宣でん傳し使したりし梅うめ彦ひこと申まをす者もの、これなる妻つまは菊きく子こ姫ひめの姉あね幾いく代よ姫ひめで御座ございます。大神おほかみの内ない命めいに依よつて夫婦ふうふの約やくを結むすびました。此この後ご宜よろ敷しくお願ねがひ致いたします」

「ア、左さ様やうで御座ござつたか、思おもひも寄よらぬ不ふ思し議ぎの對たい面めん、全まく大神おほかみ様さまのお引ひき合あせ、ア、有あり難がたし。斯かくも麗うるはしき山さん上じやうにて大神おほかみの姫ひめ御み子こに御お目めに掛かる事こと望ぼう外がいの仕し合あせで御座ござる」

「貴あな神たはペテロの都みやこに於おいて驍げう名めい隱かくれなき御おん神かみ様さま、幾いく度たびか生せい死しを往ゆ來き遊あそばされ、此こ處こに活いく津つ彦ひこ根ね神のかみと現あらはれ給たまひし天てん下か無む雙さうの忠ちゆう勇ゆう義ぎ烈れつの神かみ様さまと承うけたまはる。天あめの太ふと玉たま命のみことの仲なか介だちにより、素す盞さん鳴の大神おほかみの御お許ゆるしを得えて第だい一いちの御み子こたる、此この愛あい子こ姫ひめ様さまを貴き下かの妻つまと神かみ定さだめさせ給たまへば、今いまより愛あい子こ姫ひめ様さまを妻つまとなし、神しん國こくのためにお盡つくし下くだれば有あり難がたう存ぞんじます。貴あな方たにお渡わたし申まをす迄まで吾われ等らは日に夜やの氣き懸がり、之これにて吾わが願ぐわん望ぼうも成就じやうじゆ致いたしました」

と梅つめ彦ひこは心こころ落おち付つきし様やう子すなり。

「これはこれは、音おとに名な高たかき高たか國くに別わけ様さま、夫をとつとなり妻つまとなるも神かみの結むすびたまひし身み

魂の因縁、千代も八千代も妾と共に、手を携へて神業に盡させたまへ」

と顔に紅葉を散らしつつ優しき手を膝にあて語り出るは愛子姫なり。高國別は、夢か現か幻か合點行かぬと、暫し茫然として大空打ち仰ぎ思案に暮れ居たり。

梅彦はモドかしがり、

「高國別様、何を御思案なさいます、何事も結びの神の御定め、直に御承諾なさいませ」

「ア、有難し有難し、思ひも寄らぬ山上の見合ひ、山の神様の御仲介、草の筵に雲の天井、風の音楽に木々の木の葉の舞ひ踊り、イヤもう有難う承知仕りました」

と高國別は笑顔をもつて迎へゐる。これより世俗は妻を山の神と云ふのである。愛子姫は立ち上り、高國別に向つて、南方の諸山を壓してそそり立てる高山を指

さし、

「雲の彼方の黄金の山は我等が永久の故郷、いざいざ御一同進ませう」
と先に立つて急坂を南に下る。一同は一歩一歩力を入れながらアプト式流に坂を

くだり行く。雲表に屹立せる彼方の遠き高山の山頂に何時の間にやら達してゐた。
三夫婦は山頂に衝立ち天津祝詞を奏上するや、山を包みし五色の雲は扉を開きし
如く、颯と左右に開けた。目の届かぬ許りの青野原、白き、赤き、青き、黄色き、
紫色の三重五重十重二十重の塔は、眼下の青野が原の部落の中に幾百ともなく屹
立し、其絶景譬ふるに物なく、遠く目を放てば紺碧の波を湛へたる大海原、浪靜
に純白の眞帆片帆、右往左往に走り行くさま、晝伯の手に成れる一幅の大畫帳の
如く、時の移るも忘れて一同は絶景を見守つて居た。此時山頂の麗しき祠の中よ
り、黄金の扉を開き現はれ出でたる一柱の女神、二人の侍女を伴ひ悠悠と六人が
前に現はれて、

「妾は木花姫なり、汝等は忠勇義烈至仁至愛の神人なれば、汝が永久に住むべき
國は此聖域なり。併しながら未だ現界に於て勤むべき事あれば、再び現界に引き
返されよ。今後は心を緩ませ玉ふな。體主靈從の魔風に誘はれなば、再び此處に
來る事能はざるべし、今より速かに現界に歸り給へ」
と優美にして莊重なる言葉を殘し、黄金の扉を閉ぢて、侍女と共に又もや祠の中

に姿を隠したまうた。

忽ち四邊暗黒となり、身體に寒冷を覺ゆると見る間に甦り見れば、高國別は岩窟内の深き井戸の底に倒れ居たるなり。

「ア、夢であつたか、併し乍ら吾を活津彦根と仰せられしは不審の一つ、吾身の守護神を知らずして懋に審神を行ひしたため、大神の御仁慈によつて教へたまひしか、ア、有難し有難し」

と、合掌し聲も涼しく天津祝詞を奏上したりける。フト空を仰ぎ見れば窟の周圍に麗しき二男三女の夢に見し神人が立ち現はれ、井底を覗きて何事か囁き居るあり。高國別は夢に夢見る心地して、又もや兩手を組み心の纏れを手繰り居る。稍ありて高國別は井底より空を仰ぎながら、

「もしもし龜彦様、梅彦様、その他三人の女性様、私は高國別で御座います。人の命を救はむために、地中の岩窟に忍び入り、過つてかかる古井戸の底に陥ちました。何とかして私をお救ひ下さいませまいか」

「ヤア噂に聞き及ぶ高國別様か、それは嘸お困りでせう、何とか一つ工夫をして

お救ひ申さねばなりません。併し乍ら斯る岩窟の中にある古井戸には階段がある
ものです。この龜彦も一度フサの國の醜の岩窟の古井戸に陥ち込んだ時、如何は
せむかと心を痛めました。フト傍を見れば階段が刻まれてありました。よくよ
く調べなさいませ」

「有難う御座います、少しの手がかりも足がかりも御座いませぬ。恰度竹筒の中
に落ちたやうなものです」

梅彦は、

「ア、困つたな、吾々も一度古井戸に陥ちた経験があるが、階段がないとは意
外だ、何とか工夫をせねばなりません。龜彦サン、貴方の禪と帯を外して下さ
い、吾々も帯と禪とを解きます。これを繫いで井底に釣り下しませう」
と云ひつつ、くるくると帯を解き、禪を外し手早く繫いだ。龜彦も同じく帯と禪
を取り外し、手早く繫ぎ合せ井戸に下げ降して見た。

梅彦は、

「モシモシ、高國別様、この帯にお掴まり下さい」

「イヤ、有難う、折角の思召ながらどうも届きませぬ。加ふるに怪しき臭氣が致します」

梅彦は、

「ア、何と云ふ【まわし】の悪い事だらう。エ、仕方がない、三人のお女中、貴女方の帯を解いて下さいませ」

愛子姫「ハイ、如何致しませう。菊子さま、幾代さま」

二女「さうですなア、吾裸體になるのは恥かしいワ」

梅彦「恥かしいの何のと云つてゐる所か、人命に係はる大事だ。サアサアコンナ

時には恥も糞もあつたものでない、帯をお解きなさい」

愛子姫「それでも餘り残酷ですワ」

龜彦「これこれ愛子姫さま、何を仰有るのだ、貴女こそ残酷だ。高國別様が危急

存亡の場合、サアサア、キリキリとお解きなさい。もしもし高國別さま、何うも

仕方がありません、吾々が帯を解き禪を解き、三人の女神の帯を繋ぎ合して、今

垂下致しますからね、少々臭くても御辛抱下さいませ、女の匂ひと云ふものは却

つて床ゆかしいものですよ、アハ、、、、

高國別たかくにわけ「夫それ計ばかりは御免蒙ごめんかうむり度たい、ヤア神様かみさまの宿やどり給たまふ頭あたまの上うへで、ソソンナ物ものをべらさして貰もらつては有難ありがた迷惑めいわくだ。どうぞ早はやく手た繰ぐり上あげて下ください」

龜彦かめひこ「エ、、無理計むりばかり云いふ神様かみさまだな、此場このばに及およんでどうも仕方しかたがありませんせぬワ。

些ちつとは鼻はなを摘つまんで御辛抱ごしんぼうなさいませ。異性いせいの匂におひは却かへつてよいものですよ」

高國別たかくにわけ「アハ、、、、ヤア皆みなさま、御心配ごしんぱいをかけました。何どうやら梯子はしごが刻きざまれ

てあるやうに思おもひます」

龜彦かめひこ「アハ、、、、矢張やつぱり三五教あななひけうの宣傳使せんでんしは洒落しやれが上手じやうずだなア、此處ここ迄まで洒落しやれると、

洒落しやれも徹底てつていして面白おもしろい。もしも三さん人の姫御前ひめごぜん、御安心ごあんしんなさいませ、帶おびを解とくの

だけは赦ゆるして上あげませう」

三女さんぢよ「ホ、、、、誰たれが帶おびども解ほどきますものか、帶おびを解とく時間じかんにはも些ちつと早はやいぢや

ありませんか、ホ、、、、」

龜彦かめひこ「また貴女あなた方も洒落しやれるのか、モシモシ高國別たかくにわけさま、早はやくお上ありなさらぬか」

高國別たかくにわけ「ア、矢張やつぱり間違まちがひだつた、些ちつとも手係てがりがありますませぬワ。誠まことに濟すみませ

ぬが私の一命を助けると思召し、どうぞお慈悲に三人の女性様の帯を解いて、繋ぎ合して助けて下さい、お願いぢやお願ひぢや

龜彦「エ、何だ矢張り虚言だったか、これは仕方がない。サアサア三人の女性様、ちつと時間には早いが夫の云ふ事だ、女房が聞かぬと云ふ事があるものか、早く解いたり、解いたり。エ、何、恥かしいと。何が恥かしい、水も漏らさぬ夫婦仲ぢやないか」

菊子姫「それでも姉さまに恥かしいワ」

龜彦「何、姉さまのお婿さまを助けるのだ。ソナナ遠慮が要るものか」

愛子姫「ホ、ホ、ホ、エ、仕方がありません、妾が率先して模範を示しませう」と帯を解きかける。井戸の底より陽気な聲で、鼻歌を謡ひながら、トン、トンと上つて来る。

高國別「ヤア皆様、種々と御心配をかけました。お蔭で梯子段が俄に出来ました。兔も角咄嗟の場合急造したものですから、實に【やにこい】ものです。アハ、ハ、ハ、ハ」

梅、龜 何だ、裸體になり損をしたワイ

高國別 人間は生れ赤子にならねば神様の御神徳は頂けませぬよ、赤子の時には裸體で生れたのだから、アハ、ハ、ハ、

高國別は拍手を打ち合掌しながら天津祝詞を奏上し始めた。一同は聲を揃へて合唱する、其聲音朗々としてさしにも廣き岩窟に響き渡り、天地開明の氣分漂ふ。愛子姫 貴方は父の許せし吾夫、活津彦根の神様、ようマア無事で居て下さいました

高國別 ヤア合點の行かぬ事もあればあるものだなア、お前が珍の峠でお目にかかった山の神さままだなア。ヤア有難い有難い、三夫婦揃うた瑞靈の夫婦連れ、二三が六人手を携へて睦まじく、此處で結婚の式を挙げませうか

龜彦 結婚の式を挙げやうと云つた所が、此様な岩窟の中、何うする事も出来な

いぢやありませんか
高國別 イヤ、御靈と御靈の結婚、心の杯の取り替はし、千代も八千代も末長く、睦びて進む六人連、榮の花を三夫婦が、天地人揃うて岩窟の探險、三つの御靈の

父大神の御引合せ、ア、有難し有難し、目出度し目出度し、一度に開く梅彦さま、
萬代祝ふ龜彦さま、嬉しき便りを菊子姫、幾代變らぬ幾代姫、神の恵の愛子姫、
睦び合うたる三夫婦が、身魂の行末こそは楽しけれ』
といそいそ神歌を謠ひながら、又もや奥へ奥へと進み行く。

（大正一一・四・三 舊三・七 加藤明子録）

（昭和一〇・三・二三 於花蓮港分院 王仁校正）

第一六章 水上の影（五八三）

三男三女は神歌を謠ひ乍ら、潔く前進する。又もやトンと行當つた岩壁、
高國別「ヤア又しても岸壁だ、如何に一切萬事行詰りの世の中だと云つても、此
處まで行詰りの風が吹いて来て居るのか。吾々は誠の神力を以て此岩戸を開き、
行詰りの世を開かねばなるまい。先づ先づ休息の上、ゆつくりと相談致しませう」

龜彦「臨時議會の開會はどうでせう」

梅彦「アハ、ハ、ハ、議會と聞けば、醜の岩窟を連想せずには居られない。歴史は

繰返すとかや、一つゆるりと秘密會でも開催しませう」

と頃合の岩の上に腰打掛けた。三人の女性も同じく腰打かけ、

「アア、有難い有難い、マア此處でゆつくりと休まして戴きませう」

高國別「エー、あなた方御一同はどうして此岩窟にお這入りになりましたか」

龜彦「吾々は神素盞鳴の大神が地教山を越え此西藏の秘密郷にお出で遊ばしたと

聞き、取る物も取り敢ず、お後を慕つて進み來る折しも、小さき雑草の丘の前に

突當り、五人は息を休むる折しもあれ、何處よりもなく一人の女神現はれ來り、

「此地底の岩窟には、活津彦根命御探險あれば、汝等は急ぎお跡を慕へ」との一

言を残し、その儘姿は消えさせ給うた。傍を見れば暗き穴、ハテ訝かしやと覗き

居る際、地盤はガタリと陥落し、七八間も地中に落込んだと思へば、此岩窟、

それより吾々一同はこの岩窟内を神歌を謠ひつつ、探り來る折しも、道に當つ

た古井戸、フト見れば何か怪しの物影、合點行かぬと思ふ折、井戸の底より貴下

の聲、……と云ふ様な來歴で御座いましたよ」

高國別「ア、それは結構でございました。實は吾々が彼の井戸に陥りし刹那、失心致したと見え、廣大なる原野を通過し、高山の頂きに登りつめ、五人の男女に巡り會ひしと思へば、ハツト氣が付き、空を仰ぐ途端に、貴下ら一行のお姿……

……イヤもう實に不思議千萬な事で御座います」

梅彦「吾々は昨夜の夢に、貴下にお目にかかりましたが、本日只今この岩窟内に斯うして休息して居る有様が、ありありと目に附きました。實に現幽一致、此世と云ふ所は不思議な所ですな」

俄に何處ともなく、阿鼻叫喚の聲、響きわたる。高國別はツト立ち上り、
「ヤア皆さま、何か此岩窟内には變事が起つて居ますよ。サアサア早く早く探険と出かけませうかい」

と云ひつつ、岩壁を力に任せてグツと押した。岩の戸はパツと開いた。見れば數十人の老若男女、何れも高手小手に縛しめられ、中央に朱の如き赤き面した鬼神四五人、鐵棒を提げ、足の先にてポンポンと男女を蹴り苦しめて居る。

高國別「ヤア各方、此處は冥土の地獄の様だ。ヤア何れも方、飛込んで救うてやりませう」

と身を躍らして先に立つた。五人はあとに引つ添ひ、聲を揃へて言靈を奏上する。鬼の姿は追々に影うすく、遂には煙の如くなつて消え失せたり。數多の老若男女の姿を見れば、高手小手に縛められ居たりと見えしは、幻なりしか、各自に雙手を合せ、岩窟の前に端坐して、

一同「神素盞鳴の大神、一時も早く地上に現はれ給ひて、吾等を救ひ給へ」

と一生懸命、側目もふらず拜んで居るのであつた。六人の姿を見るより、一同の老若男女は、此方に向き直り、合掌し乍ら、

「ヤア有難し有難し、勿體なし、あなた様は神素盞鳴の大神の御眷屬様ならむ」と嬉し涙に咽ぶ。

高國別「ヤア最前より様子を聞けば、汝等一同の者、神素盞鳴の大神の御出現を祈り居る有様、汝の至誠は天に通じ、只今カナンの家に尊は御逗留遊ばすぞ。一時も早く此岩窟を立出で、仁慈の大神の尊顔を拜せよ」

と宣示せんじしたれば、一同いちどうは此言葉このことばを聞いて大おほいに喜びよろこび、

「ヤア大神おほかみの御再臨ごさいりん、有難ありがたし辱かたじけなし」

と嬉うれし腰こしを脱ぬかし、のたくり廻まり、歡よろこぎ喜よろこぶ。高國別たかくにわけは一同いちどうに向むかひ、天あまの數歌かずうたを

稱となふれば、今迄いままで瘦衰やせおとろへたる數十人すうじふにんの老若男女らうじやくなんによは、俄にはかに肉付にくづき、顔色がんしよくつるは麗うるはしく、元氣げんき

恢復くわいふくし、忽たちまちムクムクと立たち上あがり、手てを拍うつて、前後ぜんごさいう左右ざうに踊をどり狂くるひ、大神おほかみの再さい

臨りんを心こころの底そこより感謝かんしゃする。而しかして一同いちどうはイソイソとして、大麻おほぬさを持もてる男をとこを先頭せんとうに

ゾロゾロと歸かへり行ゆく。後見送あとみおくつて高國別たかくにわけは、

「ア、可愛かあいらしい者ものだ。これ丈だけの善男善女ぜんなんぜんによが心こころを一つひとにして、信仰しんかうを勵はげむのを見み

れば、何なんとも彼かとも知しれぬ良い心持こころもちがする。尊みことに於おかせられても、嘸さぞ御満足ごまんぞくに

思召おぼしめすであらう。嗚呼ああ、惟神靈かむながらたま幸倍坐世ちはへま惟神靈かむながらたま幸倍坐世ちはへま」

高國別たかくにわけ一行いつかうは、奥おくへ奥おくへと進すすみ行ゆく。日ひは西山せいざんに没ぼつせしと見みえ、岩窟がんくつの中なかは俄にはか

に暗くらくなつて來きた。六人ろくにんは探さぐり探さぐり進すすみ行ゆくにぞ、傍かたはらに怪あやしき呻聲うめきこゑが聞きこえある。

耳みみざとくも、愛子あいこひめ姫ひめは其聲そのこゑを聞きき、

「もしもし皆みなさま、何なんだか怪あやしき聲こゑが聞きこえるではありませんせぬか」

龜彦「ヤアそれは、あなたの神経でせう。岩窟の中は音響のこもるものですから、大方最前の祝詞の聲が内耳深く潜伏し、反響運動を開始して居るのでせう」

愛子姫「イエイ工祝詞の聲ではありませぬ、苦悶を訴ふる、しかも女の聲、悪神の巢窟たる此岩窟、如何なる惨事の行はれ居るやも圖られませぬ。皆さま一同に立止まり、耳を澄ませて聞いて下さい。世界を救ふ神の使の吾々、苦悶の聲を聞き逃し、ムザムザと通過も出来かねます」

龜彦「ヤア如何にも苦しさうな聲だ。もしも高國別様、暗さは暗し、餘り軽々しく進むよりも、一つ此聲を探り當てませうか」

高國別「ホンに如何にも妙な聲が致しますな」

と言ひつつ、傍の岩壁をグツと押した途端に、不思議や、岩の戸は案外に軽くパツと開いた。能く能く見れば、白き影、岩窟内に横たはり苦しさうに唸つて居る。龜彦「ヤア怪しいぞ怪しいぞ、此暗がりには、何だか削りたての材木の様な者が唸つて居る。これは大方、白蛇であらう」

梅彦「白蛇にしては、太さの割に餘りに丈が短いではありませんませぬか」

龜彦 『白蛇の奴、どつかで半身切られて来て、九死一生苦悶の態と云ふ場面だら

う。……オイオイ白蛇の先生、どうしたどうした』

白き影 『アア恨めしやなア、妾は姫君様の御後を慕ひ、此處まで来るは来たも

の、ウラナイ教の曲津神、蝶蝮別が計略にかかり、手足を縛られ、岩窟の中へ

押込まれ、逃れ出づる方策もなし、ア、何とせう、恨めしやなア』

龜彦 『ヨウ大蛇だと思へば、何だか分らぬ事をほざいて居るワ。もしも高國別

様、一寸調べて下さいな』

『イヤあなた御苦勞乍ら一寸探つて見て下さい、どうやら人間らしう御座います

よ』

龜彦 『滅相な、あた嫌らしい、此暗がりには、コンナ白い者が、どうしてなぶられ

ませうか……オイ梅サン、お前は平素より大膽な男だ。一つ此處らで俠氣を出し

て、幾代姫様に英雄振をお目につけたらどうだ』

梅彦 『イヤ吾々も吾々だが、龜彦サンも龜彦サンだ。菊子姫様に英雄振をお見せ

になつたらどうでせう、餘り厚かましう致すのも御無禮で御座る。あなたには先

取權しゆけんが御座ござる、どうぞ御遠慮ごゑんりよなく、とつくりと、頭あたまから足あしの先さきまでお調しらべなさい

ませ。菊子きくこ姫様ひめさまの手前てまへも御座ございまするぞ」

龜彦かめひこ「アア、偉えらい所ところへ尻平しつぺいを持もつて來こられたものだ。ナニ、材木ざいもくが動うごいて居をる

のだと思おもへば良い、……コラコラ材木ざいもく、その方ほうは何者なにものだ」

白しろき影かげ「ア、恨うらめしや」

龜彦かめひこ「ナ、何なんだ、ウラナイ教けうか、幽靈いうれいか、何なんだか知しらぬが、材木ざいもくの幽靈いうれいは昔むかしから

聞きいた事ことはないワイ。素盞すさのを鳴なの大神おほかみが御退隱ごたいいん遊あそばしてより、山川さんせん草木さうもくに至いたる迄まで、

言問こととうと云いふ事ことだが、やつぱりこの材木ざいもくも其選そのせんに漏もれないと見みえて、何なんだか言問ことと

ひをやつてゐる、……コラ材木ざいもく、起おきぬか起おきぬか」

梅彦うめひこは、白しろき影かげを目當めあてに、スウツと撫なでまわし、

梅彦うめひこ「ヤアこれは人間にんげんだ、しかも肌はだの柔やはらかき美人びじんと見みえる、高たか手て小こ手てに縛いましめられ

て居をる。おほかた惡神わるがみの奴やつに虐しへたげられて、此岩窟このいはやに幽閉いうへいされたのであらう」

と言いひ乍ながら、スラスラと縛いましめを解といた。白しろき影かげはスツクと立たちあがり、懷劍くわいけん逆手さかてに

持もつより早はやく、

「ヤア、ウラナイ教の悪神、蠓螮別の手下の者共、モウ斯うなる上は、妾が死物狂ひ覺悟を致せ」

と六人のほのかな影を目當に短刀をピカつかせ乍ら、前後左右に暴れ狂ふ。

龜彦「ヤア待った待った、吾々は三五教の宣傳使だよ」

「ナニツ、三五教の宣傳使とは、まつかな偽り、淺子姫が死物狂ひの車輪の働き、

思ひ知れよ」

と飛鳥の如くに飛び廻る。

高國別「ヤア汝淺子姫とは、顯恩郷に現はれたる愛子姫の腰元ならずや。吾は愛

子姫の夫高國別なるぞ」

淺子姫「執念深き悪魔の計略、其手に乗つて堪らうか、淺子姫が手練の早業、思

ひ知れよ」

と又もや短刀を暗に閃かし暴狂ふ。愛子姫は、

「そなたは淺子姫に非ずや、先づ先づ静まりなさい、愛子姫に間違御座らぬ」

淺子姫「ヤアさう仰有るお聲は、正しく愛子姫様」

愛子姫あいこひめ「そなたは擬まがふ方かたなき浅子姫あさこひめの聲こゑ、夜目よめにもそれと知らるる其方そのほうの姿すがた、嬉うれしや嬉うれしや、思おもはぬ所ところで會あひました」

浅子姫あさこひめは稍落着ややおちつきたる聲こゑにてハアハアと息いきをはづませ乍ながら、

「そ、そ、そう仰有おつしやるあなたは擬まがふ方かたなき愛子姫あいこひめ様さま、お懐なつかしう御座ございます」

とワツと許ばかりに其場そのばに泣なき伏ふしぬ。此時このとき何處いづくよりともなく、一道いちだうの光明くわうみやうサツと輝かがや

き渡りわた、一同いちどうの顔かほは晝ひるの如ごとく明あきかになり來きたりぬ。

浅子姫あさこひめ「これはこれは何れも様さま、不思議ふしぎな所ところでお目めにかかりました、能ようマア危あやぶ

き所ところをお助たすけ下くださいました。是これと云いふも、全まったく木花姫このはなひめの御守護ごしゆごの厚あつき所ところ」

と合掌がつしやうし、後あとは一言ひとことも得言えいはず、嬉うれし涙なみだに掻かき曇くもるのみ。勇いさみを附つけんと高國別たかくにわけ

は、浅子姫あさこひめの背中せなかを、平手ひらてに三みつ四よつ打うちち乍ながら、

浅子姫殿あさこひめどの、しつかりなさいませ。是これには深ふかき様子やうす有あらむ。吾々われわれも此先このさきに於おいて、

大おほいに覺悟かくごせなくてはなりませぬ。あなたを斯かくの如ごとく岩窟いはやに押込おしこめし以上いじやうは、當たう

岩窟いはやには數多あまたの惡神わるがみの巢窟そうくつあらむ、此處ここに立到たちいたられし仔細しさいを詳つぶさに物語ものがたられよ」

と聲こゑを勵はげまして問とひかくれば、浅子姫あさこひめはハツと心こころを取直とりなほし、

是れには深き仔細が御座いまする、一先づ妾が物語お聞き下さいませ。天の太玉命、顯恩郷に現はれ給ひ、バラモン教の大棟梁鬼雲彦を神退ひにやらひ給ひ、妾は愛子姫様と共に、顯恩城を守護しまつる折しも、天照大神様、天の岩戸に隠れ給ひしより、太玉命は急遽、天教山に登らせ給ひ、その不在中、愛子姫様と妾は城内を守る折しも咫尺暗澹として晝夜を辨ぜず、荒振神は五月蠅の如く群がり起り、鬼雲彦は又もや現はれ來りて、暗に紛れて暴威を逞しうし、妾主従は生命も危き所、闇に紛れて城内を逃れ出で、エデンの河を生命から打渡り、何の目的も時の途、進み行く折しも、暗を照して現はれ來たる日の出神にめぐり會ひ、愛子姫様、菊子姫様、幾代姫様は、神素盞鳴尊の御後を慕ひ、西藏に難を遁れさせ給ひしと聞くより、妾は岸子姫、岩子姫と共に、夜を日に繼いで、山野を涉り、大河を越え、漸くラサフの都に來て見れば、姫君様に奇の岩窟にて面會を得させむと、木花姫の夢のお告げ、妾三人は勇み進んで、小高き丘の入口より、岩窟に進み來る折しも、ウラナイ教の曲神蝶螭別、幾十ともなく數多の邪神を引き連れ、妾三人を前後左右に取圍み、後手に縛り上げ、此岩窟に押込めたり。嗚呼、岸子

姫、岩子姫は、如何なりしぞ、心許なやこころもと」

と又もや涙の袖を絞る。

高國別「これにて略様子は判然致しました。……ヤア一同の方々、岸子姫、岩子

姫の身の上进心なく御座れば、急ぎ在處を尋ね、救ひ出さねばなりませんまい」

「然らば進ませう」

と、一同は四邊に耳を敬て、目を配り乍ら、急ぎもせず、遅れもせずと云ふ足許

にて、奥深く進み行く。隧道は俄に前方低く、板を立てたる如き急坂になつて來

た。一行七人は、一足一足力を入れ乍ら、アプト式然と、坂路の隧道を下つて行

く。行く事七八丁と覺しき所に、比較的廣き水溜りがある。薄暗がりに透かし見

れば、何だか水面に人の首の様なものが漂うて居る。龜彦は目ざとくもこれに目

を注ぎ、

龜彦「ヤア此奴ア又、變挺だ。岩窟の中に池があると思へば、圓い顔の様な物が

浮いて居る、鴛鴦にしては少しく大きいやうだ。ヤア目鼻が付いて居る。惡神の

奴、酒に喰ひ酔つて、瓢箪に目鼻をつけ、此池に放り込みよつたのではあるまい

か。瓢箪ばかりが浮物か、俺の心も浮いて来た。サアサア浮いたり浮いたりだ、

アハ、ハ、ハ、ハ、

梅彦「亀サン、あれを能く御覧なさい、女の首ですよ。ナンダか、つぶやいて居

るぢやありませんか」

幾代姫「ヤア彼の顔は、岩子姫、岸子姫ではなからうか」

龜彦「エー何を仰有います、鴨かナンゾの様に、女が首ばかりになつて、池の

中に浮いて居ると云ふ事があります、あなたは視神経の作用が、どうか變調

を來して居るのでせう。腐り繩を見て蛇と思つて驚いたり、木の缺杭を見て化物

と思ふ事が往々有るものです。マアマア氣を付けてください、變視、幻視、妄視

の精神作用でせう、コンナ所に棲息する者は、キット河童か、鰐か、まかり間違

へば人魚ですよ。人魚と云ふ奴は、能く人間に似て居るものだ、それで、人の形

をした翫弄具を人形サンと云ふのだ。アハ、ハ、ハ、ハ、

池の中より女の首、苦しき聲を絞り乍ら、

「ヤア、あなたは幾代姫様、菊子姫様、愛子姫様では御座いませぬか。夜目には

しかと分りませぬが、お姿が能く似て居ります。妾は悪神に捉へられ、手足を縛られ、重き石錨をつけられて苦んで居ります、岩子姫、岸子姫の兩人で御座います。どうぞお助けくださいませ」

龜彦「ヤア金毛九尾の同類奴、馬鹿にするない、何程化たつて、モウ駄目だ。手を替へ品を換へ、結局の果には池の中に姿を現はし、吾等を水中に引込まむとの水も洩らさぬ……否水責めの汝の計略、其手に乗つて堪らうかい」

岩子姫「イエイエ、決して決して妖怪變化では御座いませぬ、どうぞお助け下さいませ」

龜彦「もしもし高國別様、どうでせう、彼奴は本物でせうか。偽物の能く流行する時節ですから、ウツカリと油断はなりませぬぜ、……コラコラ化の奴、新意匠をこらし、レツテルを替へて、厄雑物を突付けても其手には乗らぬぞ、意匠登録法違反で告發をしてやらうか」

高國別「アハ、何は免もあれ、龜彦サン、高國別の嚴命だ、あなた眞裸となつて救うて来て下さい。高國別が神に代つて命令を致します」

龜彦 『滅相な、どうしてどうして、是ばかりは眞つ平御免、アーメン素麵、ト

コロテン、ステテコテンのテンテコテン、テンデ話になりませぬワイ、テンと合

點がゆきませぬ、是ればつかりは平に御断り申す。斯く申すは決して龜彦の肉體

では御座らぬ。龜彦が守護神の申す事で御座る』

梅彦 『アハ、、、、巧い事を言ひよるワイ、融通の利く副守護神だ、斯うなると

副守先生も重寶なものだなア』

龜彦 『龜彦の守護神が、神素盞鳴の大神の命に依つて、梅彦に嚴命する……梅

彦、速かに眞裸となり、水中にザンブと許り飛込んで、二人の妖怪を救ひ來れ。

萬々一、彼にして大蛇の變化なれば、汝は一呑みに蛇腹に葬られむ。然る時は、

汝が靈を引抜き、至美至樂の天國に救ひ、百味の飲食を與へ遣はす、ゆめゆめ疑

ふ事勿れ』

梅彦 『ウンウンウン』

龜彦 『コラコラ、偽神懸は嚴禁するぞ、龜サンの審神を暗まさうと思つても、天

眼通、天耳通、宿命通、自他心通、感通、漏盡通の六大神通力を具備せる、古今

無雙の審神者のテイチャーに向つて、誤魔化しは利かぬぞ、速かに飛込め」

池中に浮かべる二つの首は、苦痛を忘れて、思はず、「ホ、、、、、」と笑ひ出

せば、

龜彦「それ見たか、俺の天眼通はコンナものだ。此寒いの池の中に投げ込まれ、

人間なら、何氣樂さうに笑ふものか、とうとう化物の正體を現はしよつた。アツ

ハ、、、、」

幾代姫「龜彦様、梅彦様、あなたは分らぬお方ですな、………アアコンナ方を

二世の夫に持つたと思へば恥かしいワ」

龜彦「コレコレ嬢左衛門殿、何と御意召さる。親子は一世、夫婦は二世で御座る

ぞ」

二女「夫婦二世と云ふ掟を幸ひ、あなたの様な、臆病神との契を解き、第二の夫

を持ちなせう。ネー愛子姫様、決して天則違反では御座いますまい」

龜彦、梅彦、兩手を擴げて、

「ア、待つた待つた、如何に女權擴張の世の中ぢやとて、姫御前の有られもない

其暴言、これだから、新しい女を女房に持つのは困ると言ふのだ。エー仕方がない、俺も男だ………サア梅サン………ヤア龜サン………一イ二ウ三ツだ

と云ふより早く、眞裸となり、ザンブと飛込んだ。

「ヤア比較的浅い池だワイ………オイオイ二つの生首、かぶりついちや不可よ、俺一人ではない、俺には彼の通り立派な奥方がお二人も随いて御座るのだ。一度死んだから二度とは死なないから、吾々は生命位は何ともないが、後に残った菊子姫、幾代姫の悲歎の程が思い遣られる………コラコラ助けてやるから生命の恩人だと思つて、かぶり付いてはならぬぞ」

と言ひつつ、コワゴワ頭髪をグツと握り締めた。

岩子姫「アイタタ、痛う御座んす、どうぞ、妾の腰の邊を探つて見て下さい」

龜彦「女の分際としてあられもない事を言ふな、立派な奥様が大きな目を剥いて監督をして御座るぞ、腰のあたりを觸つて堪るものかい」

岸子姫「イエイエ、腰の邊りに、可なり大きい紐で大きい石が縛りつけて御座います。三つも四つも、重い石に繋がれて居ます、どうぞ其綱を切つて助けて下さい」

い
□

龜彦「アアア、偉い事になつて来たワイ、神が綱を掛たら放さぬぞよ、ア

ハ、ハ、ハ、□

岩子姫「冗談仰有らずに、どうぞ眞面目にほどいて下さい」

二人は水中に手を下し、腰のあたりを探つて見て、

「ヤア甚い事を行つて居る……やつぱり鱗でもなければ、羽でもない、人間の肌

だ
□

と云ひ乍ら、ほどかむとすれど、綱は膨れてどうする事も出来ぬ。

「アアア仕方がない」

と再び岸に這ひ上り、雙刃の剣を口に啣へ、バサバサと飛込み、プツツと綱を切

り、二人を肩にひつ擔ぎ乍ら上つて来た。高國別および三人の女性は、

「アアア結構結構、好い所で助かつたものだ」

浅子姫「岩子さま、岸子さま、あなたは酷い目に會ひましたな、妾も御主人様に

救はれました……ア、結構結構、これと云ふも、大神様の全く御守護で御座いま

せう』

と浅子姫は、今更の如く嬉し涙に暮れて水面に向つて合掌しめたりける。

(大正一一・四・三 舊三・七 松村眞澄録)

(昭和一〇・三・二三 於花蓮港支部 王仁校正)

第一七章 窟の酒宴〔五八四〕

四面岩壁を以て包まれたる廣き館の内には絲竹管絃の響爽かに、飲めよ、騒げの大亂舞が行はれて居る。ずっと見渡せば中央に黎牛の皮を幾枚とも無く積み重ね、其上に見るも憎さうなる面構への蝶蝟別は數多の男女に酌をさせ乍ら、墨の様な黒き酒をグビリグビリと傾けて居る。數十人の男女は何れも一癖あるらしき面構へ、「けい」を敲く、笛を吹く、弓弦を弾ずる、石と石とを打ち乍ら眞裸の儘踊り狂うて居る、恰も百鬼晝行の有様である。

蝶いもり蛸わけ別け「ヤア大變たいへんに醉よがまわつた。如何どうだ、皆みなの者もの共ども、一ひとつ何なにか面白おもい藝當げいたうをや

つて呉くれないか」

黒姫くろひめ「さアさア皆みなサン、これから須佐すさの男尊をのみこと征伐せいばつの芝居しばゐをやりませう。丁ちよ助すけサ

ン、お前まへが須佐すさの男尊をのみことになるのだよ、黒姫くろひめがお前まへの髭ひげを「むし」る役やく、高姫たかひめさま

は手足てあしの爪つめを脱ぬく役やくだよ」

丁ちよ助すけ「エーエ、滅相めつさうな、誰たれがソソンナ役やくになりませうか、爪つめを抜ぬかれる様やうな悪わるい

事ことは根ねつからした覺おぼえが御座ございませぬ」

黒姫くろひめ「吐ぬかすな吐ぬかすな、貴様きさまは爪つめに火ひを點とほして吝けちな事こと許ばかり考かんがへ、人ひとを苦くるしめる奴やつだ、

鷹たかの様やうに爪つめの長ながい代物しろものだ、喰くひつめ者ものだ、如何どうでも斯こうでも此この婆ばばがつめかけて抜ぬ

いてやらねば措をくものかいヤイ」

丁ちよ助すけ「爪つめの長ながいのは、それやお前まへサンの事だないか。一途いちづの川邊かはへで往來わうらいの旅人たびびと

を嚇おどかして肝腎かんじんの身魂みたまを引ひきぬく欲よく婆ばアサンだ。お前まへサンから爪つめを抜ぬきなさい」

黒姫くろひめ「能ようツベコベと理窟りくつを言いふ丁ちよ助すけだナア、エーエ憎にくらしい、頬邊ほつべたなど抓つかめ

つてやらうか」

と鷹の様な鋭利な爪で丁助の頬をグツと捻る。

「イ、痛、痛い、痛い、放サンかい」

黒姫「放さぬ放さぬ、神が爪を掛たら、いつかないつかな放しはせぬぞ。話すのは庚申待ちの晩だ、人の難儀は見ざる、聞かざるの苦勞人の黒姫だ。

尻なつと喰ふとけ、苦勞知らずの眞黒々助の丁助奴が」

丁助「ヤアヤア、婆アサン、ヒ、ヒ、ひどい、ソ、ソ、それや餘りぢや、頬

邊がチ、ちぎれる、」

黒姫「チ、ち、ちつとは痛からう、【血】の出るとこ迄、いや頬が【ち】ぎれる

とこ迄、いつかないつかな放しやせぬぞや。【チ】ン【チ】クリンの【チ】ンピ

ラ奴、【ち】つとは正念が行つたか、貴様は又してもウライナイ教の裏をかく奴ぢ

や。今にひよつとして三五教の奴が出て来よつたならば、直に黒い黒い燕の様に

燕返しつばめがへの早業はやわざをやる代物だ。この黒姫くろひめが黒い目めでグツと睨にらんだら違ちがひはせぬぞや」

丁助ちよ「もしも高姫たかひめさま、ちつと挨拶あいさつして下くださいな」

高姫たかひめ「マアマア十萬億土じふまんおくどの成敗せいばいの事こと思おもへば磯いその様やうなものだ。お前まへの將來しやうらいのためだ

よ、もつともつと黒姫さま、首の脱ける處まで捻つてやりなさい、アーア一人の男を惡の道に引き入れ様と思へば骨の折れる事だワイ。もしもし大廣木正宗さま、何して御座る、酒ばつかり【あふ】つて居らずに、ちつとお前さまも此丁助の成敗をなさつたが宜からうにナア

丁助「もうもうもう、改心致します、之からは善の【ぜ】の字も申しませぬ、飽迄も惡を立て通します」

高姫「これこれ丁助、何を言ふのだ、善一筋のウラナイ教の教ぢやぞい」

丁助「ソ、ソ、そのウラナイ教だから裏を言つて居るのだ。惡と言へば善、善と言へば惡ぢやがなア」

黒姫「はて扱て合點の惡い男ぢや、底には底がある、奥には奥がある、裏には裏がある。エーエ、もうもう手が倦うなつて來た、モウこれで勘へてやらう。いや

まだまだ膏をとらねばならぬが、婆の手が續かぬから一寸一服ぢや、エへ、エへ、

丁助「何が何だか皆サンの仰有る事は一寸も譯が分りませぬワ。善をすればお氣に入るのやら、惡がお氣に入るのやら、薩張り譯が分らなくなつて來た。善な

ら善、悪なら悪と、はつきり言つて下さい、どちらへでも私はつきます」

高姫「善とも悪とも分らぬのが神の教ぢや。人間の分際として、さう善悪がはつきりと分つて堪るものかい。何事も高姫の仰有る通りに、ハイハイ、ハイハイと

盲目滅法に盲従すれば良いのだよ」

丁助「アア又しても又しても、人の顔を抓つたり殴つたり、爪を抜いたりせ

ねば改心さす事が出来ぬのか、そこになるとアナ、ア、ア、何ぢやつた、忘

れた忘れた。「あ」ないでも、「あ」なでも「あ」つたら隠れ度い様な気がしま

す哩。「あ」な恐ろしや、「あ」な有難や、「あ」な苦しや、「あ」な痛やなア」

黒姫「矢つ張貴様は三五教に未練があるな、よしよしこれから須佐之男尊ぢやな

いが、頭の毛も髭も爪も一本も無い様に抜いてやらう。これこれ久助、釘拔を持

つて来い」

久助「釘拔は此館には一つも御座いませぬ、如何致しませう」

黒姫「ア、そうか、釘拔は無いか、それでは仕方がない。これこれ丁助、貴様

は餘つ程幸福者だ、之と言ふも神様の御慈悲ぢや、ウラナイ教の神様の御恩を夢

にも忘れてはならぬぞよ」

蝶螭別はグタグタに酔ひ潰れ、

「オイオイ皆の奴、何か面白い藝當をして見せぬか、折角飲んだ酒が沈んで仕舞

ふ、ちつと浮かして呉れ、瓢箪ばかりが浮物ぢやあるまい、偶には人間の心も浮

かさねばならぬ、それだから此世を浮世と言ふのだ」

黒姫「ア、其瓢箪で思ひ出した、水の中に浮かして置いた二人の女、誰か行つて

浚へて来い、此處で一つ面白い藝當をさして楽しもう」

蝶螭別「アハ、ハ、ハ、妙案々々、面白い面白い、サアサ皆の者共、二人の奴を引

摺上げて此場へ連れて来い」

黒姫「こら丁助、其方は爪拔きの成敗を許してやる、其代りに二人の女を引摺

上げて此場へ連れて来い」

丁助「はい、畏まつて御座います、然し乍ら私一人では到底手にあひませぬ、

誰か助太刀を貸して下さいませ、一人づつ擔げて連れて参ります」

黒姫「久助、貴様は丁助の後から跟いて、サア早く引き上げて来い」

「畏まりました」

と二人は表の石門を開くや否や尻端折つて池の邊を指して一生懸命に走つて來た。見れば池の邊に三男六女の神人が立つてゐる。

丁助「オイオイ久公、貴様先へ行かぬかい」

久助「何、俺は貴様の助太刀だ、言はば代理ぢや。貴様が先へ行つて縮尻つたら其控へに俺が出るのだ、先陣は貴様だ、早う行かぬかい」

と、尻をトンと押す拍子に丁助はトンと尻餅を搗く、

「アイタ、ナ、何をしやがるのだい、アア、もう腰が抜けた。貴様が弱腰を無理に突いたものだから、腰の蝶番が折れて仕舞つたよ、貴様が代理するのだ。サアサ行け行け」

久助「觸り三百とは貴様の事だ、なまくらな、起んかい。一寸押した位で腰の樞

が外れる奴が何處にあるか」

丁助「それでも抜けたら仕方が無い、嘘と思ふなら俺を歩かして見、一寸も歩けやせぬぞ」

久助「エーエ、腰抜け野郎だな」

丁助「オ、俺は腰抜け野郎だ、それだから貴様行けと言ふのだ」

久助「俺も何だか急に足が抜けた様だ、膝坊主奴が危ない危ないと吐しよる」

丁助「何だ、乞食の正月の様に「餅無い餅無い」ナンテ、團子理屈を垂れない、

サアサ行け行け、俺は絶対に腰が抜けた。もう一足も歩けぬ、貴様膽玉を放り出

してあの池を覗きなつとして来い、歸つて申譯が無いぞ」

龜彦は二人の姿を見てツカツカと間近に進み、

「ヤア其方は悪神の眷屬、能くも三人の女を苦しめよつたナア、サア返報がへし

だ。股から引裂き頭から鹽をつけて齧つて喰つてやらうか」

と唸鳴りつけた。二人はキアツと聲を立て腰の抜けたと言つた丁助は眞先に韋

駄天走りに、雲を霞と逃げ去つた。

話變つて蝶蜋別は、

「アア、何だか今日は心の沈む日だ。皆の奴共、何奴も此奴も藝無し猿の唐變

木許りだな、一つ面白い事をやつて見せぬか、アア頭痛がする」

とキューと鼻を捻る。

丁助「イ、痛い、勘忍勘忍」

黒姫「サア、しつかりと申さぬか、様子は如何に」

丁助「ヨ、様子も何にもあつたものか、ヨ、用心なさいませ、酔つぱ

らつて居るどこの騒ぎぢやありませんぞ、ア、三五教の宣傳使、大きな男が

三人とアルマの様な別嬪が而も六人、どうで、口、碌な事は御座いませぬ哩」

黒姫「貴様の言ふ事は何が何だか、【テン】と分らぬ、こらこら久助、様子は如

何だ。女は何處に居る。」

久助「女どころの騒ぎですかい、たつた今、貴方等の頸は胴を離れますよ、何卒

しつかりと用意をして下さい」

高姫「お前達は何を狼狽へ騒ぐのだ、昔の昔のさる昔の根つ本の天地の始まりか

ら、何も彼も調べて調べて調べ上げた此方ぢや、假令百億萬の敵押し寄せ來ると

も、此高姫のあらむ限りは大丈夫だ、しつかり致さぬか。してして女は何と致し

た」

此時門前に勇壯なる宣傳歌の聲、四邊を轟かし響き來たりぬ。

高姫、黒姫、蝶蜷別を始め、一同は俄に頭痛み胸は引裂く許り苦しくなつて、其場にドツと倒れたり。ア、此結末は如何なり行くならむか。

(大正一一・四・三 舊三・七 北村隆光録)

(昭和一〇・三・二四 於臺灣蘇澳驛 王仁校正)

第一八章 婆々勇(五八五)

高姫、黒姫、蝶蜷別を始め、一座の者共は折から聞ゆる宣傳歌の聲に頭を痛め、胸を苦しめ、七轉八倒、中には黒血を吐いて悶え苦しむ者もあつた。宣傳歌は館の四隅より刻一刻と峻烈に聞え來たる。

黒姫「コレコレ蝶蜷別サン、高姫サン、靜になさらぬか、丁助、久助其他の面々、千騎一騎の此場合、氣を確り持ち直し、力限りに神政成就の爲め活動をす

るのだよ、何を愚圖々々キヨロキヨロ間誤々々するのだい。これ位の事が苦しいやうなことで、何うして、ウラナイ教が擴まるか、轉けても砂なりと掴むのだ、只では起きぬと云ふ執着心が無くては、何うして何うして此大望が成就するものか。變性女子の靈や肉體を散り散り「ばら」ばらに致して血を啜り、骨を臼に搗いて粉となし、筋を集めて衣物に織り、血は酒にして呑み、毛は繩に縋ひ、再び此世に出て來ぬやうに致すのがウラナイ教の御宗旨だ。折角今迄骨を折つて天の馨戸隠れの騷動がおつ始まる所迄旨く漕ぎつけ、心地よや素盞鳴尊は罪もないのに高天原を放逐され、今は淋しき漂浪の一人旅、奴乞食のやうになつて、翼剥がれし裸鳥、これから吾々の天下だ。此場に及んで何を愚圖々々メソメソ騒ぐのだ。高姫さま貴女も日の出神と名乗つた以上は、何處迄も邪が非でも日の出神で通さにやなるまい。憚りながら此黒姫は何處々々迄も龍宮の乙姫でやり通すのだ。蝶別さまは飽までも大廣木正宗で行く處迄遣り通し、萬々一途中で肉體が斃れても、百遍でも千遍でも生れ替はつて此大望を成就させねばなりませんぞ。エーエー腰の弱い方々だ。この黒姫も氣の揉める事だワイ、サアサア、シヤンと氣を持ち

直し、大望一途に立て通す覺悟が肝腎ぢや。中途で屁古垂れる位なら、初からコ
ンナ謀反は起さぬがよい。此黒姫が千變萬化の妙術をもつて、瑞の靈の素盞鳴の
神がもしも此處へやつて來たなら、乞食の蝨だ、口で殺して仕舞ふ。海に千年、
山に千年、河に千年の苦勞を致した黒姫ぢや。高姫さま、螻蛄別さま、お前は未
だ未だ苦勞が足らぬ、苦勞なしに誠の花は咲かぬぞや。これこれ丁助、久助何
をベソベソ吠面かわくのだ、些と確り致さぬと此黒姫さまの拳骨がお見舞申すぞ。
何だ宣傳歌が恐ろしいやうな事で、何うならうかい、女の一心岩でも突き貫く、
無茶でも突き貫かねば此婆の顔が立たぬ、何うしてウラル彦の神に申譯が立つか、
鬼雲彦に合はす顔があるまいぞ。エーエー、腰拔ばかりだなア。コレコレ高姫さ
ま確りせぬかいなア、此黒姫がお前の傍について居なかつたら、お前さまは「と
う」の昔に素盞鳴尊に骨も筋も抜かれて仕舞ひ、今頃は茹蛸のやうになつて居る
お方だ。大將は看板とは云ふものの、これや又滅相弱い看板ぢやナア」
此時宣傳歌は益々激しく、館の四邊より響いて來る。高姫と螻蛄別は逆上した
か、互に目を怒らし牙を剥き猿の喧嘩のやうに、噛むやら搔くやら「むし」るや

第四篇

神行靈歩しんかうれいほ

ら、キヤツ、キヤツと「キン」キリ聲を出して、上になり下になり、組んづ組ま
れつ黒姫の言葉も耳に入らぬ體にて掴み合を始めて居る。竝居る數多の者共は互
に鐵拳を振り上げ、彼我の區別なく入り亂れて打つ、蹴る、擲る、吠鳴る、泣く、
喚く、忽ち阿鼻叫喚修羅の衢と化して仕舞つた。

黒姫は懷劍を逆手に持ち表を指して韋駄天走り、表門を開くや否や、高國別以
下勇士一行の姿に肝を潰し、アツと其場に腰を抜かし、蟹のやうな泡を吹き、目
玉を二三寸ばかり前に飛び出させ、口を「ポカン」と開けたまま、一言も發し得
ず、開いた口が閉まらぬ其爲體の可笑しさ、一同は思はず吹き出し、
「ワハ、ハ、ハ、オホ、ハ、ハ、ハ」

(大正一一・四・三 舊三・七 加藤明子録)

第一九章 第一天国（五八六）

ひさかた 久方の高天原の岩窟も 開けてここに天地の
もも 百の神達勇み立ち あな面白やあなさやけおけ
あま 天の數歌賑はしく 言葉の花の開け口
とこよ 常夜の闇は晴れぬれど まだ晴れやらぬ胸の内
かむすさのを 神素盞鳴の大神は 天地百の神人の
ももちよろづ 百千萬の罪咎を 御身一つに贖ひつ
つれ 情なき嵐の吹くままに 千座の置戸を負ひ給ひ
たかあまはら 高天原を後にして 天の眞名井を打渡り
もろこしやま 唐土山や韓の原 印度の國をば打過ぎて
ひみつ 祕密の國と聞えたる 高山四方に繞らせる
ゆいしよ 由緒も深き西藏の 山野村々悉く

尋ね	現	忍び	ひそ	黒白	此世	八尋	四方	足も	かかる	百の	タール	太き
來	れ	忍	か	も	を	の	の	い	手	山	の	御
ま	ま	び	に	分	忍	殿	景	そ	前	々	都	稜
す	す	に	四	か	ぶ	を	色	い	の	此	を	威
ぞ	正	遠	方	か	佗	建	の	そ	河	處	打	を
尊	し	近	を	ぬ	住	て	美	上	鹿	彼	過	輝
け	き	の	照	世	居	給	は	り	山	處	ぎ	か
れ。	神	の	し	中	ま	ひ	し	ま			て	し
	人	遠	ま	に			き	し			す	か
	は	近	す		黒	千	よ	ま	世	ウ	猶	が
		の	そ	神	雲	代	の	ブ	の	ブ	も	が
	吾	山	の	の	四	の	住	ス	荒	ス	進	が
	も	の	の	稜	方	の	家	ナ	風	ナ	み	が
	吾	尾	上	威	に	住	と	山	に	山	て	が
	も	の	や	も	叢	家	定	の	揉	の	フ	が
	と	上	川	い	が	と	め	山	ま	山	サ	が
	争	の										

瑞靈の元津祖、豊國姫の神の分靈、昔は聖地エルサレムに幸魂の神として現はれ給へる言靈別命は、國治立の大神の御退隱に先立ち、千座の置戸を負ひて、一旦幽界に出でまし少名彦の神と改めて、常世の國を永久に守り給ひけるが、瑞靈の本津祖、神素盞鳴の大神の、高天原を退はれて、豊葦原の國々を、心寂しき漂泊の、旅路に上らせ給ひしと、聞くより心も安からず、再び此世に現はれて、賤しき人の腹を籍り、言依別命となり、森鷹彦の靈の流裔、玉彦を御伴の神と定めつつ、常世の國を嚴彦や、世人を救ふ楠彦の、三人の神を従へて、波路遙かに太平の、海を渡りて月の國、フルの港に上陸し、印度の御國を乗り越えて、歩みに悩むフサの國、タールの都に出で給ふ。

吾勝命は、フサの國の首府タールの都に、日の出別神と現はれて、神政を執り行はせ給ひつつありき。言依別命はタールの都の日の出別神に面會し、神素盞鳴の大神のお隱宅を教へられ、喜び勇んで、玉彦、嚴彦、楠彦と共に駒に跨り、河鹿峠を越えさせ給ふ。意外の峻坂難路に、流石の駿馬も進みかね、幾度となく駒の轉倒せむとする危険を冒して、徐々と山頂目がけて進ませ給ふ。

この地一帯の山脈は、風烈しく、寒熱不順にして、百の草木の生育悪しく、見
渡す限り屹立せる岩山、禿山、此處彼處に起伏し、眺望としては天下の絶景なり。
神素盞鳴の大神は、ウブスナ山脈の頂上齋苑の高原に宮殿を造り、四方の神人
を言向和し給はむと、千種萬様に御姿を變じ、此宮殿を本據と定め、八十猛神を
して固く守らしめ、自らは表面罪人の名を負ひ給ひて、大八洲國に蟠まる大蛇、
悪鬼、醜の神々を根絶せむと心を碎き身を苦しめ、變幻出没極まり無く、斯くし
て御國を守らせ玉ひつつありき。言依別命は尊に拜謁し大御心を慰めむと、尊を
思ふ眞心より遙々此處に百千萬の艱苦を冒し、訪ね來り給ひける。河鹿峠を乗り
越えて再び平野を涉り、ウブスナ山脈に掛るが順路なり。言依別の一行は、板を
立てたる如き急坂を駒に跨り四人連、ハイ、ハイハイと手綱引締め下らせ給ふ折
柄に、俄に吹來るレコード破りの山嵐に煽られて、馬諸共に河鹿峠の千仞の谷間
に、脆くも墜落し給ひ、數多の傷を負はせ給ひ、茲に一行四人連、河鹿峠の谷底
に、痛手に悩み坤吟し給ふこそ果敢なけれ。

此谷間は河鹿の名所なり。河鹿の聲は遠近に床しく、恰も金鈴を振るが如く、

琴を弾ずるが如く、美妙の音楽を天人天女の來りて奏づるかと思ふ許りの雅趣に
充ち居るなり。言依別一行は谷水を掬ひ、河鹿の聲を聞き乍ら、心ゆく迄渴きし
喉を癒やさむとガブガブ嚙下し給へば、何時とはなしに玉の緒の行衛は何處と白
浪の谷の水音諸共に、河鹿の聲に送られて消え失せ給ふぞ悲しけれ。

夢とも分かず、現とも辨へ兼ねし旅の空、言依別命の一行は、涼しき河鹿の聲
に送られて夢路を辿る心持、風に吹かるる木の葉の如く、地を離れて中空を五色
の雲に包まれつ、東を指して風のまにまに出で給ふ。

とある高山の麓の風景最も佳き大河の邊に、一行の姿は何時の間にか下るされ
居たり。

言依別「オー玉彦、神素盞鳴の大神の御舎は、どの方面に當らうかなア。此處は
河鹿峠の山麓、河鹿河の岸邊と見える。暴風に吹捲られ、吾等は脆くも此山麓に
吹散らされ、何となく一種不可思議な心持になつて來たが、汝等はどう考へるか」
玉彦「仰の如く河鹿峠の烈風に煽られ、千尋の谷間へ轉落せしと思ふ間もなく、
風に木の葉の散る如き心地し、フワリフワリと魂は飛んで大空高く東を指して進

み來りしよと見る間に、不思議や吾等一行の身は、名も知れぬ山の麓の風光明媚の河縁に進んで來たのです。吾々が熟ら考へまするに、此處は決して河鹿峠の谷間ではありますまい、自轉倒島の中心點の様に思はれます」

嚴彦「さうだ、玉彦の言ふ通り合點の行かぬ四邊の光景、現界とは様子が大變に違つて居る様だ、大方此處は天國ではあるまいかいなア」

楠彦「たしかに天國に間違ありません、迦陵頻迦の數限りもなく、アレあの通に舞狂ふ有様、吹き來る風は美妙の音樂を奏し、空氣は何となく香ばしく梅花の香りを交へ、見るもの聞く物一として快感を與へないものは御座いませぬ。……もし言依別命様、御案じなさいますな、あなたの眞心を大神は御見ぬき遊ばして、斯かる天國に導き下さつたのでせう」

と語る折しも、天空を轟かして一道の光明と共に天の磐船に乗りて此場に下り來る神人あり。天の磐船は靜に一行が前に舞下りぬ。金銀珠玉、瑠璃、碑磔、瑪瑙、眞珠、珊瑚等を以て飾られたる立派なる御船なりき。翼を見れば絹でもなければ、毛でもない、一種異様の柔かき且強き織物にて造られてあり。手を伸べて此翼を

スウツと撫でる刹那に、得も言はれぬ美妙の音響が發するなり。玉彦は右左に翼に張り詰めたる織物を撫で廻せば、精巧なる蓄音機の圓板の如く、種々の美はしき音響聞え來る。此時磐船の中より現はれ出でたる八人の童子、頭髮は赤くして長く、肩のあたりに小さき翼あり、齒は濡烏の如く黒く染め、紅の唇、緑滴る眼容、桃色の頬に無限の笑を湛へ乍ら、五六才と覺しき童子、言依別命の前に現はれ來り、細き涼しき聲にて、

「貴下は瑞靈の分靈、常世の國に生まれし言依別命にましますや、吾は高天原より大神の命を奉じ、お迎へに來りし者、サ、サ、早くこの船に召させ給へ」と言葉を下し、禮を厚くして述べ立つるにぞ、命は何氣なく此美はしき船に心を奪はれ、ツカツカと側に近付き給ふよと見る間に、磐船の傍に装置せる美はしき翼、命の身體を包みて御船の中に入れ奉りけり。忽ち美妙の音響轟き渡ると見る間に、磐船は地上を離れ、ゆるやかに圓を描きつつ空中に上り行く。三人は突然の此出來事に呆然として空を見上ぐるのみなりき。磐船は空中高く舞上り、船首を轉じ、中空に帶の如き火線を印し乍ら、月の光を目當に悠々と進み、遂には

其姿も全く目に止らずなりにけり。

玉彦「常世の國から遙々と、鹽の八百路を渡り、あらゆる艱難と戦ひ、雨風に曝され、汗と涙でフサの都に到着し、日の出別の神様のお情深いお詞に、旅の疲れもスツカリ忘れ果て、河鹿峠の絶頂に辿り着いて四方の風景を眺めた時の愉快さは、何ともかとも譬へ方がなかつた。それより板壁の如き峻坂を駒に跨つて下つた時の心持は、全然地獄道の一足飛でもする様な煩悶と驚異に充たされ、心の中に神言を奏上し、やがて慕ひ奉る神素盞鳴尊様に拜謁が得られる事だと、一步一歩苦痛を忘れ樂しみ進む折しも、俄に吹き來る山嵐に煽られ、身は千仞の谷間に落ちて粉碎したと思へば、豈圖らむや通力自在の空中飛行、心イソイソ風雲に任ず折しも、思ひきや、斯かる美はしき川べりに下ろされた。どう考へても此處は現界ではあるまい、ヤレ嬉しやと思ふ間もなく、力に思ふ言依別命は、神の迎への船に乗りて、中空高く月の御國へ御上り遊ばした時の嬉しき、悲しき、非喜交々混る吾等が胸の中、ア、どうしたら宜からうか」

嚴彦「何事も神のまにまにお任せするより仕方がない、言依別命様は莊嚴極まり

なき天國てんごくに上のぼられ、大神おほかみの右みぎに座ざし、地上ちじやうの經綸けいりんを言問こととはせ給たまふお役やくと見みえる。

吾々われわれは最早もはや言依別命ことよりわけのみことさま様の事ことは斷念だんねんして、足あしの續つづく限かぎり進すすまうではないか、ナア楠

彦ひこサン

楠彦くすひこ「左様さやうで御座ございます、それにつけても、何なんとした氣分きぶんの良よい所ところでせう。何なんだ

か氣きがイソイソとして腰こしを下おろして休やすむ氣きにもなりませぬ、サア早はやく前ぜん進しん致いたしま

せう

と先さきに立たちて歩あゆみ出だした。淺あさき廣ひろき大おほ河かはは水すゐ晶しやうの水みづゆるやかに流ながれて居ゐる。三さん人にん

は、

「ア、ナント綺麗きれいな水みづだナア、是これが生いのち命のみことの眞清ましみづ水みづであらう。……どうでせう、

一杯いっぱい手に掬すくつて頂いたきませうか。身しん體たいの各所かくしよに澤山たくさんの、各めい自めい傷きずを負おうて居ゐますれば、

あの河かは中なかに浸ひたつて見みれば、この疼いた痛みも癒いえるかも知しれませぬぜ」

と堤つつみをゆるゆる下くだり、眞裸まっぱだかとなつて河かはにザンブと飛とび込んだ。清きよき流ながれの河かは水みづは、

河底かはそこの金銀色きんぎんしよくの砂利じやり、日光にづくわうに映えいじてきらめき亘わたる其美そのうるはしさ、三さん人にんは河かはの中央まんなかに

どつかと坐すわつた。深ふかさは坐すわつて乳ちちの邊あたりまでよりない。水みづの流ながれは緩ゆるやかに、冷つめた

からず、「ぬる」からず、水は名香を薰ずるが如く、味は甘露の如く、身體の傷は忽ち癒えて、肌は紫摩黄金の色と變じ、荒くれ男の肉體は淡雪の如く柔かく、光を放つに至つた。三人は暫くにして此川を上り、衣服を着替へむとした。不思議や三人の衣服は得も言はれぬ鮮花色に變じて居る。

玉彦「ヤア何時の間にか吾輩の御着衣を失敬しよつたな」
と其處をウロウロと探して居る。

楠彦「オー此處に綺麗な衣服が脱いである。恰度三組だ、これを着服したらどう

だらうなア」

嚴彦「ヤア止け止け、是れは天人の羽衣だ。ウツカリコンナ物を着やうものなら、それこそ折角の天國へ來た喜悅は忽ち變じて地獄道の苦みに早替りするかも知れない、……工事も惟神に任せて裸のまま進む事にせう。風暖かく、肌具合は良し、此儘に進まうではないか」

玉彦「ヨー此着物には、何だか印が附いて居るぞ」
と手に取上げ眺むれば、玉彦の衣と印してある。

玉彦「ヤア此れは妙だ、何時の間にか、吾輩の汗に滲んだ衣裳と、コンナ新しい美はしい衣裳と交換した奴がある見えるワイ、……ヨウヨウ是れには、楠彦、嚴彦と印してある、……吁、天國の泥棒は變つた者だなア、サツパリ娑婆とは逆様だ。娑婆に居る時には、自分の履き古した足駄と他人の新しい足駄と、黙つて交換する奴許りだが、天國は又趣が違うワイ」

嚴彦「そら、そうだらうよ、天國にはコンナ汚い物は珍らしいから、高天原の徴古館へでも飾る積りで、吾々が河中に現をぬかしてる間に、泥棒が取つ換へこを仕よつたのだらう、本當に油斷のならぬ世の中だ。天國へ來てもやつぱり元は人間の靈が來るのだから、泥棒根性は失せぬと見えるワイ、アハ、ハ、ハ、」

楠彦「ヤアナント輕い着物だなア、此れを着ると、體も輕くなつて、天へでも自然に舞上りさうだ。身輕になつたのは、氣分の好いものだなア」

玉彦「定まつた事だよ、幽靈の體は輕いものだ。此美はしい着物を着たが最後、現世の衣を脱いで、神界の羽衣と着替へたのだから、再び戀しき娑婆へ歸れない事は請合だ」

嚴彦「娑婆だつて、神界だつて構はぬぢやないか、兔も角、神様の爲に働ける丈働けば、吾々は人生の本分が盡せるのだ。サアサア行かう、……ヤア體も足も滅法界に軽くなつた。アア氣分も何となく、爽々として來た。神言を奏上し乍ら、往く所まで行かうかい」

と嚴彦は先に立つて進み出した。前方より頭髮漆の如く黒く、光澤豊に、身の丈は六尺許り眉目清秀の一神人、數多の美はしき鳥を數百羽引きつれ、金の杖を持つて指揮し乍ら此方に向つて進み來る。

玉彦「ヤ、何ンと綺麗な鳥が居るではないか、到底現界では、見られない、美はしいものだ」

かく言ふ中、件の男は一足一足近付き、三人を見て、

「ヤアあなたは高天原へ御參詣ですか」

と笑顔を以て、言葉優しく問ひかけた。

三人は聲を揃へて、

「ハイ、不思議の事で、吾々は斯様な立派な國へ思はず參りました。高天原は何

方を指して行けば宜しいでせうか」

男「マア急ぐ旅でもなし、この美はしい草の上で、皆サンゆつくりと休息を致しませうか、吾々は言依別の命様の命に依り、あなた方三人の方をお迎へに参りました」

玉彦「エー、ナント仰有います、言依別命様は、最早高天原へお着きになりましたか、それやマアどうした事で、そう早くお着きになつたでせう……ハテ……合

點の行かぬ事だワイ」

男「神界には時間空間は有りませぬ、假令幾億萬里と雖も、一息の間に往復が出來ます、それが即ち神界の特長で御座いませう。アハ、ハ、ハ、ハ」

茲に四人は美はしき花毛氈を敷き詰めた様な河邊の芝生に腰うち掛け、脚を伸ばして種々の話に耽るのであつた。風は音調淑やかなる笛を吹いて、河の面をよぎつて居る。魚鱗の波は金色の光を放ち、風に連れて河下より河上に流れ行く様に見えて居る。數多の美はしき鳥を熟視すれば、人の顔に翼の生えた「かつかう」鳥の様なものばかり、妙な聲を出して啖き出した。

嚴彦「モシモシ神界と云ふ所は、總の物が變つて居ますな、此鳥は又何として人間に似て居るのでせうか」

男「イヤ是れは人鳥と言ひます、高天原の玩弄物になつたり、或はお使をするものです、もとはヤハリ現界に居つて、高い所へ上つて譯の分らぬことを囀り、バカセだとか、何とか云ふ保護色や、長い嘴を使つて人間の頭をこついた報いで、コンナ者に變化して了つたのですよ、今年も殆ど三千八百羽幽界から輸入して來ました。みな言語は明瞭ではありませんが、各自に小賢しい事を喋る怪鳥ですよ」

嚴彦「そうすると是れは神界、天國の産物ではありませんか」

男「無論の事、コンナ畸形兒的鳥類は、神界には一羽も有りませぬ。此れは要するに閻魔の廳より、高天原には珍らしいと云つて、神界のお慰みの爲に、輸入されたものです、言はば、舶來ですな。アハ、ハ、ハ、」

嚴彦「兔も角も妙なものだ、此奴等は娑婆に居る時には、自由戀愛だとか、共和だとか、民衆だとか何とか言つて、澤山な娑婆の亡者を煽動した何々長とか云ふ怪鳥でせう。併し此綺麗な天國淨土に糞をひりさがされては、又もや娑婆の様に

なりはしますまいかなア」

男「イヤ大丈夫です、此奴の尻は最早糞詰りですから……娑婆に居る時には、何事も知つて知つて尻抜いた様な事を言つて、長い嘴を振りまはし、囀つては喰つて居ましたが、モウ娑婆でも此嘴が間に合はなくなつて口は詰り、尻は塞がり、行詰りの悲境に陥つてる代物です。娑婆でもあまり喰へないので、糞をこく種もなし、清潔なものですよ」

嚴彦「ソナ話を聞くと、吾々も生物識の聞嚙じり學問をやつて來たが、コソナ事になると思へば、ガツクリして胸も學々致しますワ、アハ、ハ、ハ、」

玉彦「一寸此鳥に物言はして見て下さいな」

男「ナンダか言語が通じ難いから、聞取れますまい、此奴は金鳥と云ひ、此奴は銀鳥と云ひます。娑婆で、椅子とか云ふ木に巢を作り、月給々々と鳴いたり、ホー俸給々々と囀つて居つた鳥ださうです。此天國へ輸入されてからと云ふものは、何だか鼠の病人の様にキウ窮と囀つて居ます」

數多の人鳥は、キウ窮、クウ苦々と鳴き乍ら、家鴨の様に河にバサバサと飛び

込み心地よげに「かいつぶり」の眞似をして、浮きつ沈みつ戯れて居る。

楠彦「ナント天國も變つたものですな、迦陵頻迦の名鳥が澤山居ると聞きました

が、其様な鳥は餘り見當らないぢやありませんか」

男「其鳥は高天原を中心として、十里四方の區域に限つて住んで居ます。此邊は

要するに準天國と云つても宜い様な所ですよ、まだまだ此先へお進みになれば、

立派な所があります。……私はウツカリとネームを申上げるのを忘れて居ました

が、實は高天原の使松彦と申す者、昔はエルサレムに於て、言靈別命にお仕へ致

した事のある言代別で御座います」

楠彦「ヤア昔語に聞いて居つた言代別はあなたの事ですか、ヤアこれはこれは妙

な所でお目に掛かりました」

松彦「然らば御案内致しませう」

と先に立つて行かむとする。

玉彦「もしもし松彦様、あの澤山な鳥は、連れてお歸りになりませぬか」

松彦「折角閻魔の廳より輸入されたものですが、十里四方の内には置く事が出来

ないと大神様の嚴命に依りて、十里圏外に送り出して來ました。……あの様な鳥族には少しも執着心はありませぬ、どうなつと勝手に方針を立てるでせう」
と足をはづませ、飛鳥の如くに進み行く。三人も何となく足許軽く、飛び立つ如くに追跡する。一時許り歩いたと思ふ頃、ピタリと岸壁に行當つた。此岩は鏡の岩と云つて、淨玻璃の鏡の如くに光り輝き、日光鏡面に映じて、得も云はれぬ美しさ、一行の姿は鏡に隈なく映つた。見れば自分の背後に五色の靈衣現はれ、優美にして、氣品高き女神が現はれて居る。三人は思はず合掌した。

松彦「此處が鏡の岩です。大抵の者は此處へ來りて、後へ引返す者が多いですよ。天國にも上中下と三段の區劃があります。此鏡を無事に通過すれば、最上の天國です。此鏡さへ突破すれば、モウ占めたものです」

玉彦「アー、それは有難う御座いました。併し乍ら吾々は、第二の天國を何時の間にも通過したのですか、まさか途中で天國の移轉と云ふ様な事もありますまいが

……」
松彦「あなた方は、言依別命様のお蔭に依りて、第三の天國は抜きにし、第二の

天國へ直接お下りになつたのです。夫れも第二天國の殆ど終點ですから、大した

ものですよ喜びなさいませ

三人「身分に過ぎたる有難き神様の御待遇、恐縮の至りだ、……此鏡岩をどう

して突破すれば可いでせうか

松彦「是より以内は宮の内、此鏡岩は外圍です、これを突破しなくては、最上天

國へ進む事は出来ませぬ。神界に於ても、斯う云ふ一つの苦しみがありますワイ。

吾々は幾度も此處を往復致して居りますから、勝手も分つて居りますが、あなた

方は始めての事各自に心をお開きになれば、自然に此鏡岩の通過が叶ひます。神

界の厳しき警告に依りて、此事ばかりは御教へ申す事は出来ませぬ、是れが神界

の關門、靈の試金石ですよ

三人は、

「ハテナア」

と雙手を組み、首を頂低る。

(大正一一・四・四 舊三・八 松村眞澄録)

第二〇章 五十世紀（五八七）

松彦の天使に伴はれた一行三人は、鏡の岩にピタリと行當り、如何にして此關所を突破せむかと首を傾けて、胸に問ひ心に掛け、首を上下左右に靜かに振り乍ら、やや當惑の體にて幾何かの時間を費やしめたり。

玉彦「吾々は現界に於ても、心の鏡が曇つてゐる爲に、萬事に付け行き當り勝ちだ、神界へ來ても矢張り當る身魂の性來と見える哩。ア、どうしたら宜からうな。見す見す引返す譯にも往かず、何とか本守護神も好い智慧を出して呉れさうなものだなア」

松彦「貴方はそれだから不可ないのでですよ。自分の垢を本守護神に塗付けるといふ事がありますか」

玉彦「吾々は常に聞いて居ります。本守護神が善であれば、肉體もそれに連れて感化され、靈肉共に清淨潔白になり天國に救はれると云ふ事を固く信じてみました。斯う九分九厘で最上天國に行けぬと云ふことは吾々の本守護神もどうやら怪

しいものだ。コラコラ本守護神、臍下丹田から出て来て、此の肉の宮を何故保護をせないのか、それでは本守護神の職責が盡せぬでは無いか。肉體天國へ行けば本守護神もが行ける道理だ。別に玉彦の徳許りでない、矢張本守護神の徳にもなるのだ。何をグズグズして居るのかいと握り拳を固めて臍の邊をポンポン叩く。

松彦「アハ、ハ、面白面白い」

玉彦「之は怪しからぬ、千思萬慮を盡し、如何にして此鐵壁を通過せむかと思案にくるのを見て、可笑しさうに吾々を嘲笑なさるのか、貴方も餘程吝な守護神が伏在して居ますな」

松彦「天國には恨みも無ければ悲しみも無い。亦嘲りもありませぬ。私の笑つたのは貴方の守護神が私の體を籍つて言はれたのですよ」

玉彦「さう聞けば、さうかも知れませぬ。これこれ嚴彦サン、楠彦サン、貴方がたの本守護神は何と仰有いますかな」

楠、嚴「アア未だに何とも御宣示がありません。茲暫らく御沈黙の爲體と見えま

す哩。斯うなると實に恥しいものだ。吾々の背後には立派な女神の守護神が鏡に寫るのが見える、有難い、吾々は何と云つても矢張身魂が立派だから、守護神もあの通り立派なと思う刹那、パツと消えて了つて後には靈衣さへ見えなくなつて了つた。ア、心の油斷といふものは恐ろしいものだナア」

松彦 「貴方がたは何か一つ落して来たものはありませんか」

「最早娑婆の執着心を捨てた以上は、落すも落さぬもありません。強つて落したと云へば執着心位のものでせうよ」

松彦 「イーエ、ソナナものぢやありませんか。貴方がたに取つて、高天原の關門を通過すれば容易に通過が出来ます」

玉彦 「コレコレ楠サン、嚴サン、お前たち何か落した物が思ひ出せないか」

嚴彦 「オー思ひ出した。河鹿峠を下る時に、大切な馬一匹と自分の肉體を一つ落して来た様に記憶が浮んで来る。落したと云つたら、マアソナ物だらう。もしもし松彦サン、馬の死骸や人間の死骸を拾つて来なくては此處が通過出来ないのですか」

松彦「さうです。馬の死骸と人間の死骸を拾つて來なさい。さうすれば容易に通過が出來ませう」

玉彦「一寸待つて下さい。貴方の仰有る事は少し脱線ぢやありませんか。斯の如き四面玲瓏たる天國に左様な穢苦しい死骸を持つて來てどうして關門が通過出來ませうか。清きが上にも清き天國に、死んだ馬を引ずつて來た處で乗る譯にも往かず、一足も歩く譯にも往くまいし、ハテ譯の分らぬ事を仰有ります哩」

松彦「サア其落した馬と人間の死骸を生かしさへすれば、立派に通過が出来るのだ。マア一寸本守護神と篤り御相談をなさいます。私はそれまで此處に待つて居ます」

玉彦「ヤア御忙しいのに濟みませぬな」

嚴彦（横手を打ち）「ヤア分つた分つた、本守護神の囁きに依つて、一切萬事解決が着いた。馬を落したと云ふ事は、心の駒の手綱が緩んで何處かへ逸走して了つたと云ふ事だつた。死骸を落したと云ふ事は吾々の身魂が天國の美はしき光景に憧憬れ魂を宙に飛ばして了つたといふ謎であつた。さうして最も一つ大事なの

は、神界旅行に必要な天津祝詞の奏上や神言の合奏であつた。箕賣が笠で「ひる」とは此事だ。現界に居る時は一生懸命に、宣傳歌を稱へ、天津祝詞の言靈を朝夕奏上したものだ。其言靈の奏上も、天國に自分も救はれ、數多の人を救はむが爲であつた。然るに其の目的たる天國に舞ひ上り乍ら、肝腎の宣傳使の身魂を何時の間にやら遺失して了ひ、心の駒は有頂天となつて空中に飛散して了つて居た。ア、天國と云ふ處は、油斷のならぬ處だな、結構な處の氣遣ひの處で怖い處だ。サアサア御一同様、天津祝詞を此鏡岩に向つて奏上致しませう」

と一同は夜の明けたる心地して、勇み立ち、天津祝詞を一心不亂になつて百度計り奏上した。鏡の岩は自然と左右に開かれ、坦々たる花を以て飾られたる、清き大道が現はれて來た。三人は聲を揃へて、

「ヤア松彦様、有難う御座いました。御蔭様で難關も無事に通過致しました。何分に馴れぬ神界の旅行、勝手も存じませぬから、何とぞ宜しく御世話下さいませ」

松彦「否々、貴方の事は貴方がおやりなさい。現界に於て貴方がたは、常に、人を杖に突くな、師匠を便りにするなと云つて廻つて居られたでせう」

三人は、

「アハ、ハ、ハ、餘り好い景色で氣分が良くなつて何も彼も忘れて了つた。さうすると矢張り執着心も必要だ」

松彦「それは決して執着心ではありませぬ。貴方がたの身魂を守る生命の綱ですよ。ヤア急いで参りませう」

向ふの方より、身の丈二尺ばかりの男女五人連、手を繋ぎ乍ら、ヒヨロヒヨロと此方に向つて進み来るあり。

玉彦「ヤア小さいお方が御出でたぞ。此處は小人島の様だな。天國にはコンナ小さい人間が住まつて居るのですか。ナア松彦サン」

松彦「何、神界許りか、現界も此通りですよ。一番圖抜けて大男と云はれるのが三尺内外一尺八寸もあれば一人前の人間だ。顯幽一致、現界に住まつてゐる人間の

靈體が此高原に遊びに来てゐるのだ。ああやつて手を繋いで歩かないと、鶴が出て来て、高い處へ持つて上るから、其難を防ぐ爲、ああやつて手を繋いで歩いて居るのだ」

玉彦「ハテ益々合點が往かなくなつて來た。吾々三人は、常世の國を振出しに、世界各国を股にかけ、現界は大抵跋渉した積りだが、何程小さき人間だと云つても六尺より低い男女は無かつた。赤ん坊だつてあれ位の背丈は、現界の人間なれば持つてゐますよ。貴方、何かの間違ひではありませんまいか」

松彦「六尺以上の人間の住まつて居つたのは、今より殆ど三十五萬年の昔の事だ。貴方が河鹿峠で歸幽してからは、最早三十五萬年を経過して居るのだ。現界は二十世紀といふ、魂の小さい人間が住まつて居た時代を超過し、既に三千年暮れてゐる。現界で云へば、キリストが現はれてから五十世紀の今日だ。世は漸次開けるに伴つて、地上の人間は勞苦を厭ひ、歩くのにも電車だとか、自動車、汽車、風車、羽車等に乗つて天地間を往來し、少しも手足を使はないものだから、身體は追ひ追ひと虚弱になつて最早五十世紀の今日では、コンナ弱々しい人間になつて了つたのだ。併し乍ら、十九世紀の終りから二十世紀にかけて芽を吹き出した、三三教の教を信じ不言實行に勉め、勞苦を樂しみとしてゐる人間の系統に限つて、夫れと反對に六尺以上の體軀を保ち、現幽神界に於て、神の生宮として活動して

ゐる三口人種もありませんよ」

三人「吾々は昨夜、河鹿峠で落命したと思つて居るのに、最早三十五萬年も暮れたのでせうか。如何に神界に時間が無いと云つても之は又餘り早いぢやありませんか」

松彦「サアお話は聖地に到着の上ゆつくりと致しませう。神様がお待兼ね、ぼつ

ぼつ参りませう」

と先に立つて歩み出した。三人は松彦の後にいそいそと随ひ行く。忽ち眼前に展

開せる湖水の岸に着いた。金波銀波洋々として魚鱗の如く日光に映じ、其壯觀譬

ふるに物なき程である。七寶珠玉を以て飾られたる目無堅間の御船は、幾十艘と

も無く浮んでゐる。松彦は、其中最も美はしき、新しき船にヒラリと飛び乗り、

三人に同乗を勧め、自ら櫓を操り乍ら、西南を指して波上豊に揺れ行く。湖面は

日光七色の波を以て彩どられたる如き波紋を描きつつ、船唄勇ましく聖地の高天

原を指して、勇み漕ぎ行く。波の彼方に、霞の上に浮いてゐる黄金の瓦、銀の柱、

眞珠、瑪瑙、珊瑚、瑠璃、琥珀、碑碓等の七寶を鏤めたる金殿玉樓は太陽の光に

瞬きて、六合を照す許りの莊麗を示してゐる。漸くにして船は一つの島に着いた。地上一面に敷かれたる金銀眞珠の清庭がある。東の門は巨大なる眞珠を以て固められ、西には瑪瑙の神門、南は瑠璃の神門、北には碑磔の神門を以て圍まれ、東北には白金の門、西南には白銀の門、西北には黄金の門、東南には瑪瑙の門を造られ、其他に、八の潛り門は各珍らしき寶玉を鑲められ、其壯觀美麗なる事、筆舌の能く盡す處ではない。松彦は先づ東門より三人を伴ひ、静々と進み入る。入口には眉目美はしき男女の天使、満面に笑を湛へて一行を歓迎しつつありき。彦は是等の美はしき天使に目禮し乍ら、三人と共に奥へ奥へと進み行く。

(大正一一・四・四 舊三・八 藤津久子録)

第二章 歸顯〔五八八〕

松彦一行は金砂、銀砂、眞珠を一面に敷きつめたる清庭を進む折しも、二三の

従者を伴なひ、黄錦の制服を着したる顔色美はしく、姿何處となく優美高尚なる
神人現はれ來り、莞爾として松彦に向ひ、

松彦殿、御苦勞なりしよ。先づ先づ奥にて休息あれ。オー玉彦、嚴彦、楠彦殿
よくマア御出で下さいました」

三柱は此聲の何とも言ひ得ぬ温味あるにフト顔を上げれば、河の邊にて別れた
る言依別の命なりける。

三人は驚き乍ら、

「ヤア貴神は言依別命様」

と言つたきり、嬉し涙をハラハラと流してゐる。言依別命は、

「御一同此方へ御出でなされ」

と先に立ちて歩み、緩やかに美はしき宮殿の階段を上り行く。

一行は恐る恐る後に續く。美はしき檜造りの宮殿の眞中央に、四人は据ゑられ
た。言依別命は數多の美はしき男女の侍神に命じ、玉杯に酒を盛り、珍らしき果
物を添へて差出し勧むる。一同は意外の待遇に狂喜し、身の措き所も知らず、何

となく心こころいそいそとして落着おちつきかねし風情ふせいなり。

寸時しばらく休憩きゅうけいの後のち、言依別命ことよりわけのみことは三人さんにんを伴ともなひ、木きの香薰かほれる美うるはしき廊下らうかを傳つたひて、奥おくへ奥おくへと伴ともなひ行く。言依別命ことよりわけは拍手はくしゅを終をはり、神言かみことを奏上そうじやうするや錦にしきの帳とほりをサツト押おし開ひらけ入り來きたる白髮はくはつの老神らうしん、莞爾くわんじとして一同いちどうの前に現あらはれ給たまひ、

汝なんぢ言依別命ことよりわけのみこと以下いか三人さんにんの神司かむつかさ、よくも参まゐりしよな。汝なんぢは此この高天原たかあまはらの莊嚴さうごんを胸底きよつてい深く疊たたみ込み、聖地せいちの状況じやうきやうを十分じふぶんに視察しさつし、數日すうじつ此處こに滯留たいりうして聖地せいちの空氣くうきを吸すひ身魂みたまを清きよめ、復ふたび現界げんかいに現あらはれ、汝なんぢが残りのこの使命しめいを果はたし、然しかして後のち改あらためて此處こへ歸かへり來こられよ。われこそは國祖國治立命こくそくにはるたちのみことなるぞ」

と儼げんとして犯をかすべからざる威容ゐように笑ゑみを湛たたへ、輕かるく一禮いちれいして奥殿おくでんに入いらせ給たまうた。言依別命ことよりわけ以下いか三人さんにんは、嬉うれしさに胸塞むねせまり、何なんの應答いらいへも「なく」ばかり、嬉うれし涙なみだに時ときの移うつるをも知らず俯向うつむきある。又またもや威嚴ゐげんの中なかに温情おんじやうの籠こもれる聲こゑにて、

汝なんぢ言依別命ことよりわけのみこと並ならびに玉彦命たまひこのみこと、嚴彦命いづひこのみこと、楠彦命くすひこのみこと、汝なんぢが至誠しせいは地ちの高天原たかあまはらに通つうじたり。悠悠いゆういゆう聖地せいちの状況じやうきやうを觀覽くわんらんし、復ふたた現界げんかいに復歸ふくきして汝なんぢが使命しめいを果はたせし上うへ、改あらためて此處こに歸かへり來きたれ。われこそは豐國姫神とよくにひめのかみの分靈わけたまいな伊都能賣いづのめの身魂みたま、神素盞鳴かむすさのをなるぞ」

と聲も涼しく宣らせ給へば、一同は思はず、ハツと頭を擡げ御顔を眺むれば、三五の月の御顔色譬ふるに物無き氣高さに、又もやハツと頭を下ぐる其の刹那、微妙の言葉につれて徐々と奥殿に入らせ給ふ後姿を遙に拜し奉り、又もや恭敬禮拜感謝の涙に咽びつつ、祝詞の聲も嬉し涙に濕る許りなりき。

この時何處よりもなく現はれ來る以前の天使松彦は、

松彦「ヤア皆様、結構でございました。大神様の命に依つて、これから神界の一部を御案内いたしませう。サア御出でなさいませ」

と御殿を下り、スタスタと進み行く。四人は松彦の後に續く。松彦は十重の高樓に四人を導き、四方の風景を指さして一々説明を與ふる。

金銀の波を湛へたる湖は四方を圍み、金銀の帆を張りたる五色の船は、右往左往に往來しつつありき。遙の彼方に浮かべる如く見ゆる松生茂る一つの島を示し、

松彦は、

「彼の島は三十八萬年の昔、顯恩郷と稱へて南天王の守り給ひし樂園でありました。大地の傾斜舊に復してより、今は御覽の如く低地は残らず湖水となり、唯高

山の頂いただきのみ頭あたまを現あらはし、今は國くに治立はる大神たちのおほかみの御安息場所おやすみばしよとなりました。彼のあきら

きらと輝かがやく光ひかりは、十曜とえうの神紋しんもんでございませす。

言依別ことよりわけ「三十八萬年さんじふはちまんねんとは、それは何時いつから計算けいさんしての年數ねんすうでございませすか」

松彦まつひこ「素盞鳴大神すさのをのおほかみ、天てんの高天原たかあまはらを神退かむやらひに退やらはれ給たまひし日ひより計算けいさんしての年數ねんすうで

ございませす」

言依別ことよりわけ「アア然しからば最早もはや數十萬年すふじふまんねんの年月ねんげつを經へたるか。はて不思議ふしぎ千萬せんばん、合點がてんの行ゆ

かぬことであるワイ」

松彦まつひこ「神界しんかいに時間じかんはありませぬ。これも現界げんかいより見ての年數ねんすうです。アレアレ四方よも

を御覽ごらんなさいませ。尊御退隱時代みことごたいいんじだいは、彼の波あなみの漂ただよふ邊あたりは残のこらず美うるはしき山やまでござ

いました。また少すこしく東ひがしに當あたつて小ちいさき、黒くろき影かげの見みえまするのは、古いにしへのシナ

イ山の頂さんでございませす。斯かくの如ごとく世態せたいは一變いつべんし、陸地りくちは大湖だいこ水すゐとなり、海うみの各かく

所しよに新あたらしき島嶼たうしよが續ぞく出しゆつしました」

と話はなす折をりしも、美うるはしき羽翼うよくを列ならべて十四五じふしごの鳥とり、此この十重とへの塔たふに翱かけ來きたり、五ご

人が前まへに羽根はねを休やすめける。

見れば鳥と見しは見誤りにて、羽根の生へたる小さき人間なりき。松彦は一同に向ひ、

「彼は天地の間を往來し、神々の御言葉を傳ふる使神であります。地上の世界は炎熱甚しく相成りたれば、今は罪輕き神人は残らず、日の御國に移住をすることになつてゐます。そのために空中郵便が開始され、つまり彼の使は三十世紀の昔に於ける郵便配達夫の役を勤むるものでございますよ。日の御國に御用がございませうれば、此處で手紙を御書きなさいませ。この十重の神殿は謂はば天と地との文書の往復を掌る一等郵便局のやうなものです」

言依別「吾々は神代の文字は知つてゐますが、今日の時代は文字も大變異つてゐませうね」

松彦「昔のやうに今日の時代は、毛筆や、鉛筆や、万年筆などの必要はありません。唯指先を以て空中に七十五聲の文字を記せば、配達夫は直に配達して呉れますよ。私が一つ手本を見せませう。この交通機關は廿一世紀の初期から開始されたのですよ」

と右の指を以て空中に七十五聲の片假名を綴りて、一つの語を作り、

「サア、これで手紙が書けました。文字が言語を發する時代となつて來ました」と言つて笑つてゐる。四人は耳を傾けて珍らしき文字の聲を聞かむと努めける。

文字の聲は音樂の如く聞え來たりぬ。其の文面に據れば、

「唯今地の高天原に誠の神の教を傳ふる言依別命、玉彦、嚴彦、楠彦の四柱が御出でになり、國治立の大神様、又神素盞鳴の大神様に御對面遊ばされ、唯今十重の高樓に御上がりになつて、四邊の景色を眺めてゐられます。天の高天原に於て此の方々に對して御用がございますれば、直に御返事を下さいませ。左様なら」と明瞭と聞えて來た。使の神は空中の文字をクルクルと巻き乍ら、羽根の間にはさみ、天空目蒐けて電光石火の如く飛び去りぬ。

松彦「今に御返事が参りませうよ。暫く四邊の景色を眺めて御待ち下さいませ」
三人は驚きて、

「モシ言依別の命さま、妙なものですなア。随分世の中も開けました。二十世紀時代の人間は文明の極致に達したとか、神界の祕密を探つたとか、時代を征服し

たとか言うて居た時代もありましたが、今日になつて見れば實に幼稚なものですな

と話しめる。此時以前の使は、電の如く此場に降り來たりぬ。而して松彦に空中返書を手渡し乍ら、又もや矢を射る如く東天指して翔け去りにける。其の文面に曰ふ。

「天の高天原より返事を致します。唯今御申越しの言依別命外三人は、未だ現界に盡す可き神業の數多あれば、一度現界へ御歸し下され度し。時代は三十五萬年の古に復して、河鹿峠の谷底へ歸顯せしめられ度し。右御返事申します。地の高天原の消息の司松彦殿」

と空中文字の返書が聲を發して、自然に物語りゐる。

玉彦「アア未來の世は結構だナア。吾々も此儘神界にゐたいものだが、アア三十五萬年の未だ苦勞を濟まさねば、此處へ來ることは出來ぬのかなア。ア、仕方ありません、左様なら、松彦様、これから御暇を致します」

松彦は、

「皆様、暫らく御待ち下さいませ。空中交通機を上げませう」
と又もや指先にて空中に、何事か記す其の刹那、金色燦然たる鳥の翼の如きもの
四組、何處ともなく此場に降り來たりぬ。

「サア之を御着けなされ」

と云ふより早く自然的に四人の肩の邊りに、金色の翼はピタリと【くいつき】た
り。四人は一度に、

「アアこれは立派だナア」

と羽ばたきを試むるや、身は益々高く空中に飛び揚がり、一瀉千里の勢を以て電
波よりも早く、西の空を目蒐けて進み行く。眼下に横たはる四人の肉體、ハツと
見下す途端に吾に振り返り四邊を見れば、河鹿河の谷底に倒れ居たるなり。乗り來し
駒は如何に見れば、無心の馬は河邊の青草をグイグイと【むし】りゐたりける。
言依別「アア暫くの間の間、氣が遠くなつたと思へば、有り難い、高天原の状況やら、
數十萬年後の世界の状況を見せて貰つた。これも全く國治立尊、神素盞鳴尊の廣
き、厚き御恵みだ。サア一同此處に禊身を修し、天津祝詞を奏上して、潔く大神

の御隠退場に参向致しませう』
と身を浄め、口を嗽ぎ拍手の聲勇ましく、天津祝詞を奏上し終つて又もや駒にヒ
ラリと跨り、天馬空を驅ける如く、身も軽々しく坂道指して、道なき小柴の山中
を一目散に上り行く。

(大正一一・四・四 舊三・八 外山豊二録)

第二章 和と戦(五八九)

言依別命は不思議の事より神界を探険し再び正氣に立ち復り給ひて、玉彦、嚴
彦、楠彦諸共に、駒に鞭ち【しと】しととウブスナ山脈を神素盞鳴大神の御舎指
して進み行く。

山上の御舎は何れも丸木柱を以て造られありぬ。用材は檜、杉、松、樅其他種々
の木をあしらひ、餘り廣からず狭からず何とも言へぬ風流なる草葺の屋根、幾棟

となく立ち並び居たり。一行四人は門前に到着し、馬をヒラリと飛び下りて大音聲に、

「頼まう頼まう」

と訪なへば、

「應」

と答へて大の男三四人、門を左右にパツと開き、四人の姿を見るより、

「ヨー、これはこれは、能く入らせられました。只今高天原よりの急報に依り貴

使等四人當邸に現はれますと承はりお待ち申して居りました。サアサ御這入り下

さいませ、御案内致しませう。私は八十猛の神の長を勤むるもの、國武彦と申す

もので御座います」

と言ひつつ先に立つてドスンドスンと地響きさせ乍ら奥へ奥へと案内したり。

本宅と覺しき館の玄關口に佇み、國武彦は、

「アア八島主様、言依別命御一行がお出でになりました」

と言葉終ると共に玄關の襖はサラリと開かれたり。

國武彦「サアサアこれが命様の御本殿で御座います、御遠慮なく御上り下さいませ」

と案内する。

「然らば御免」

と一同は奥へ奥へと進み入る。容色麗しき二人の美人此場に現はれしを能く能く

見れば愛子姫、幾代姫なりき。

言依別「アア貴神は顯恩郷に坐ませし尊の御娘子、愛子姫、幾代姫様では御座ら

ぬか」

「ハイ、左様で御座います、能くマアお越し下さいました」

「妾は仰せの如く幾代姫で御座います、何卒御悠りと御休息下さいませ。妾の父

は天下蒼生の爲めに、ここ十日許り以前に館を立ち出で、常世の國さして行く

申して出られました。折角のお訪ねで御座いまするが父は生憎の不在なれども、

妾が兄八島主父の代理として留守を致して居りますれば、何卒ゆるりとお話し下

さいます様に」

言依別「ア、左様で御座るか、之は惜しい事を致した。イヤ先程御父上に地の高天原に於て拜顔を得ました」

愛子姫、幾代姫一度に、

「エ、父にお會ひで御座いましたか、それは何れの地方に於て」

言依別「ハイ、地の高天原に於て三十五萬年の未來に麗しき御尊顔を拜しました」

「ア、左様で御座いましたか、それはそれは都合の好い事で御座いましたナア。

父は何と申しましたか」

言依別「イヤ吾々には未だ現界に於て盡すべき神務あれば、三十五萬年の昔に立

ち復り現界的神業を盡せよとの御嚴命で御座いましたよ。イヤもう罪の深い吾々、

容易に高天原へ參る事は出来ませぬ」

玉彦、嚴彦、楠彦、三人一度に、

「オー貴女は神様の御娘子で御座いましたか、私共は言依別の命様の御供致すも

の常世の國に於て生まれましたる、はした者に御座います。何卒以後はお見捨なく

御昵懇に御指導を願ひ上げ奉ります」

と慇懃に挨拶する。

「御挨拶は却て痛み入ります、妾は、たらはぬ女の身、何卒御見捨なく何時々々迄も御昵懇に願ひ度う御座います」
と頭を下ぐる。此時、眼清く眉秀で鼻筋通り口許しまり桃色の顔、鼻下の八字髭及び下顎の垂髯を揉みつつ徐々と入り来り、一行の前に端坐し、叮嚀に會釋し乍ら、

「私は八島主で御座います。貴使は噂に高き言依別の命様、遠路の處遙々能く御越し下さいました。吾父が在しましたならばどれ程喜ぶ事で御座いませう」

と目を瞬き、そつと涙を拭ふ。一同は何となく八島主の態度につまされて哀れを催し涙の袖を絞り居る。此時菊子姫は二人の侍女を伴ひ、

「御一同様、御飯の用意が出来ました、何卒此方へ御越し下さいませ」

と挨拶する。主人側の八島主を始め四人は菊子姫の後に従つて奥の別室に進み入る。別室の入口には龜彦、梅彦、愛子姫、幾代姫の四人が叮嚀に端坐し頭を下げ一行を迎へ居る。ここに一場の晩餐會は催され、果實の酒に心勇み一同は代る代

る小聲に謠を唄ひ、菊子姫は長袖しとやかに舞曲を演じて興を添へにける。

日は漸く西に没れて夕暮告ぐる諸鳥の聲、淋し氣に聞え來たる。時しもあれ、慌しく此場に現はれたる八十猛の神は、

「八島主の命様に申し上げます、只今バラモンの大棟梁鬼雲彦なるもの、鬼搦を先頭に數多の魔軍を引率し、當館を十重二十重に取圍み雨の如くに矢を射かけ、又決死隊と見えて數百の荒武者男、長劍長槍を閃かしドツと許りに攻め寄せました。當館の猛將國武彦は館内の味方を残らず寄せ集め、防戦に力を盡して居りまされど、敵の勢刻々に加はり味方は僅かに二十有餘人、敵の大軍は衆を恃んで闘を作り、一の館、二の館、三の館は最早彼等の占領する處となりました。國武彦は群がる敵に長劍を引き抜き立ち向ひ、縦横無盡に斬りたて雑たて防ぎ戦へども、敵は眼に餘る大軍、勝敗の數は歴然たるもの、御主人様、此處に居まし候ては御身の一大事、一時も早く裏門より峰傳ひにビワの湖に逃れ出で、コーカス山に忍ばせ給へ、敵は間近く押し寄せました。サアサ早く御用意あれ」と注進するを、八島主は少も騒がず、

「ホー、汝八十猛の神、能きに取計らへよ、吾は遠來の客を待遇さねばならぬ。汝は國武彦と共に防戦の用意を致すが宜からうぞ」

「これは主人様のお言葉では御座いまするが、危機一髪の場合、左様な呑氣な事を申して居られませうか。最早第三の館まで敵に占領され、又國武彦は身に數槍を負ひ苦戦の最中で御座います。味方は大半討死致した様で御座います。何卒一時も早くお客さまと共に此場をお逃れ下さいませ」

「アツハ、、、面白い事が出来たものだ、御父の留守を窺ひ、弱身につけ込む風の神、高が知れたる鬼雲彦の軍勢、假令百萬騎、千萬騎一度に攻め來るとも、八島主が一本の指先の力にて、縦横無盡にかけ惱まし一泡吹かせて呉れむ、汝は表に駆け向ひ、汝としての力限りを盡せよ。ヤアヤア皆様、敵軍の攻め來り騒ぐ有様を酒の肴と致して、ゆるりと飲みませう、時にとつての一興、何もお慰みで御座います。敵の襲來なりと見物して御心を慰め下さいませ」

言依別命は、

「アツハ、、、ヤア面白い事が出来ました、もう少し近寄つて呉れますれば見

物に都合が宜しいが、此處は確か八つ目の御館、まだ四棟も隔てて居りますれば先づ先づ安全地帯、乍然一利あれば一害あり、危険な目に遇はねば面白い事は見られませぬ哩、アハ、ハ、ハ、

龜彦、梅彦肩を怒らし臂を張り、顔色物凄く呼吸を喘ませ乍ら、

「これはこれは八島主様、言依別様、お二方は狂氣召されたか、此場に臨んで何を悠々と、お酒どころの騒ぎぢや御座いますまい。サアサ防戦の用意をなさいませ。吾々は生命を的に奮戦致し、攻め来る奴輩を片端より斬りたて薙散らし、一泡吹かせて呉れむ」

と言ふより早く長押の長刀、梅彦はおつ取り表へ出でむとす。龜彦は長劍を引き抜き、亦もや行かむとす。愛子姫は二人の足にヒラリと綱をかけ後に引いた。行かむとする勢に、力は上半身に満ち下半身は蝉の脱け殻の如くなつた足許を引掛けられ、スツテンドウと座敷の真中にひっくり覆りける。

龜彦「千騎一騎の此場合、何を悪戯遊ばす、猶豫に及ばば御身の一大事、サアサ姫様達は一刻も早く裏門より落ちのびなさい。菊子姫殿、幾代姫殿、サアサ早

早く。吾は之より表に駆け出し、細腕の續く限り奮戦せむ
と又もや起き上り、勢こんで表に行かむとす。

八島主は悠然として、

「アハ、ハ、ハ、皆様、敵の騒ぎを見ずとも味方の狂言で澤山で御座います哩。ヤ
アヤア龜彦、梅彦先づ一杯召し上れ」
と杯をつき出す。梅彦はかぶりを振り乍ら、

「エーエ、又しても氣樂な御主人様、ソナナ處で御座いませうか、サアサ早く逃
るか進むか、二つに一つの間髪を入れざる場合で御座れば、何れへなりと御覺悟
あつて然るべし」

と言ひ捨てて二人は表を指して韋駄天走りに進み行く。最早敵は第五の館を占領
し第六に向はむとする時なりき。

八十猛の神は又もや血相を變へて顔面に血を流し乍ら走り來り、
「申し上げます、最早敵は第六の館に迫りました、勝敗の數は已に決す、一時も
早く御落ち延び下さいませ。吾等は生命のつづく限り奮戦し相果つる覺悟で御座

います」

八島主は平然として、

「ヤア八十猛か、御苦勞であつたのう、先づ、ゆつくり酒でも飲んで働くが宜からうよ」

八十猛は息を喘ませ乍ら、

「ソ、ソ、それは何を仰しやります、酒どこの騒ぎですか、國家の興亡此瞬間に迫る、酒も喉が通りませぬ」

言依別「アハ、ハ、ハ、八島主の命様、随分貴使の御家來には勇將猛卒が居りますね、勇將の下に弱卒なし、イヤもう感心致しました」

「イヤ、さう言はれては返す言葉も御座いませぬ、彼等の周章狼狽の醜態、お目に懸けまして誠に恥入る次第で御座います。吾々は敵の攻撃に任せ無抵抗主義をとるもの、元より勝敗の數は歴然たるものに御座いますれば、何程慌た處で結果は同じ事ですよ、先づは刹那心を樂しませう。一刻先は分つたものぢやありません、ア、ハ、ハ、ハ、」

又もや酒をグビリグビリと飲んで居る。日頃狼狽者の玉彦、嚴彦、楠彦も神界旅行の經驗を得てより何となく心落ち着きしと見え、此騷動を殆んど感知せざるもの如く、悠々として箸をとり、贖の酒に舌鼓を打ち私かに鼻唄を謡つて居る。愛子姫は一絃琴をとり出し聲も淑やかに謡ひ出した。

菊子姫さま、幾代姫さま、貴女一つ舞うて下さいな。遠來の御客様に餘り殺風景な處をお目に懸けて濟まないから、一つ花やかな處を御覽に入れて下さい、妾が謡ひませう

菊子姫、幾代姫は、

「あい」

と答へて仕度にとりかかり淑やかに舞ひ始めたり。表は修羅道の戦ひ。奥の一室は悠々たる春の花見の如く、秋の夜の月見の如く静まりかへつて、笑ひの聲屋外に洩れ居たり。

鬼雲彦は血糊の着いた槍を扱き乍ら阿修羅王の如く此場に現はれ來り、ヤア斯くなる上は最早敵ふまい、サア尋常に切腹致すか、但は此方が槍の錆に

して與らうか、サアサア返答は如何じやどう」

と息巻いて居る。鬼雲彦おにくもひこに續いて鬼搦おにつかみは此場このばに又もや現あらはれ來り、

「さしも豪傑かうけつと聞きこえたる八十猛やそたける、國武彦くにたけひこは吾手わがてにかかつて脆もろくも討死うちじにいたしたれば、

最早叶もはやかなはぬ百年目ひやくねんめ、サア尋常じんじやうに切腹せつぷく致いたすか、但ただしは此方このほうが手てを下くださうか、サア返答へんたふ

致いたせ」

八島主やしまぬし「アツハ、、、」

言依別ことよりわけ「オツホ、、、何なんと面白おもしろい藝當げいたうでは御座ござらぬか、千兩役者せんりやうやくしやも跣足はだしで逃にげ

出だします哩わい、ワツハツハ、、、」

玉彦たまひこ「ヨ、鬼雲彦おにくもひこの御大將おんたいしやう、バラモン教けうは随分強ずぶんつよい方かたが居ゐますな、吾々われわれは三五あななひ

教けうの宣傳使せんでんし、いや、とてもとても貴方あなたのお相手あひては餘あんなり馬鹿ばからしうてなりませぬ哩わい、

アツハツハ、、、」

嚴彦いづひこ「ヤア鉛なまりで造つくつた仁王にわうの樣やうに随分立派ずぶんりつぱなスタイルですな、ワツハ、、、」

楠彦くすひこ「ホ、立派りつぱな者ものだ、節ふしくれ立たつたり、氣張きばつたり、閻魔えんまの廳ちやうからやつて來きた

お使つかいの樣やうだ。ヤア酒さけの肴さかなに面白おもしろい事ことを見みせて頂いたきます哩わい、ハツハ、、、」

愛子姫「オホ、、、あの鬼雲彦さまとやらの、立派のお顔わいな、鬼搦サンのあの氣張り様」

「ホ、、、」

鬼雲彦、座敷の眞中に突立ち乍ら團栗眼をグリグリ回轉させ、

「此場に及んで何を吐かず、其方は氣が狂うたか、哀れ至極の者だ、ワツハツ

ハ、、、」

と豪傑笑ひをする。鬼雲彦は肩を揺り乍ら又もや、

「ワツハ、、、チエツへ、、、心地良やな、バラモン教の運の開け口、此館

が手に入るからは、最早三五教は寂滅爲樂、扱も扱も、憐れな者だワイ、ワツ

ハ、、、」

と無理に肩をしやくり豪傑笑ひを續けて居る。八島主命は右の食指を又ツと前に

突出し、

「ヤア鬼雲彦一同の者共、能つく聞け、兩刃の長劍の神の生身魂、熊野楠日の神

とは吾事なるぞ、八島主とは此世を忍ぶ假の名、サアサア一時も早く改心致すか、

返答は如何ぢやへんたふ どう」

鬼雲彦、大口開けて高笑ひ、
おにくもひこ おほぐち あ たかわら

「ワツハ、々々、吐かしたりな吐かしたりな、此期に及んで何の繰言、引かれ者の小唄とは汝の事、エー面倒だ、片つ端から血祭りに致して呉れむ、ヤア者共、之等一座の男女の木つ端武者を討ち滅せよ」
これら いちぎ なんによ こ ぱ むしや うち ほろほ

と下知すれば、

「ハツ」

と答えて四方より魔軍の將卒驅け集まり前後左右に詰めかくる。八島主は右手を伸ばし、

「ウン」

と一聲、言靈の力に鬼雲彦始め一同は將棋倒しにバタバタと其場に倒れ、身體硬直して石地藏の如く硬化したり。
よく いしぎみう かくわ

八島主「ワツハ、々々」
やしまぬし

言依別「ヤア面白い面白い、廢せば良いのに入らぬチヨツカイを出しよつて、此

ありさま なにごと
有様は何事だ。 サア玉彦、 巖彦、 楠彦、 汝等は彼等に向つて宣傳を致すが良から
う

三人は、

「ハア」

と答へて起ち上り、 バツタリと倒れて身動きもならず苦しめる鬼雲彦、 鬼摺の前
に突立ち、

「アハ、ハ、ハ、ア、愉快な事じゃ、 否氣の毒なものだな」

三人は頸から上の靈縛を解いた。 鬼雲彦、 鬼摺を始め數多の勇將猛卒は頸許り
前後左右に振り廻し、 何事か頻りに呟いて居る。 此時表の方より國武彦、 八十猛
の兩人現はれ來り、

「御主人に申し上げます、 雲霞の如き大軍に味方は僅二十有餘人、 暫時は挑み戦ひ
しが、 衆寡敵せず、 進退維谷まり味方の敗亡瞬時に迫る折から、 天の一方より巨
大の火光降り來り、 敵の軍中に落下するよと見れば、 思ひきや日の出神の宣傳使、
數多の神軍を引率して忽然として現はれ、 群がる敵に言靈の爆弾を浴びせかけ給

へば、敵は獲物を大地に投げ捨て、「頭が痛し、胸苦し」と叫び乍ら残らず大地に打倒れ身體硬直した儘、操り人形の如くに首を打振る可笑しさ、いやもう結構な御神徳を戴きました。ホー此處にも大將株が倒れて居りますね、これはしたり、妙な事もあればあるもので御座る哩、アハ、ハ、ハ、ハ、」

言依別「吾々は天下無敵主義を標榜するもの、彼等と雖も矢張天地の神の御水火より現はれ出でたる青人草、一人でも惱め苦しむる事は法の許さぬ處、萬々一敵軍の中に於て一人たりとも負傷者あらば助けてやらねばなりませんまい」

八島主「御尤もで御座る、サア御苦勞乍ら玉彦様、貴方一人で結構ですから一度敵味方の負傷者の有無を調べて下さい」

玉彦は、

「承知致しました」

と早くも起つて表へ駆け出し、彼方此方に負傷して血を流し苦しむ軍卒を片つ端から數歌を謠ひ乍ら、残らず癒やし廻りぬ。而して玉彦は一同の前に聲を張り上げて宣傳歌を謠ひ聞かしけるに、何れも歌の耳に入るや、惡の守護神の頭に厳し

く應へしと見えて益々苦悶の呻り聲高くなり行く。奥の一室には鬼雲彦、鬼搦其
他の猛將勇卒に向つて嚴彦、楠彦は宣傳歌を宣り聞かしめる。鬼雲彦は此歌を聞
くより益々苦悶し始め流汗淋漓、青息吐息を吹き立て目を剥き藻掻く可笑しさ。
言依別「如何しても身魂の因縁と言ふものは争はれぬものだナア。何程結構な教
を聞いてやつた處で、身魂があはねば歸順させる事が出来ぬと見える。人には人
の食ふ食物があり、牛には牛、獅子には獅子、猫には猫、糞蟲には糞蟲の食糧が
惟神的に定つてる様に、教の餌も其通りだと見える。人間の食ふべき食物を牛馬
に與ふるのは却て彼等を苦しめる様なものだ。縁なき衆生は濟度し難し、惡神は
惡神相當の安心を以て居るでせう、何程彼等を救ふてやり度いと思つてもこれは
到底駄目でせうよ、再び敵たはぬ様にして歸して與りませうかい」
八島主「貴使の御説、御尤もで御座る。然らば腰より上は暫らく元の硬直状態に
して置いて足のみ自由を許して與りませう」
と言ひ乍ら八島主は立ち上り示指をグツと前に差し出し空中に圓を描いて、
「半日の間、腰から上は靈縛を加ふ、腰から以下は自由を許す」

との聲こゑの下したより今迄氷柱いままですいてはしらの如ごとくなつて居た手足てあしは「く」の字じに曲まがりムクムクと起たつて、首くびを据すゑたまま、手てを垂直すゐちよくしたものの、片手かたてを振り上あげたもの、種々しゆじゆさまさま様々の珍姿怪態ちんしくわいたいの陳列場ちんれつぢやうを開設かいせつし、一目散いちもくさんに門外もんぐわいさして先さきを争あらしひ逃にげ出だす。玉彦たまひこは此態このていを見て吹ふき出だし、

「ヤア此奴こいつは良い工夫くふうだ。オイ數多あまたの魔軍共まぐんども、之これより一日いちにちの間あひだ、腰こしより上うへは靈縛れいばくを加くはへ置おく、腰こしより下したは汝等なんぢらが勝手かつてたるべし、許ゆるす」
と云いふ言葉ことばの下もとに彼等かれらの足あしは動うごき出だしたり。一同いちどうは足あしの自由じゆうとなりしを幸さいひひ腰こしから上うへは材木さいもくの様やうにビクともせず、足あしのみ忙いそがしく門外もんぐわいさしてウンともスンとも得言えいはず、コソコソと此場このばを逃にげ去さりにけり。

（大正一一・四・四 舊三・八 於錦水亭 北村隆光録）

ぬ。

言依別命は、八島主の天使其他の天使と別れを告げ、後日の面會を約したまひ

清き心の玉彦や 月日の影は叢雲を

四方に掻き分け嚴彦や 神の御稜威も彌深く

高く奇しき楠彦の 廣き恵を三人連れ

神素盞鳴の大神の 留守の館を後にして

千里の馬に跨がりつ 轡の音も勇ましく

手綱掻い繰りシトシトと 瑞の御魂の三つの坂

心の駒も乗る駒も いと勇ましくシヤンシヤンと

聲も涼しき琵琶の湖 濱邊を指して下り行く

浪も長閑な海原を 駒諸共に船の中

浪を分けてぞ進みける 折から吹き来る東南の

風に眞帆をば掲げつつ 船脚早くコウカスの

山の麓へ紀の港

此處に御船を横たへて

又もや駒に打ち乗りて

さしもに嶮しき嶮道を

シヤンコ シヤンコと登りつつ 君の便りも松代姫

神の御前に平伏して 祈る誠も麻柱の

神の教の宣傳使 言依別を始めとし

玉彦嚴彦楠彦の 三つの御魂の神司

此場に漸く現はれて 社の前の常磐木に

駒を繋ぎて静々と 境内さして進み入り

四人一度に大前に 頸根つきぬき畏まり

打つ拍手の音も清く 詔る言靈はさやさやと

水の流るる如くなり 折しも御前に額づきて

皇大神の身の上を 守らせたまへ國治立の

神の命の大前に 乞ひのみまつる姫神の

聲も涼しき太祝詞 清しく言靈宣り終へて

静々御階段を下り來る
階下を見ればこは如何に

誠一つの麻柱の
神の使の宣傳使

言依別の一行が
此場にあるに心づき

慌てて御階段をかけ下り
四人の前に平伏して

神素盞鳴の大神の
御身の上は如何にぞと

問ふ言の葉も涙聲
心の闇ぞ哀れなる

言依別の宣傳使
神素盞鳴の大神の

其消息を詳細に
包まず隠さず宣りつれば

松代の姫は雀躍りし
嗚呼有難し有難し

皇大神の御恵と
又もや御階段を駆け上り

心静めて皇神の
深き恵を嬉しみて

感謝するこそ殊勝なれ
神が表に現はれて

善と悪とを立て分ける
此世を造りし神直日

心も廣き大直日
唯何事も現世は

直日に見直せ聞き直せ 世の曲事は宣り直す
 三教の神の道 四方の國々照り渡る
 其功績ぞ尊けれ 古き神代の物語
 十五の巻を述べ終へし 大正壬戌の春
 陰曆彌生の上八日 新の四月の上四日
 神代を明かす言の葉も 五百九十の節も今
 緯織なす瑞月が 横に臥しつづ呉竹の
 節さへ合はぬ七五調 岩より加藤村肝の
 心定めて千早振 古き神代の因縁を
 此處に新に説き明かす 今日けふの生日いくひぞ尊けれ
 今日けふの生日いくひぞ目出たけれ。

（大正一一・四・四 舊三・八 加藤明子録）

（昭和一〇・三・二五 王仁校正）

神靈界の狀態は

肉體人の住居せる

世界と萬事相似たり

平野山嶽丘陵や

岩石溪谷水に火に

草木の片葉に至るまで

外形上より見る時は

何等變りし處なし

されども是等の諸々は

起源を一切靈界に

採りたる故に天人や

精靈のみの眼に入りて

肉體人の見るを得ず

形體的の存在は

自然的起源を保有する

現界人のみ之を見る

顯幽區別は明かに

神の立てたる法則也

それ故現世の人々は

靈界事象を見るを得ず

精靈界に入りし時

神の許しを蒙りて

詳しく見聞するものぞ
是に反して天人や

精靈界に入りし者は
また現界や自然界

事物を見ること不能なり
鎮魂歸神の妙法に

よりて人間の體を藉り
憑依せし時漸くに

現界の一部を見聞し
人に對して物語り

爲し遂げらるるものぞかし
如何となれば肉體人の目は

形體界の光明を
受くるに適し天人や

精靈の眼は天界の
光明を受くるに適すべく

造り爲されし爲ぞかし
而も兩者の眼目より

外面全く相似たり
靈界の性相斯の如く

造られたるを自然界の
人の會得し能はざるは

是また止むを得ざるべし
外感上の人々は

その肉眼に見る所
手足の觸覺視覺等に

取入れ得らるるその外は
容易に信じ得ざるなり

現界人は斯の如き
故に全くその思想
靈的ならず靈界と
如上の如き相似あれば
かつて生れし故郷や
尚も住居する者なりと
此の故人は死を呼びて
相似の國へ往くと謂ふ。

事物に基づき思考する
物質的に偏よりて
現實界とのその間に

人は死したる後の身も
離れ來たりし世の中に
誰人とても思ふ可し
是より彼世の靈界の

現實界を後にして
その状態を死と稱す
身魂に屬せし悉を

精靈界に移る時
死し行くものは一切の
靈界さして持ちて行く

物質的の形骸は腐朽し去れば残すなり

死後の生涯に入れる時 現實界にありし如

同じ形の身體を 保ちて何等の相違なく

打見る所塵身と 靈身に何等の區別なし

されど其實身體は 既に靈的活動し

物質的の事物より 分離し純化し清らけく

靈的事物の相接し 相見る状態は現界の

相觸れ相見る如くなり 精靈界に入りし後も

凡ての人は現界に 保ちし時の肉體に

あるものの如思ひ詰め 我身のかつて死去したる

その消息を忘るなり 精靈界に入りし後も

人は依然と現界に ありて感受せる肉的や

外的感覺保有して 見ること聞くこと言ふことも

嗅ぐこと味はひ觸るること 残らず現世の如くなり

精靈界に身をおくも

名位壽富の願ひあり

思索し省み感動し

愛し意識し學術を

好みしものは讀書もし

著述を勵む身魂あり

換言すれば死と言ふは

此より彼に移るのみ

その身に保てる一切の

事物を到る先々へ

持ち行き活躍すれば也

故に死すると言ふことは

物質的の形體の

死滅をいふに過ぎずして

自己本來の生命を

決して失ふものならず

再び神の意志に由り

現世に生れ來る時は

以前の記憶の一切は

忘却さるるものなれど

こは刑罰の一種にて

如何ともする術はなし

一度靈界へ復活し

またもや娑婆に生るるは

神靈界より見る時は

凡て不幸の身魂なり

人は現世に在る間に

五倫五常の道を踏み

神かみを敬つやまひ世よを救すくひ 神かみの御み子こたる天てん職しよくを
 竭つくしおかねば死しして後のち 中ちゆう有う界かいに踏ふみ迷まよひ
 或あるは根ね底そこの地ぢ獄ごく道だう 種いろ々いろ雜ざ多たの苦くるしみを
 受うくるものぞと覺かく悟ごして 眞まことの神かみを信しん仰かうし
 善ぜんを行おこなひ美びを盡つくし 人ひとの人ひとたる本ほん分ぶんを
 力ちから限かぎりに努つとめつつ 永えい遠ゑん無む窮きうの天てん國こくへ
 樂たのしく上のほり進すすみ行ゆく 用よう意いを怠おこたること勿なかれ
 顯けん幽いう一いつ致ち生せい死し不ふ二じ 輕けい生せい重じゆう死しも道みちならず
 重ぢゆう生せい輕けい死し亦また惡わるし 刹せつ那な々な々なに身しん魂こんを
 研みがき清きよめて神しん界かいと 現げん實じつ界かいの萬ばん物ぶつの
 大だい經けい綸りんの神しん業げふに 盡つくせよ盡つくせよ惟かむ神ながら
 神かみのまにまに述のべておく

大正十一年十一月十七日

）
）
）
）
）
）
）
）
）
）

靈界物語 第一五卷 如意寶珠 寅の巻

終り